# 北強文集

第一輯

始

# 北強文集第一輯

10-303

# 北強文集　第一輯

大正
7. 9. 17
内交

# 北發文集　第一輯

大正十年十月

## 口繪、題字、序文、目次


（一）著者桑島北强寫眞及題詩
（二）外務大臣男爵後藤新平閣下、前農商務大臣河野廣中閣下寫眞
（三）神奈川縣知事有吉忠一閣下、前横濱市長安藤謙介閣下寫眞
（四）大谷嘉兵衞君、小野光景君、木村利右衞門君、增田嘉兵衞君、阿部幸兵衞君、寫眞
（五）口繪寫眞の解
（六）法學博士子爵田尻稻次郎閣下題字
（七）河野廣中閣下題字
（八）島田沼南先生題字
（九）有吉神奈川縣知事題字
（十）安藤前横濱市長題字
（十一）大谷南湖翁題字
（十二）木村寧靜翁題字

(十三) 醫學博士大野禧一君題辭
(十四) 著者序文
(十五) 凡例



兀々書齋裏
座收戊午春
稿成心境潤
輕快浴餘身
題自著文集
北强山人

著者 桑島北强

外務大臣男爵　後藤新平閣下

前農商務大臣　河野廣中閣下

神奈川縣知事　有吉忠一閣下

前横濱市長安藤謙介閣下

大谷嘉兵衛君

小野光景君

増田嘉兵衛君

阿部幸兵衛君

木村利右衛門君

# 口繪寫眞の解

一面に著者を表現せしは著者の文詞が其如何なる容姿より出でしやを聯想する讀者の感興を充たさんとする編者の老婆心に出て、二面に後藤男、幷に河野氏を並載せしは兩氏は著者が鄕黨の先輩として常に畏敬し私に師表と仰ぐ欽慕の意あるを窺知する編者は此良機を捉らへ茲に表示して著者の志を暢べんとする微意に過ぎず三面の有吉氏は現神奈川縣知事として我地方行政府の長たり、又安藤氏は本書刊行に到る迄の横濱市長たり、與に公的關係より敬意を拂ふ可き理由あり且つ本書の爲に題字を惠投せられたるに酬ゆるの微志に出づ、若夫れ木村、大谷、小野、增田、阿部の五氏に至つては、何れも古稀以上の高齡者にして、而も其永き公私の生涯に於て我市及市民に寄與したる貢献甚大なるに思念し之を顯揚せんとする編者の微忱に出てしものなることを諒せよ。

編者誌す

# 白氏文集

帝國圖書館藏

大道通相

浚世
寡罕

# 片言只字

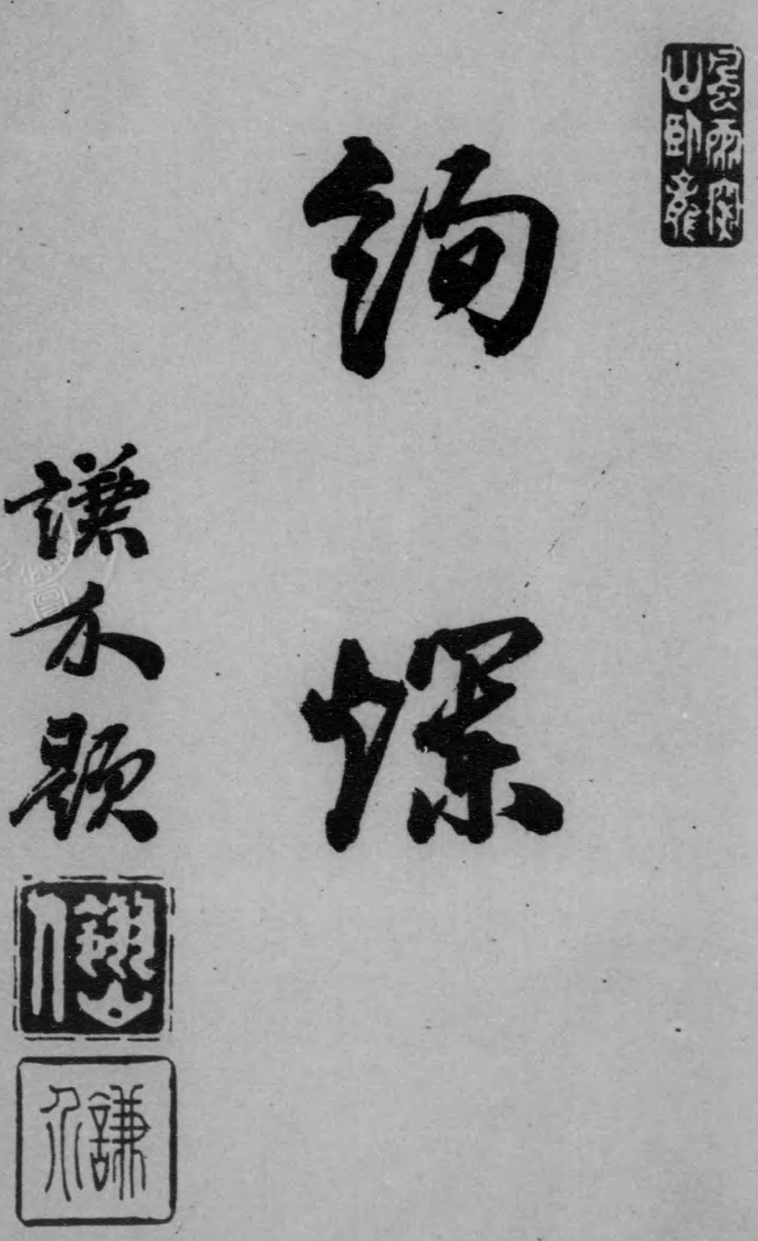
沼南

自疆不息

成南圭

# 詢諜

謙亦頌



# 文機

# 光彩

陸離

宮内庁書陵部

NASUMONO WA
TSUNENI NARI,
YUKUMONO WA
TSUNENI ITARU!

~~I SUNNS~~

I VI TAISHO 7

Prof. Dr. Ohno

# 自序

大木樂山は余が社友の一人にして意志强堅古武士の風あり、頃日余が曩日從事せし『青年及青年團』及び現に經營せる『横濱第三帝國』に執筆せし文跡の散逸を惜み之を一冊子に輯錄し世に公刊せんと、尨然たる幾千枚の原稿を携へ來りて其承諾を需む、余卒然之を聞くに迄んで頗る其諾否に迷ふ、以爲、余が由來主として擔任執筆せる方面は、政治經濟論評乃至フースヒーにありしを以て、只管旨意の徹底を期し、文意の暢達を專らとして敢て仍ち文辭の末に拘泥せず、故に自然其詞調筆格の蕪雜亂離に陷りしは自明の事實なるを知るに拘はらず、今茲に再び之を冊子に蒐錄して公刊するは余をして殆ど堪ゆる所に非らずと、樂山强て請ふて已まずして曰く、先生の言或は然らん、而も方今新聞雜誌發行の數日に月に旺盛を極むるも、昂然として時流を拔き特立獨歩の境地に在りて、不羈の筆を採り、自由意志を發表して憚らざるものに至

つては、恐く先生の如きを措て多く他に需む可らず、吾人豈先生の爲單に賣文街名のみを目的として此企書あらんやと、余此熱心と誠意ある言を聽くや、翻然として悟り心大に動くに至れり。

余微力素より言ふに足らずと雖も、其主義を抗げず主張を一貫し、所謂武威も屈せず、富貴も淫す可らず的の覺悟を以て斯界に立つ其意氣に至つては樂山の贊辭を甘受するに躊躇せざる所なり、嗚呼樂山の企圖にして聊かたりとも、余が主義の宣傳主張の貫徹に資する所あらんか、其文詞言辭の末の如きは問ふ可きにあらず、囚はれざる帝國主義の本宗を以て自任する余たるもの、豈此企書を曠廢するに忍びんや、則之が公刊を諾し其集載すべき原稿の全部を承認するに至れる事情を卷首に告白すること爾り。

大正七年七月下浣

桑島北强識



# 凡例

一本書は横濱第三帝國新報紙上に主幹桑島北强君が自ら執筆せる、大正五年六月創刊以來七年七月に亘り掲載せる、論文、フースヒー、隨感、漫筆等を蒐輯彙纂したるものにして、原文より一字一句の修補添削を用ゐず、赤裸々に君が咄嗟の筆より現はれたる、思想、主義、文藻、趣味を紹介せんとの試に出づ、故に間々穩當ならざる熟語、假字等の散見し或は全く誤植に成るものなることを發見せるものあるも其儘に載錄せり。

二本書の分類を四論評(一)公開狀(二)フースヒー(三)刀圭界(五)隨筆(六)雜錄に區別せりと雖も固より確的の分類たるにあらず、唯大體に隨て類別して繙讀の便宜と爲したるに過ぎず。

三載錄の順序は新報登載の號順に據るを主義としたるも、間々編綴の都合冊子の躰裁上其號順を前後したるものあるも、敢て案件の輕重、人物の高下等に因りたるに非らず、讀者之を諒せよ。

四本書載錄の十中八九は新報より轉載せるものなることは前記の如しと雖も、人物月旦等に於て執

筆者が別に經營せる雜誌『青年及青年團』に掲載して新報に缺載せるものあり、又は新報に掲載せる同一人物を月旦せるも、自ら同工異曲として棄て難きもの等ありて往々雜誌より抽出して轉補せるものあり、但し一記一文の終りに之を證する爲め（青何卷何號）又は（新何號）と記し其出所を明確にせり。

五桑島北强氏が文筆に親み操觚の業に就てより既に幾年處を經たり、其間想を凝らし筆を練りて成りたる、卓論妙文蔚として篋を充するものありと聞く、編者は乞ふて之を集錄し『北强文集第二輯』として近く刊行の計畫あり、思に本輯と兩々對比し濃淡、緩急、華質の妙味亦別段のものあらん、敢て大方の期待を請はん。

一豫期せる名家縉紳の題字序文の寄贈を受くべきもの二三にして止まらざりしに、刊行の日時切迫せると故障の突發する等のことありて本篇に掲載するの遑なかりしは遺憾なるも、近く刊行する第二版又は第二輯に蒐載することゝせり、偏に編者怠慢の罪を謝す。

大正七年八月上浣

編者誌

# 北强文集目次

## 評論の部


（一）余が青年に對する倫理觀　一頁
（二）孔子の倫理觀を評す　七頁
（三）青年に對する政府の政策を評す　一四頁
（四）誰か國家の重きに任ずる者ぞ　一八頁
（五）歐州大亂の與ふる良敎訓　二一頁
（六）後藤男の自治團を評す　二四頁
（七）寺內內閣成る　二八頁
（八）超然內閣と政黨政治　三一頁
（九）正貨處分論　三四頁
（十）減債基金の標準を評す　三九頁
（十一）寺內內閣の基金還元振　四四頁

（十二）列强の自制と國民の覺悟　四五頁
（十三）我國人が大戰に對する誤想　四七頁
（十四）寒心すべき傾向　五一頁
（十五）國富と物價騰貴　五四頁
（十六）戰後の貿易觀　五六頁
（十七）公債政策　五八頁
（十八）大隈侯の講和觀　六〇頁
（十九）政友會の選擧法改正意見　六二頁
（廿）首相の訓示　六四頁
（廿一）外交調査會と加藤男　六六頁
（廿二）歐洲大戰後の產業觀　六八頁
（廿三）戰後の勞働問題　七三頁
（廿四）再ひ戰後の勞働問題を論ず　七五頁
（廿五）三度戰後の經濟策を論ず　七七頁
（廿六）英雄の出廬を望むや切也　七九頁



（廿七）米國の軍備擴張眞意義　八一頁
（廿八）政戰後の感　八三頁
（廿九）アイアンローを想ふ　八六頁
（卅）米國の對支問題　八八頁
（卅一）大隈侯の曉節疑はし　八九頁
（卅二）三角頭元帥の引張凧　九一頁
（卅三）南進中止の無策　九二頁
（卅四）横濱生絲定期市場を擴張せよ　九六頁
（卅五）地理は歷史の主なる動力也　九九頁
（卅六）横濱市長の任期滿限近けり　一〇五頁
（卅七）財界の前途樂觀す可らず　一〇八頁

## 公開狀の部

（一）與若尾幾造君書　一一一頁
（二）與小野光景君書　一一五頁

附同君訪問記

（三）與原富太郎君書　一一八頁
（四）與茂木惣兵衛君書　一二六頁
（五）與平沼亮三君書　一三〇頁
（六）與渡邊玉子夫人書　一三四頁
（七）與代議士鈴木錠藏君書　一三七頁
（八）與井手二郎君書　一四〇頁
（九）前代議士佐藤政五郎君に與ふる書　一四六頁
（十）與三宅磐君書　一四九頁
（一五二頁）

フースヒーの部

（一）小野光景君　一五五頁
（二）大谷嘉兵衛君　一五九頁
（三）大濱忠三郎君　一六三頁
（四）再び大濱忠三郎君　一六九頁



（五）木村利右衛門君　一七二頁
（六）渡邊忠右衛門君　一七六頁
（七）中村房次郎君　一七八頁
（八）株界の異彩菴原卿次郎君　一八二頁
（九）左右田銀行（上）　一八九頁
（十）同行　（下）　一九三頁
（十一）左右田信次郎君　一九七頁
（十二）田中茂君　一九九頁
（十三）與村三樹之助君　二〇一頁
（十四）木村庫之助君　二〇四頁
（十五）丸山助次郎君　二〇七頁
（十六）横濱生絲界の二權威　△原合名會社と小野商店▽　二一〇頁
（十七）石塚彦輔君　二一二頁
（十八）渡邊造船所と所主渡邊忠右衛門君　二一五頁
（十九）野崎貞利君　二一九頁

（廿）菅川清君　二二一頁
（廿一）高島嘉兵衛君　二二五頁
（廿二）太田與市君　二二七頁
（廿三）神奈川縣郡部選出代議士の總評　二二九頁
（廿四）臺灣銀行　二三三頁
（廿五）依田彌助君　二三七頁
（廿六）熊澤甚太郎君　二三九頁
（廿七）大日本人造肥料株式會社　二四〇頁
（廿八）新禮助君　二四二頁
（廿九）安部幸之助君　二四三頁
（卅）横濱銀行界の四天王　山川勇木君＝山縣量次君＝森謙吾君＝川本多吉君＝　二四五頁
（卅一）大日本ヴェニア製造會社　二四七頁
（卅二）横濱の警察　各主腦の分析＝大里戸部警察署長＝　二四九頁
（卅三）佐久間三代人君　二五一頁
（卅四）上野吉二郎君　二五七頁





（卅五）川崎銀行支店と不動貯金銀行支店　二五九頁
（卅六）綿野吉二君　二六一頁
（卅七）上甲信弘君　二六三頁
（卅八）眞川三郎君　二六四頁
（卅九）細田勝市郎君　二六五頁
（四十）早川松太郎君　二六九頁
（四十一）關戸重太郎君　二七一頁
（四十二）長與程三君　二七二頁
（四十三）湯淺龜二郎君　二七五頁
（四十四）耶馬溪一貫齋君　二七六頁
（四十五）横濱新市會議員　△石井清一郎君外二十五氏▽　二七八頁
（四十六）臼井伊三郎君　二八九頁
（四十七）永田秀次郎君　二九一頁
（四十八）安藤謙介君　二九四頁
（四十九）吉田豐吉君　三〇一頁

（五十）岡澤辰次郎君　三〇二頁

## 刀圭界の部

（一）醫學博士大野禧一君　三〇三頁
（二）醫學博士難波要君　三一〇頁
（三）高橋五男也君　三一二頁
（四）日高瑞碩君　三一三頁
（五）立川方鈴君と竹村茂藏君　三一三頁
（六）伊藤小三郎君　三一四頁
（七）清水達二君　三一四頁
（八）野毛山病院と難波院長　三一五頁
（九）續清水達二君　三一七頁
（十）大川國五郎君　三一八頁
（十一）柳田太之治君　三一九頁
（十二）市立十全醫院總評　三二〇頁



（十三）根岸療養院と院長大村民藏君　三二三頁
（十四）萬治病院と院長阿部重男君　三二七頁
（十五）濱谷周平君　三二八頁
（十六）伊藤小三郎君に對する誤評　三三〇頁
（十七）醫學士加納禎吉君　三三一頁
（十八）大村民藏君　三三三頁
（十九）大藤正三郎君　三三六頁
（廿）醫學士五十嵐英一君　三三八頁
（廿一）中村安孝君　三四〇頁
（廿二）杉浦敬成君　三四三頁
（廿三）醫學士德永保君　三四五頁
（廿四）野方次郎君　三四六頁
（廿五）阿部重男君　三四七頁
（廿六）早野連之助君　三五〇頁
（廿七）入江英哉君　三五二頁

（廿八）足立徹夫君　三五三頁
（廿九）淺香一忠君　三五四頁
（卅）飯野醫學士と內田醫學士　三五五頁
（卅一）六角謙吉君　三五六頁
（卅二）松本五郎君　三五八頁
（卅三）松岡正己君　三五九頁
（卅四）藤井幸雄君と得田易君　三六〇君
（卅五）坂入道賢君　三六一頁
（卅六）石浦德太郎君　三六二頁
（卅七）横濱十全病院新幹部　三六三頁


## 雜錄の部


（一）入社の辭　三六七頁
（二）塵窓費語（其一）　三六九頁
（三）同（其二）　三七二頁
（四）同（其三）　三七七頁
（五）新年の辭　三八〇頁
（六）神奈川版創設に就て　三八三頁
（七）錦港たより　三八五頁
（八）新年の辭　三八九頁
（九）横濱三元老と筆　三九一頁
（十）我紙の題字執筆者　三九二頁
（十一）凉み臺　三九三頁
（十二）詩聖ダゴール來　三九七頁
（十三）陳開闢文　三九九頁
（十四）小野家別墅成る　四〇二頁
（十五）大典奉祝の辭　四〇四頁
（十六）宣言書　四〇五頁

## 拾遺の部


（一）函嶺の三人男　鈴木善左衛門君＝川邊正之助君＝椎野吉五郎君＝（フースヒー）四〇九頁
（二）閑却すべからざる食料問題（評論）四一三頁
（三）代議士戸井嘉作君に與ふる書（公開狀）四一七頁
（四）岡部菊太郎君（フースヒー）四二〇頁
（五）宮崎竹次郎君（フースヒー）四二三頁
（六）酒井增太郎君（フースヒー）四二六頁


# 評論の部

# 余が青年に對する倫理觀

【一】

題して倫理觀と云ふ、題名既に重大なり、宜く博索思緻去私坦懷の見地に立ち先賢前哲の言に聽き、近代思潮の大勢を視て、後ち論斷せざるべからず、夫れ倫理を討尋するに當つてや、先づ三個の異なる方面の觀察點あることを知らざるべからず、其一は人間の天性は倫理的行爲に適するの才能を具備すべしとする、心理學を基礎として觀察するものと、其二は古今倫理の發達を經驗し或行爲を是非し善惡し、德不德を概念とするにありて、主として歷史的に研究するものと、其三は倫理の原則を最も積極的に觀察し、哲理的に攻究するものにして、正又は善の根本は何ぞやの問題を前提とするにあり、余は本論の「スタート」を第三の形而上學に採りたることを、讀者諸君に豫告し置き徐に論旨を進めんとす、現代倫理學の泰斗ラット博士曰く『世に實際と理論の區別あるも、理想を根底とし研究する結果、其到達する結論を無視して實際的なりと云ふことを得ば、實際ほど凡ての研究に有害なるものなし、然れども道理結論を尊敬して、之れを實行に現はすものとせば、倫理哲學の如きは實際に必要なる最も重要なる學科の一と云はざるべからず』と味ふに足る立言にあらずや、抑も倫理とは道義の

**観念を基本とする人間行爲の準則なり**、道義とは一つの理想なり、正邪善惡の觀念なり、古來賢哲と稱せらるゝ、ソクラテース、プラトン、アリストテレス、耶蘇、釋迦、孔子、デカルト、ルーソー、カント、ヘーゲル、ショッペンハウエル、ヘルベルト等が論述說明する所は、多趣多樣にして紛然歸一する所なきが如きも、然かも善又正の二德の含有をして、倫理觀念中より脫逸せしものなきに徵するも、**余が下せる定義の獨斷的妄議**に陷らざるを知るべし、蓋し諸家論議の分岐する點は、正若しくは善の觀念其ものに非ずして、其原質及實行の方面如何に存す、今假に諸家の主張を分類するに(1)直覺說、人生には行爲の善惡正邪を直覺すべき能力を有す、故に普通の理性を備ふるものならんか、或行爲を一見するや直に一種の感覺に因り之を判斷して善惡正邪を知得すべしとするにあり、(2)形式說、抽象的法則即ち道義法なるものを標準とし、其法則に適合し恪守するものを正なり、善なりとするものにして、道義法は人の理性に依り認識判斷すべしと云ふにあり、(3)功利說、近世便撒謨、爾兒の輩に依り唱道せられ、道德上の善又は正なる行爲は、其目的にあらずして方便なり、元來善又は正の行爲自身には何等價値の存するものにあらず、然れども他の價値ある目的に對しては、夫れ自身も價値を生ず、道德の價値ある標準の目的とは快樂と幸福にして、正又は善の標準こそ即ち其快樂及幸福に過ぎずと云ふにあり、(4)理想說、理想を標準として行爲の善惡正邪を判斷するものにして、理想は人及社會の進步と共に發達するものなれば、之を以て標準となすときは、人間行爲の善惡正邪を適切に



判斷する上に於て最も合理にして且つ錯誤なきを期し得べしとするにあり。

【三】

余は前掲第四の理想說を根據とすべきは論なく、今俄に斯る大問題を提げ、敢て諸君に相見えんとするに至りたるは我國の現狀と世界大戰後の思想界に想到し慄然として怖るべきものあり、特に動もすれば動搖し易き青年の思想は、過渡期に免れ難き倫理指導標を瞥見し、不識不知岐路に迷入するを憂慮するの餘り、敢て一片耿たる赤誠を讀者に向つて披瀝するの、已むを得ざるに出でたるものなれば、讀者諸君に於ても十分の誠意を傾到し、若し採るべきものあらば之を容れ、疑問あらば之を質し、否定すべきものあらんか、秋毫の假借する所なく本紙上に正々堂々の論駁を試みて可なり、如何とすれば月に憧がれ戀に泣く的の軟文字を列ね、悠々討議すべき閑問題に非らざればなり矣。

嗚呼、我德敎界は當に間一髮の危機に迫れり、看よ看よ、今や舊宗敎舊道德の權威地に墜て、新宗敎新道德の代つて興起するものなし、泰正文物の潮流は淸濁を擇ばず滔々として橫溢し來つて底止する所を知らず、世を擧げて爲我功利の說に傾聽して、崇高なる德敎の人心を維ぐべきものなし、政治經濟諸制度の勃興と共に、生活狀態日に複雜を加へ月に繁雜を來す反面には、恐怖すべき云ふに忍びざる忌むべき惡思想の躍動せんとするの兆あり、更らに新要求に缺乏せる飢渴者はオイケン、ベルグソンの皮想に見て早くも憧憬するものあり、甚しきに至つては一切道德の權威を否定し、本能自然の

滿足に變かんとするあり、一方には極端なる自尊主義を絶叫し危險思想の聲漸く高からんとするあり、軍治的帝國主義大勢に乘じて思想界の一角に雄飛の萠芽を發生せんとす、誰か此狀勢に視て我德敎界の危殆を樂觀し得んや。

【三】

然らば則此頽瀾を既倒に廻すの策奈何ん。曰く理想主義の實行あるのみ、理想は完全なる人格的生活の理想たればなり、人の道德性は常に此完全なる人格の理想に向つて前進す、別語を以て云へば、倫理上の義務道德上の正善なる概念は此理想に因つて成生化育す、畢竟道德上の善惡正邪は人格の發達が根基となり、以て其理想に吻合合致するや否やに依つて、行爲の善惡正邪を判斷し得べければ也。然り人は何が故に完全なる人格（パーソナリチー）の理想を欽慕するか、將た何が故に之に向上進展せんとする歟、曰く、宇宙實在（リアリチー）即ち道義的神靈的の存在之なり、『何の木の花とも知らず香ひかな』とは能く此間のサムシングを美化表出したる名句なり、余は世界の根本宇宙の本體を概念するに當り、道義的なく將た神靈的なくして、人の道德を說明し、滿足せしむべき眞理を有せずと信ずればなり、之を客觀的に思索するときは、世界の根本に完全無疵なるべき人格の理想實在すとせば、其波動として人の理想を發達し成育し得べしと理會し得べければなり、斯く論ずるときは讀者中には、余の倫理觀を宗敎と擇む所なしとするものあらん、余は直に之に應じてオブコースと答ふるに躊躇せず、如何となれば元來道德的



經驗と、宗敎的經驗と、審美的經驗の三者は常に結論に於て相一致す、即ち道德上完全なる人格の理想を要求する所の道理、信仰の目的として無限完璧なる宇宙の根本に溯及せんとする宗敎、美の理想を供給する美術は、互に吻合合致すればなり矣。

【四】

顧みて我國三萬の青年團三百萬の團員は、如何にして斯の倫理問題を解決せんと試みつゝありや、如何にして人格の想理顯現（リプレゼンテーション）を修養せんとするや、當局者又は世の有識者は恁（いか）に之を開發指導せんとなしつゝありや、往時は云ふに及ばず、過去は追ふも詮なし、最近の過去に於て政府は全國青年團の統一を圖り、其設置指導に關し、內務文部兩大臣の名を以て各地方官に對し訓令を發する所ありたり、曰く『青年團體の設置は今や漸く全國に洽ねく其振否は國運の伸暢地方の開發に影響する所特に大なるものあり（中略）抑も青年團體は青年修養の機關たり其本旨とする所は青年をして健全なる國民善良なる公民たるの素質を得せしむるにあり隨て團體員として忠孝の本義を體し品性の向上を圖り體力を增進し實際生活に適切なる知能を磨き剛健勤勉克く國家の進運を扶持するの精神素質を養成せしむるは刻下最も緊切の事に屬す（下畧）云々』と其旨趣や甚だ可、刻下の急務たるを訓る更に可、然り可なりと雖も、政府が最も憂患とする不完全なる思想の匡濟善導の根本義を何處に覓めんとするやに至つては、甚だ漠然として捕捉に苦む憾なきを得ず、余をして忌憚なく云はしむれば、政府の所謂忠孝の本

義を體し品性の向上を圖ると云ふが如きは、倫理問題として少くも其形式に於て、團體其もの〻趣旨目的に供せられ、將た研究せられたるコンペンショナルに過ぎず、要はコンペンショナルと云ふと雖も、能く其根本義に觸れ之を善導誘發するに於ては、功果の見るべきものなしとせざるも、余は於已上現時の青年に企及する急務として、要望して已まざるものありて存するなり、何ぞや曰く、青年の倫理的觀念を理想主義に立脚するにあり、畢竟するに理想は自覺に發足す、セルフコンシャスネスにパーソナリチーを形成す、既に人格あらんか、青年は期せずして健全なる理想を涵養し、忠孝の本義を體得し、隨所にナショナリチーを發揮し、品性高上し、廉耻を重じ、勤勉の良風を馴致し、蔚然として起る青年の活氣躍動すべきは炳乎として火を見るが如けん、青年團として我青年の修養團とし、英佛のボーイスカウツ、獨のユーゲンドウェール、露の義勇軍團に擬せんとする、政府の所期の如きは眞に易々たる業のみ余は更に云はんとす、自覺々々と、政府も自覺すべし世人も自覺せよと、特に青年夫れ自身に於て大に自覺せざるべからずと、人格は自格に依つて化成せらる人格成りて無邊清澄の大理想境に到達し得べき也焉。　（青、六、十二）



# ◉孔子の倫理觀を表す（上）

【一】

余輩は前號に於て『青年に對する倫理觀』と題し、聊か卑見を開陳する所ありたり。今茲に其緣故に依り、我國一千有餘年人心の維持に貢献せし、丕績の掩ふ可らざりし孔子の倫理觀を紹介し、論評するの機會を得たるを光榮とす。加之前號論述せる如く今や德敎の過渡期に當り、道心日に維れ危からんとするに際し、古聖賢の遺敎を討尋し、將に來るべき新德敎に對する基礎觀念を、明確にする上に於て溫古知新の資料を提供するは余輩記者（ライター）が、讀者の平生に酬ゆべき責務たるを信ず。

孔子は實に三代文明の謳歌者にして、堯舜を祖述し文武を憲章し、所謂述べて作らざりしは、其主義なりしと窺知するに足るも、獨り仁の一字に至つては確に孔子の『クリエーション』にして、鄒魯學派の始祖、儒敎の創建者として、後昆の景仰して措かざりしは、主として又之れに職由す。孔子の仁は之を廣狹の二義に類別し得べし。廣義に於ては。百般諸德の淵源となりて、之を統轄する所の理想、即ち統一的原理之なり、由來仁に關する諸家の解說區々に岐れ歸一する所なきも、余輩の見を以てすれば孔子の理想とする所は君子と、禮儀に在り、此二理想は仁の人格的及社會的表現にして君子

とは文學禮樂に秀で文藝に通じ、所謂文質彬々たる人格たるなり、禮とは道德上の慣習及風俗より、文物の制度に至るまで、社會の表面に實現せられたるものを指す、之を統合する時は、仁は愛を中心として、吾人の文藝其他の才能が、圓滿且つ調和的に發展したる、統一したる德となるなり、而して一切の德は仁なる最高原理より、個々の場合に發現し、父子に在つては孝となり、君臣に在つては義となり、夫婦に在つては別となり、朋友に在つては信となる、然れども孔子は敢て之を學理的に、仁に從屬する他の諸德との關係、位置を組成せし跡なく、自己の人格を基礎とし、實踐躬行的に、諸種の法則格言を宣傳公布したるに過ぎず、即ち幾多の經驗が、一切の行爲に適應して過ちなき、深玄博大なる仁なる觀念をば、彼が道德的意識に結着したるなり。狹義の仁は英語の Benevolence に相當し即ち仁愛の德なるもの之なり。是れ孔子は支那北方種族民が、天惠薄き瘠瘠の地に於て、常に生活難を愬へ、不識、不知の間、克己、忍耐、實踐の風を馴致し、同時に祖先崇拜の念は、血族親愛の情となりたる、氣質を受け、五倫五常の大本は仁愛なりとの觀念を構成し、更に實踐上の經驗によりて、之を理想化し、仁愛以上の統一德即ち廣義の仁に連繫したるなり。特に注意すべきは、孔子は一視同仁の普遍的愛を理想とせしも、之れを實際に應用するに當りては、一種の差等愛、即ち制限愛を爲したるの一事なり。孔子曰く『汎愛衆而親仁』と之れ普遍愛を巧妙の辭令を以て表明したるものなり、然して制限愛の方面に於ては、孔子の正統紹繼者たる韓退之は『一視同仁篇近而擧遠』と云ひ、孟子は『老吾老而及他老幼吾幼而及他幼』と說きしに徵するも、余輩が評論の過ちなきを證するに足らん

【二】

然則如何にせば、其目的たる仁に到達すべきや、如何なる方法を以て、其仁德を實現し得べきや、孔子は更に忠恕の二字を以て、吾人に實踐躬行を敎へたるなり、忠とは自我に忠實なる意、即ち誠の義にして、恕とは己を推して他に及ぼす、彼の碩儒仁齋の解說せる忖度の義なり。別語を以て云へば、忠は實踐上の根本原則にして、恕は同情的動機たるなり。己の欲せざる所。之を人に施す勿れとは、恕の消極的にして、己れ立んと欲すれば、人を立たしめよとは、其積極的例解なり。之を要するに仁は原則にして、忠恕は方式と謂ふべきなり。

孔子は又三代の思想を繼紹し、大に中庸の德を鼓吹せり、曰く『中庸の德其至れるかな、民鮮きこと久し』と云ひ、『天下國家をも均くすべし、爵祿をも辭すべし、白刃をも踏むべし、中庸は能くすべからず』と唱へ、中庸の德高大無極なるを嘆美せり。中とは適切中止の謂ひにして、庸は恒久不易の常道の義なり、曰く『中行を得て而して之に與みせずんば必ずや狂狷乎』と由之觀之孔子の中庸は、彼の宗學の解釋する、一定不變なる執一、若くは未發の中に非らざるが如し。如何となれば狂狷とは、中行圓滿の士と異り、偏執頑强の徒を指稍するに拘はらず、之に與みしたるに見ば、例へ謹厚俗に循ふ、鄉原の僞君子を彈呵したるアイロニーにせよ、未發又は執一の義と相容れざる遠しと云ふべし。

孔子は又最も禮を重視せることは、前述せし如く畧ぼ仁と徑庭なく、彼の周公の制定せる禮樂の燦然たるを欽慕して、『郁々乎として文なるかなと』嘆美せしも、森嚴峭烈一歩も假借せざる、春秋の筆法を緩め、管仲の功罪を相殺したるも、禮の維持者たるが爲めなり。然らば孔子の禮とは抑も何者ぞや、或は制度、儀式、作法、風習等の義を包含すべきも、畢竟するに、社會の秩序を要義とせる、道德法典に過ぎず、而も虛禮の法式にあらずして、仁の流露に繫る道德典義と解すべきなり。高弟顏回か仁の問に敎へて、克己復禮の數語を以てしたるに見るも、其眞意義を窺知するに足る。

孔子は禮樂を以て社會秩序の維持、即ち治國平天下を最大要具とせり、彼の德治主義なるものは、畢竟禮治主義に外ならず、然るに孔子を去る百年後、孔子崇拜の第一人荀子は、同く禮を以て、道德上唯一の標準となせるも自ら趣を異にす。开は他日を期し論評する所あるべし。

【三】

孔子は又孝德を重視せり、『夫孝は天の經なり、地の誼なり、民の行なり、天地の經にして民之に法る、聖人の德何を以て之に加んや、五刑の屬三千、而して罪不孝より大なるは莫し』と云ふに見るも、孝を重視したる一斑を知るべし、思ふに孔子の意たるや、固より仁を以て至上の理想とし、孝を以て仁に到達する捷徑の一德と見るが如し、有子曰く『君子は本を務む、本立つて道生す、孝悌は其仁をなすの本か』と至言と謂つべし、孔子は諸弟子の問に應へ、或は「違ふ無し」と云ひ、或は「父





母は唯だ其病を憂ふ」と爲し、或は「犬馬に至るまで皆能く養ふ、敬せずんば何を以てか分たん」と誨ふる等、多趣多樣の觀ありしと雖も、畢竟孝は仁の特殊的現德なるを以て、其內容を指定し難く、諸弟子の敎育上其例を摘示したるに過ぎざりしもの〻如し。

【四】

以上概論せし所は、主として個人的方面の研究に止まりしも、次に少しく社會的倫理觀に就き評論を試むべし、孔子の社會的理想は、治國平天下にあり、即ち老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懷け、萬物をして各其處を得せしめ、而して堯舜無爲の治を天下に布かんと企圖せしなり、然らば孔子は如何にして其理想を實現し得べしと信じたるか、曰く他なし、道德を天下に洽布するにありし、德化洽く上下に行はれて、始めて國治り天下平なり、人々自ら德を修め道を體して、其化國家に及び、國家自身道德的となるに及んで、玆に堯舜の治來る所謂明德を明にするにあり、民を新にするにあり、至善に止まるにあり、の數語は孔子一生の理想を明快に言ひ顯はしたるものなり、國道あれば榮え、國道なければ亡ぶ、道は無上の社會權威者たり國道あれば出で仕へ、道無ければ藏れて仕へずと云ひしは、決して國を棄て己を淸ふする、利己心に出でしに非らず、蓋し孔子の意たるや、當時到底道の行はれざるを知り、亂世に出で道を傷害せらるゝより、寧ろ退きて之を護り自ら全ふして、後昆に垂るゝに如くは莫しとしたるなり、彼が一生の行藏趣舍に見るも、實に唯一此至上の道に

外ならざりしを知る、自然孔子は道德主上主義の結果として、政治法律を見ること輕く、『政は正なり、苟も其身を正ふせば、政に從ふに於て何かせん、德は本なり、政は末なり、君子は故に本を修む、本立て末自ら治る』とせり『訴を聽くこと、我猶人の如し、必や訟なからしめんか』と『政治法律は、反つて民をして苟も免かれて恥勿らしめ、道德は民をして、恥あつて且つ格らしむ』とは當に彼が政治觀たりしや疑なし、彼のプラトンが、國家を治むる王者は、哲人ならざるべからずとせし如く、孔子も亦、政治家は有德の君子ならざるべからずと見しなり、彼は我其位を得ば堯舜王者の治を布かんとの大抱負あり、而も竟に其志を得ずして、遑々として天下を周遊せり彼は自ら其位を得ざれば、道德理想を實行し難しと爲せり、是れ即ち學者と君主の不離別思想、政教一致の三代遺風を繼紹したる孔子の長所にして短所たる所以なり。

【五】

彼が理想は一種崇高の觀あるも、其政治思想に至つては二帝三王の諸聖に比し、尙ほ稚氣滿々及ばざる遠しの失あるを免れず、彼は周末に當り幾多新興國の勃發し、社會組織の日に革新し、複雜を來せしに拘らず、只管堯舜時代の單純素朴なる、德治唯一主義を夢想したるは、彼が明透博洽の人格に對し、甚だ惜むべき一事たらずや、唐虞三代にありては、德利の二者を同等、又は同價値を有すとしたるに、孔子は道德其ものを以て、政の唯一目的とせり、想ふに此の如き思想の變遷は、春秋亂離の



世に當り、覇者競ひ起り、功利是れ事とし、道德の說を迂遠するに憤慨し、之を矯制抑止するに急にして、純尙德主義を提げ、之に莅むの已を得ざりしものありしならん、故に後年孟子の達眼なる、先師政治觀の缺漏を補ひ、利德兩主義の一致を、巧妙の筆に祖述したるは、孟子の卓見が偶々先師の名を完ふしたるものにして、此師あつて始めて此弟子ありにして、孔子の偉大を傷くるものに非らず。

# ◉青年に對する政府の政策を評す

## △政府の企畫は多少の益あり△

這回當路者の畫策になる、地方青年團の改善方針は、由來無秩序と無系統の狀態にありし青年團に、一道の脈絡を與へ一定の組織を示したる點に於て稍々効あり、余輩は前號の本紙上に於て、倫理問題の見地より其根本に觸れざる當局の方針を憾とする旨を論述したりと雖、所謂爲さゞるに勝る的の企畫たるを認めざるを得ず、如何となれば從來の青年團體なるものは、卒直に云へば一の若衆組合が新に青年團なる現代的名稱を冠したるに過ぎず、其實體たるや依然として梧下の阿蒙たる若衆組たり、偶々事業の目的經營指導の方針確立せしが如き觀ある、所謂優良團體の現出ありと雖も、仔細に觀察するときは不秩序無規律にして部分的成功に過ぎず整然として一國を通じ少くも一縣を貫きたる、組織的脈絡の連繫せしものなきなり、或は郡長村長を以て會長と戴くものは著く官僚の臭氣を帶び、村夫子鄉先生を仰ぐものは因循に流れ、青年自身領袖を選むものは漫散不羈に陷り、甚しきは官僚と民主の軒輊あり反撥するものあるに至る、然るに這般發表せる政府の改良方針を見るに、無秩序なる會員資格を一定し、義務敎育を終り軍隊敎育に入らんとする間の少年に限り、青年會は、小學校、軍隊、





在鄉軍人團に介在し、然かも之等と相關聯して、脈絡一貫したる團體たり得たるなり、青年團の改良は此意味に於て少くも青年の指導に於て力ある系統を與ふるものとして歡迎に値す。

改良方針に依れは會員は廿歳以下とし小學校より軍隊生活に入る楷梯にして、青年團は一個の軍隊機關たるに過ぎざるの觀あり、果して然りとせば、單に軍隊に入るべき壯丁の養成所となり、軍隊に入らざる多數の青年は風馬牛關せざるに至るのみならず、軍事義務を帶ぶる在鄉軍人團と純然たる青年者流とは、互に反目背視の俑を造るに至るなきを保せず、政府が最も苦心慘憺の末に出でたる一貫の脈絡一流の秩序を思ふ畫策は徒勞に歸するの虞なしとせず、思ふに方今の弊患たる、青年團の無秩序、青年の惰弱を救ふべく起りたる政府の企畫は、世界の大勢に鑑み、青年に軍國主義を皷吹し、國家の勃興に資せんとするの深意に出でたるものなるべきも其餘りに軍國主義に偏重し、角を矯め牛を殺すの愚に陷るなきやを患ふるものなり。

## △民主的青年團の勃興を要ず△

若し地方の青年壯年をして、眞に秩序あり系統ある團體に統合し、以て國家勃興の氣運に貢獻せしめんとせば、單に軍隊主義の皷吹のみを以て足るべきにあらず、青年壯年の世界的自覺邁進の下に打ちて一丸となし、身を以て國家に殉する犧牲的精神に燃ゆる、剛健質實なる團體の形成ならざるべか

らず、勿論地方の自治體は夫れ自身に於ける、理論上其團體たらざるべからざるも、現今世界の大勢と、我國運の進展に顧みれば、一層奮起勃發の理想を熾熱ならしめ、世界に於ける日本の地位を明確に自覺し、更に自覺の上に一段の努力を積むの緊切なるを思はずんばあらず、要は青年團なるものは、青年が軍隊に入るの手段としての團結以外、青年其れ自身が目的となる團體を組織せざるべからず、渾然として凡ての青年が自覺の基礎に立つ、眞の意義ある民主的青年團を創設し、以て國家勃興の基礎たり中堅たるべきを期せざる可らず。

## △青年は理想に立ち自覺に動け▽

余輩は前號に於て、極力青年に望むに、理想に活き自覺に動くべきを以てせり、本篇に於ても結論として茲に再び絮說するの己むを得ざるに至れり、政府當路者の指導拒むの要なし、先輩識者の誘掖更に大に容るゝの宏量なからざるべからざるは勿論なりと雖も、青年自身の立場を自覺し、勃興の理想に向進するにあらずんば、百の指導千の誘掖も何かあらん哉、想ふに「セルフコンシャスネス」は取も直さず「セルフヘルプ」たるべきなり、「天は自ら助くるものを助く」とは人生古今の金言なり、特に現今我國青年に對し一層痛切なる箴語たるを覺ゆ。

抑も『青年團は一つの學校に非らざるなり、自己を空虛にして敎師の講義を吸入すべき、消極的修



養場に非らず』とは獨逸の有名なる青年研究者ベルタン博士の名言なり、青年が青年團を以て一個の「セルフトード」の壇上となすは妨げなきも、積極的に修養の敎場と見るは大なる錯誤と云はざるを得ず、政府者有識者は勿論青年自身も今日迄斯る謬見に陷り居りたるの觀ありしは惜しむべし。現に今回政府の發表したる青年團組織標準の大綱中にも、主腦を小學校長又は在鄕軍人等に置き、小學科程の補修、軍事敎育のプリマー場たらんと期圖せし形跡歴然たるものありて、余輩の根本見地と軒輊する所甚だ遠きを遺憾とす。

## ◉誰か國家の重きに任ずる者ぞ

### □元老の凋落は國家に損害なしとの說

井上老侯の薨去に對し、我國特種の階級たる元老の凋落に聯想し、之に『オブジエクト』して、少くも二個の相異なる方向を辿るべき『ネカチーブ』對『ポシチーブ』の國勢未來觀あり。

其一說は元來元老政治は、業に已に過去の夢なり、無用の敗殘物なり、其生存と死滅とは、政治上秋毫の影響なし、尤も井侯の如きは其實業界に有せる、潛勢力の決して侮るべからざるものありしことは相違なかりしも、是とても侯の薨去に依て蒙る損害は極めて輕微にして、爲に財界をして動搖すべき程重大のものに非ず、即ち侯の薨去其ものに依つて喪失する國家の價は頗る廉價たり、畢竟侯の薨去は單に元老の凋落を悼むといふ點に於てこそ、適切の意義をなすべきも、其他に於ては殊更に重大視すべき價値ある問題にあらずと。

### □元老の凋落は國家に重大の關係ありとの說

ポシチーブの一說として、元老を以て維新以來の義人正士として、我國上下の社會的生命を維持したるに、曩に伊藤公逝き、桂公去り、今又井上侯の永眠せられたるは獨り元老の凋落を傷むに止まらず、之が爲に舊日本の生命は、曩に一葉落ち夕に一枝を失ふの憾あり、隨て我國々勢に蒙る打擊は、其冥々の裡に深甚なるものあり、此意義に於て井侯の薨去は痛悼愛惜の情に勝へすと。

余輩を以て見るに、以上の兩說共に肯綮に中らざるを思ふ、固より元老政治の時代は過去の夢たるべきも、其勢は尙ほ儼乎として財界及政海に現存するにあらずや。唯夫れ元老の勢力現存するや、明白の事實なるも往昔の如く元老の專有に非らずして、農、商、工、社會の各方面に瀰蔓伸張せんとする國民の勢力は、元老の勢力が尙儼乎として現存する事實より已上更に顯著なるものあることを知らざるべからず、嗚呼鐵骨石筋の維新輔命の諸豪、歳と共に凋落して新塚を吹く秋風、轉た蕭條たり之が衣鉢を傳へて敢て國家の重に任ずるもの果して誰人なるか。

### □賴むべきは青年にあり

現時の壯年者流は餘りに、小智小才過ぎ其雄大の氣、峻嶸の質に乏し、斗筲の能力にして、呑牛の膽略に缺く、以て撥亂反正の大事を托するに足らず、自今世界的大舞臺に立ち活劇を演ぜしむるには到底其重荷に堪ゆべきに非らず、茲に於て余輩は賴るべきは青年にありと絶叫せざるを得す、尤も近來青年の間に一種忌むべき惡風潮の顯出せるものありと雖も、這は一時の現象にして指導宜きを得ば、

之を除却し矯正するの道自ら存すべきを以て、深く憂ふるに足らず。

近頃政府も大に此處に見る所あり、過般具體的成案を發表して青年指導の方策を授くる所ありたり、勿論其成案の形式に於て、余輩の首肯し難きもの少なからず、前論題中聊か批說する所ありしも、其清健剛質なる青年の發生を企圖し、世道人心の上に活動せんとする、政府當局者の心事は之を諒とせざるを得ず。

夫れ然り余輩は將來國家の重に任ずるものは、唯一青年の階級にありと論せり、然るに世の老年壯年は、此重望すべき青年に對して果して幾程の期待を有するや、勿論青年の未來は青年夫れ自身の『セルフ、コンシヤスネス』に依つて開拓すべきにあらんも、余輩と同じく世の老年、壯年も青年に對し大に期待し深く信賴する所なかるべからず、即ち自覺と期待と兩々相待つて、始めて青年の意氣大に揚り、興國の氣運從つて勃發するに至るべきを信ず。　（青、六、十一）



# ◉歐洲大亂の與ふる良教訓

【上】

開戰以來茲に一年有半、其の政治、經濟、科學、人生の有らゆる方面に向つて吾人に特種の教訓を與へ、吾人に未知の智識を加へ、吾人に未決の疑問を解釋せしめたる効果は爭ふべからざるの事實なり、而も以て戰爭の慘禍を償ふに足らざるべきも、又密かに退て自ら慰むる所なくんば非らず、就中吾人が最も欣懷に勝えざる教訓の攝取は、吾人が學校生活已來、教師の講義に聽き、大家の著述に見、先輩の說に徵するも、尙ほ且つ釋然として氷解する能はざりし、個人主義と國家主義、社會主義と帝國主義、軍國主義と經濟主義、平和主義と侵略主義、商人道と武士道等の社會國家個人の上に提題し、其の是非、曲直利弊の結論を如何にすべきやの、判斷智識が一朝戰爭なる教材の賜ものにて、豁然剖解せられたるは、雲霧を排して白日を見るの感なくんば非らず。

看よ〳〵、歐洲各國が一時永遠の平和を夢みたるも束の間聯合國の事實上の盟主たる、個人主義の本宗たる大英國は、其の當然の主義たる軍國主義排斥の氣勢は一變せられ、强制徵兵制度を實施するの已むなきに至り、反つて本宗の個人主義に累せらる窮境に陷りつゝあるにあらずや。

往年獨逸が詭變の政策に出て、表面佛英米等の主張に倣ひ、平和主義を假裝したる爲め、獨帝(カイゼル)をして『世界平和の主』とまで過信せしむるに至れり、曷ぞ知らん、絶對の軍國主義を抱持する、獨帝及其の國民は『ベルンハルヂ』が唱道せる『最强國たる努力を失すれば國家は滅びん』を以て眞理とする國是は一瞬時と雖も、軍備の充實を圖りて怠らざりしことを。

開戰後十九ヶ月の永きに至り、而かも四大强國を敵として、毫も怯む色なく寧ろ戰鬪に於て優勝の地歩を占むるのみならず、其の財政外交の方面にまで、綽々として餘裕を示し、聯合軍をして顏色なからしめつゝある獨國は、方に平和主義非軍備主義の當世に容るべからざる實物教育を、吾人の眼前に展示したるに非らざる莫きを得んやと

【下】

開戰已來獨逸の抱持せる、國家主義乃至軍國主義は終始一貫して動かす可らず恐く最後迄渝らざるを思ふ、是れ獨逸の國是にして、而も國民性の發揮なればなり、余輩は敢て必ずしも、獨逸の國家主義、軍國主義に謳歌するものに非らず、特に戰爭に關する獨逸の行動には大に非議すべきものあり、或は人道を無視し、或は國際法を蹂躙する等、殆ど蠻族すら爲すに忍びざるものありしと雖も、擧國一致して一貫せる國是を遂行せんとする其堅志確心の牢乎として拔く可らざるに至つては、余輩の密に感嘆して措かざる所也。



之に反し聯合國は平和主義の空想に耽り、個人主義及社會主義の累に桎梏せられ、主として打算する所は財政經濟に存するを以て、戰備の如きは一片の形式を以て足れりとし、隨て個人的職業を採るものを絶對に尊重し、國家の干城たるべき軍人の職を輕侮して賤業なりと冷遇し軍人自らも『余の運命の投じたる不幸なる職業』なりとして羞色ありしなり、然るに一朝獨逸と戰端を開くに當り、是等の賤業者を驅つて戰場に送り、國家の爲に忠勇たれ、祖國の爲に身命を犧牲に供せよと命ずるも、誰か奮然挺身して國家祖國の爲に戰ふことを思ふものあらんや。

想ふに勝敗の數は未だ逆睹すべからずと雖も、我國も既に聯合軍に加擔せる以上は武士道の手前如何なる苦境に陷るも最後の勝利を制することに努力せざるべからざるは勿論也、否な最後の勝利は必ず聯合軍にあるべしと推想せられざるに非らざるも、近來我國一部の人士に、平和主義に耽溺し、非軍國主義を鼓吹し、經濟主義に偏重し甚しきは國體の如何を顧みず、社會主義若くは個人主義の迷路に踏み入るものあり、余輩又其の棄拾に迷ふに當り、歐洲大動亂の齎らせし此良教訓に接し、飜然として悟る所あり、敢て此一文を草して大方の諸賢に告ぐる所以也。

## ◉後藤男の自治團を評す

後藤男を惡しき意義に評する者は曰く、男は實力と誠意と謹直に缺くる所あるも縱横の機畧、萬幅の覇氣、熾烈の野心に於ては當世稀觀の一人者也、男が福島縣須賀川醫學校出の身を以てして、時の縣令安場保和の眷寵に浴し、其愛婿たる破天荒の境地を贏ち得るに至つて、博物新編や解體新論等に因て修得せる淺膚菲薄の醫學知識も、忽ち名古屋病院長たり、衛生局長たり得るに至れり、彼の相馬事件に座し牢獄の人となりて天下の耳目を聳動し勅任局長の榮位は轉じて、刑餘の一新平たるも束の間、兒玉將軍の爲前後援する所と爲つては臺灣民政長官を占めて其辣腕を發揮し、次で貴爵を拜し顯官に陞り、今や寺内々閣の利者として内相兼鐵道院總裁たり、而も男が滿々たる野望は猶ほ之を以て足れりとせず、新に自治團なる準政黨を組織して立脚の地を固め、以て自己が野望を遂ぐる爪牙に供せんと試むと。

然れども余輩の見を以てすれば、以上の批評は單に男の表面に表はれたる奇蹟的經歷に眩したる僻語にして取るに足らず、而も男を以て誠意なき輕薄漢の如く云ふは寧ろ無禮の言議たらざる莫きを得んや。男は俠骨稜々憂心冲々、前憂後樂眞に社稷を以て自己の任とする烈誠の士也、特に磊落豪宕の





士に免れ難き放漫粗笨の短弊なく、思慮精緻成竹透徹、達識明敏なる天禀的性能ありて、蚤く既に地方自治體の弊竇を看破し、之を救ふの道を講究すること多年、今や機運到り其遠大の抱負と、達成の識見を披瀝して天下同憂の士に告ぐる所ありたるものなれば、靡然として之に傾聽し、歡處として之を迎招し、少くも禮儀ある態度を以て之に應酬すべき筈なるに、例の穢多村的習性に囚はれ居る政黨者流は、自己の地盤を崩壞せらるゝ一大事也との眩想を以て妄に臆測を逞ふして惡聲を放つ、其輕佻陋卑の心事淫棄すべきに非らずや。

後藤男が發表せる『自治團創立趣旨』及び其『綱領草案』なるものを見るに、劈頭最も會心に堪へざる文字は、由來動もすれば閥族官僚が徒に憲法を曲解して迄で自己の位置を保護する上に、政黨を無視せんとする嫌ひあるに反し、瑣末も斯る言及なきのみならず、寧ろ却て憲政の大義を明確にし『凡そ國家憲政の建立は健全なる自治生活を基礎とせざるべからず』と喝破し、猶ほ進んで政黨と自治の關係に論及しては『夫れ政見政黨は天下國家の公論公黨たり自治生活は鄕黨の衆團にして恰も一家に政見の異あるを許さず鄕黨豈政派の爭あるを容さんや』と唱述し、更に百尺竿頭一歩を進め自治生活の要義は國民各自の公共的精神を涵養披瀝し一致團結以て相互的協力の美風を作興するに在り換言すれば即ち地方團體の文化的並に經濟的發展を促し確乎たる協同觀念に依準して國民相互に福利を增し各部各體調和融合し以て國家機能を靈活せしむるを目的とするものなり自治體は即ち國民の政黨的活

動の練習所たり故に自治生活の健全を缺けば國家は憲政の成果を收むること難し』と道破したる邊、能く余輩の主張に一致せるものあり、即ち男は自治生活を以て憲政の基礎と見て、之が健全の發達を要望して已まざる中心の苦衷より、先づ之が發達の障碍物を除却する消極手段として、政黨の繁累を離脱せしむるを以て、最大急務也と極論するも、其綱領草案にも明言せる如く『本團は政黨の存立及活動に反對するものにあらずと雖も正當ならざる手段又は合法ならざる勢力に依り政治的權力の偏倚を來すの變態を改善し且つ黨派的依估偏見に依り地方の行政及經濟を左右するの弊害を杜絶し自治體をして各自の利益を中心とする自主的發達を遂げしめんことを期す』と云ひて敢て政黨を嫌惡する態度なく、其他社會各階級の政治的經濟的利益の合理的調節より、農商工業の自治啓發、勞働者と資本家、小作人と地主の調和、青年子弟の敎養に至る迄、時運に伴ふ弊除進善の大綱掲げて載せざるはなし、言ふて說かざるはなし、蓋し男が告白する如く『果して然らば如何の手段方法に因て自治生活の進歩改善を圖るを得べきか是れ吾人が同憂達識の士と共に戮力攻究せんと欲する主題とす』べきや余輩又私見の存せざるに非らず、更らに論述する所あらんかなれども、余輩は男の創立趣旨及綱領草案の大體に贊意を表す。

余輩淺識なりと雖も、立憲政體と政黨關係の重要離る可からざる連鎖たるを知らざるに非らず、將た自治生活が一國の政治を離れたる放漫なる自由あるべき筈なきを知る、蓋し今日の政黨が果して余



輩の要望する責任內閣を成立するに足る、實力と修養ありや否やを疑ふと同時に、自治生活團に政黨の侵入せる既往の惡歷史が甚麼に、我自治生活を毒せるかの實見に徵し、此處に後藤男の創意に係る自治團組織の意見に共鳴せるのみ、余輩を以て官僚閥族の走狗視せるの大なる僻見たるは勿論、超然內閣の謳歌者也とするの更に甚しき謬見たることは、我紙上常に唱道せる主張に依つて立證すべく、唯だ余輩が政黨、政派を忌避すと云ふは實在の我國政黨政派の何れにも慊焉たるものあれば也。余輩は寧ろ我立憲政の完美を期する上に於て、理想的政黨の一日も早く實現せんことを翹望し、進んで之が實現に努力の一臂を藉すに吝ならず。（新、五、十二、八）

# ◉寺内内閣成る

新内閣組織の大命を拜したる以來、一時閣僚の選定に窮したりとさい噂さに上りたる寺内伯は曲りなりにも全然官僚系を羅織し、去る九日を以て宮中に於て親任式擧行迄漕ぎ着くを得たり、伯が揚言せる擧國一致内閣、人材羅致内閣は果して所期の如く組織せられたりや、吾人は敢て閥族官僚と云はず、政黨政派に何等恩怨を有せずして極みて不覇自白の境地にありて、此際最も公平無私の筆を以て評論を試み得しを喜ぶ思に世人は寺内内閣組織の顔觸を見て、二三流の末輩内閣と見縊るもの〻如しと雖も吾人の見を以てすれば、其人物、閲歴、識量に至る迄前内閣に對し勝るとも劣るべきにあらず、蓋し此點に於て寺内内閣は伯の所謂人材内閣を贏ち得たるや明瞭一點の疑なし、而も此人材網維内閣が今後努力して民心の收攬と民意の迎合に苦心すべきも略ぼ推想に難からず、以是觀之寺内閣が智識能力を以てして而も民心民意を收攬迎合するに於て、既に善政は施かれ良治は行はる可きを疑はず。

夫れ立憲政治は單に善政を施し、民心を收攬するを以て足れりとすべき乎、否な々々立憲法治政體なるものは其實質の善良なるを以てのみ足れとせずして形式の善美を併備せざる可らず、極言すれば立憲或は法治とは形式典型の謂ひ也、換言すれば多衆民意を代表したりと假定すべき、政黨なる集合





機關を基礎とする閣僚を以て組織し堂々として其政見を表示し政策を實行すべきを云ふ也、其進退出處の如きは最も憲法の處定を重んじ規矩を辿り、苟も事情なる流動的放縱を許さゞる點に、立憲政の善美は期せらる〻也。

寺内内閣は惜むらくは少くも此點に缺陷の存する奈何せん哉。

吾人局外者の見地を以てすれば、大隈侯の機處を得ざりし進退の罪は別として、最大政黨の首領たる加藤子を推薦したるは當然の擧なりしに、我國特有なる政界の權威者元老なる機關は之を排斥して、閥族の殘骸たる寺伯を起して内閣組織の任に當らしめたり、吾人政變の機動くを見るや、山縣、松方、大山各元老は、老殘軀亦幾歳を保つ可きにあらず、今回こそは最後の御奉公として立憲の常道に鑑み、國政進歩の爲に飄然前非を覺り、最善の忱誠を披瀝して陛下に應へ、國民に酬ふ可しと期待せるに、料らざりき彼等が頑迷不靈は依然として梧下の阿蒙にして遂に寺内伯推薦の愚擧を演じて顧みざりしも也。

元老連が頑迷不靈なるは命數幾程を餘さゞる彼等として多少恕すべきものありとするも智識、才能、人材に於て前者に勝り、而も前途洋々多望なるべき寺伯及閣僚が漫然として元老の慫慂に聽き、政黨を基礎とせざる内閣組織を了へたるは彼等にして百の善政を施き千の良治を行ひ得たりとするも憲政の本體を無視し其進路を阻害したる罪科を償ふに足らず、或は曰く、政黨基礎の内閣が憲政の常徑た

るを知るも、現時我國の政黨は其實力微弱にして、之を基礎として立つには餘りに價値に乏しく、事實上信賴するは不可能なるを以て、變則ながら政黨政派の上に超然たる內閣を組織し、一片の至誠以て國務に當り、其成敗の如きは之を問ふに遑まなき也と、或は然らん是れ一面の理論にして一面の事實ならん、然れども此理論を擴充するときは、憲政無用論なる橫議に陷ることを知らざる可らず、我國憲政を施いて卅有餘年、其進步發達の遲々たるものは此種橫議を爲さしむる元老なる弊竇の存在其ものが原因たることを知らざる可らず、吾人は此種の橫議を惡むと同時に各政黨政派の勢力微弱なりと云ふ事實を否定する能はざるを悲む。（新、五、一〇、一五）



## ◉超然內閣と政黨政治

民族文明の特殊なる性質を無視し、徒らに異邦の制度に憧憬するの迂愚にして延て甚しき危險の伴ふ可きを恐る、例せば我國多數の政治家學者等の政治的憧憬の對象とも云ふべき英吉利の政黨政治に表はる〻皮相の觀察より、立憲政體には普遍的に政黨政治ならざる可からずと獨斷批判を下す大なる錯誤に陷るが如し、然れ共靜思深考同國の眞相に想到するに至つて愕然として驚き豁然として悟る所あらん。

元來英吉利は世人の想像するが如き民衆政治乃至平等主義の本宗に非らずして寧ろ寡頭政治乃至貴族制度の極端に發達せる國也、彼のマグナカルタなるものは貴族が國王に對する箝制的意義に於て創定せられたるものなるも、國王が能く此のマグナカルタに順應服從せざるより、遂に國王を放逐し議院制度を揭建するに至り、依然として少數の貴族及同階級の者を以て議會を組織し、政治上の勢力を中心として、經濟上にも學問上にも其勢威を壟斷し跋扈せる歷史と現狀を有する國柄也、而も彼れ貴族等は旣往現在に於て自己の勢力を以て政治を獨占せんとするのみならず、未然永劫之が勢力を維持せんとする慾望より政黨政治即ち輿論政治なる美名を冠し、事實上の寡頭政治を行ひつ〻ある也、故

に英國には自由保守二大政黨相對峙し、堂々政論を上下し、輿論の翼背に依り內閣を組織するの觀あるも、實際兩黨は異體同質の貴族階級の集團にして、政權をして他階級の者に奪取せられざる、一つの狎合即ち八百長的對峙に過ぎざる也、上杉博士は奇警なる譬例を以て此兩黨の狎合對立を罵倒せり、曰く英國二大政黨の對峙は國技館の相撲が假に東西に岐れ角逐するが如し、畢竟觀客の興味を惹かんが爲めの仕組にして、眞に敵味方の東西にあらずと、誠に穿ち得て妙なりと云はざるを得ず、之を是れ覺らずして、我國の政客學者等が英國の政黨に規律あり、節制あり、禮讓ありて圓滿に政權の推讓授受あるを羨望するは恰も醜婦の裝ふ粉黛脂紅に憧憬し其眞容を探らざる如く、痴呆の極と云はざるを得ず、若夫れ英國にして貴族が眞骨頭を露はし、二大政黨の假裝を脱し政權を掌握するが如きことあらんか、其貴族政治の今日あるを保し難かりしや火を睹るより晰かなりしならん。

然らば我國の政治は政黨及超然何れを採るを可とすべき乎、曰く政黨內閣可也、超然內閣更に可也、要は人材超凡の士を以て善政を施かしむれば足る、然り全一の統治績は區々の政論に因つて破壞せらるれば也、彼のプラトンの所謂フイロソオフが國家生活を維持する如くならざる可らず、換言すれば國家の生理及病理に就き、嚴正にして深刻なる智力判斷力を有する人材にして始めて政治を行ふべき也、歐米諸國は諸種の事情に羈束せられ此の理想的政治に手を染むる能はざるも、幸に我國は萬世一系の天皇を戴く、四民平等の國民は、天皇を中心として牢固たる家族的結合をなすあり、當にプラトンの理想國たるに適し、而も文明の程度敢て歐米に讓らず時期に於ても人材政治を實行するに適せりと云ふ可し、吾人は日本は世界に大發展の素質を有するを知ると同時に、今や其素質をして外界に表顯すべき好適の時期に到達したるを思ふ、歐米各國が政黨政治の爲め、或は貴族政治となり、民衆政治となり、堅牢鞏固なる國民的結合を爲し得ざる弊患に病むに鑑みず、却つて自己の優秀なる素質天與の國情を忘棄し、其除かんとして拭へ難き汚弊の政治に倣はんとするは、恰も自己の美玉を以て他人の瓦礫に代へんとす愚擧ならずや。

斯く論ずればとて吾人を以て寺內內閣の謳歌者と爲すは非常の誤認也、吾人は寺內伯及閣僚其人々を以て敢て理想の人材也と推賞する程の痴呆に非らず、特に彼等が個々の政策に就ては非議反擊すべきもの尠しとせず、唯吾人は今の政黨者流が徒に政權に戀々し、超然內閣なるが爲め、官僚政治なるが爲め反對すと云ふ惡聲を耳にするを厭ふと同時に、政黨、超然、何れにも偏せず黨せず立派なるフイロソオフの實現政治を望むの餘り此說あるのみ。　（新、六、一九）

# ◉正貨處分論

歐洲大戰の爲め、軍需品の引受、米國の富力增殖の結果該國に於ける物資の需要增加、歐洲品輸出杜絶より來る南洋支那方面に於ける需要劇增等の原因となり、我國に於ける貿易好調を呈し、戰爭開始以來每月平均二千三百萬圓の輸出超過を見るに至り今や多年輸入超過に苦みたる我國は劇轉して七億圓の正貨を吸取せるの成況となれり今後猶ほ一年間戰爭繼續するものと暇定せば少くも十億圓の巨額に上らんこと見易き數理也、是れ我國未曾有の經濟的現象にして、其經濟界を振撼動搖するに至たるも當然にして正貨の處分如何は實に現下我國の重要問題として、當局者は勿論學者實際家の間にも大に攻窮討議せらるゝに至れり、今玆に論議討究せられ、將た既に實行せられたる處分法なるものを類別すれば、概ね左の六說に過ぎず。

(1)外債償還說。日本は十六億の國債ありて、之を放置するは國家の禍根たり期限未だ到來せざるに關せず速に償還して此禍根を斷づるを要す云々。

(2)正貨蓄積論。這は前說に反對の徑路を取らんとする論にして、戰後各國正貨の大需要起り、外國に正貨を吸收せられんか、忽ち輸出超過を變じて輸入超過の悲境に陷るの怖れあれば、今にして大に





之に備へざる可からずと云々と。

(3)生產奬勵說。此說は既に前內閣時代より唱道せられたる『正貨の資金化』なる語にて主張し、經濟の根本義は生產の發達を圖るにあり、生產の發達を圖らんとせば資本を投せざるべからず、即ち資金として正貨を利用せざる可からずと力說す。

(4)對外放資論。債務國たる日本は、幸にも正貨允飽の今日、海外に放資して經濟上理想とする債權國たらざる可らずと云ふにあり。

(5)公債拂下說。此說は主として金融調節策に出發したるものにして大藏省預金部及日本銀行の有する公債を一般に拂下げ、因つて得たる代金を以て外國證券を買收し、自然の間日本の金をして外國の資金に需要せしむるにあり。

(6)外國債應募論。這論は結局對外放資論の異體同心にして結論に於て一致す、既に本論の一部は實行せられたるものあり、即ち大藏省所有の露國大藏證券一億四千萬圓を市場に賣り下げ、又近く英國々債募集の計畫あり、畢竟此論は聯合國をして日本市場に於て國債を募集せしめ、直接外國證券に放資する經濟策なり。

以上の六說素より一長一短あり、利弊得失の存するものあり、特に經濟界の變動は朝夕を測り難きものありて、實際を適應し變動に機處せしむべき經濟策を論評する至難の事情ありと雖も、吾人平生經

濟政策を攻窮する任務にあるもの、此の國家興亡に關する大問題に逢着し恁麼座視するに忍びん、聊か卑見を披陳し敢て當路者參考の資に供する所あらん、第一說の外債償還の得失に就ては、吾人が曩に減債基金を論評するに方り詳說せる如く、個人は勿論國家と雖も好んで借金すべきに非らざるべきも又絕對的に借金を不可と斷ずる能はざると同時に、一旦必要ありて借金したるものが期限の到來を俟たずして、僅に餘裕の生じたればとて忽愰として償還を急ぐの愚策たるは云ふ迄も無く、論者が借金を以て百年の禍根を殘すとする論斷には旣に前提に大なる錯誤ありて、經濟的智識の有無すら疑ふべき淺薄の論議として吾人は組みする能はず。（猶ほ其詳細を知らんと欲せば本紙第二號社說減債基金論參照せよ）第二正貨蓄積論は前說の消極的なるに反し、稍々積極性を帶びたる點に結論に相違ありと雖も、吾人が贊同する能はざるは一なり論者が杞憂する如く他日輸入超過の貿易狀態を招致することあらんか、僅かに二三億の正貨を準備したりとて、忽ち海外に吸取せられ元の杢阿彌に返らんと見易き理數也、故に不生產的に國庫に藏置する正貨をして有要の方面に利用し、大に其增殖の方法を講じ自ら奮つて輸出減少の防護を策するを要す、何を苦んでか敵の侵入に放任し死地に陷るの愚を敢てせん哉、之を爲す須らく次の生產奬勵に論ずる如く、生產の發達に資し、大に外敵と拮抗對戰するの大覺悟ならかる可からざる也。

第三生產奬勵說に至つては國家百年の大計を策する上乘適切の經濟論として吾人の歡迎する所也、



唯具體的に如何なる種類の生產を奬勵すべきや、如何なる事業に投資すべきやの選擇問題に對しては更に於以上の深慮遠尋を重ぬる必要あるも、其所謂大綱を決し方針を定むるには簡にして明なり、曰く從來の統計より打算し割出して、輸出額の大にして輸入高の多きものを順位とすべきなり、即ち輸出を增加し輸入を防止するの自然の理數に出發したる計策にならず、歐洲大戰終局の期は近けり、終局の曉襲來すべき經濟大戰に向つて優者の位置を占むるには豐富なる生產力に待つの外なし、今にして黃紫の途に迷ひ一步の過は千里の悔を貽さん、豈逡巡、躊躇すべき秋ならんや。

第四の對米放資、第五の公債拂下、第六の國債應募諸說は、各其方法徑路を異にするが如きも、其結果として海外に放資すべしとする目的に於て其揆を一にせり、思ふに是等の經濟策は金融の調和、即ち刻下の我國經濟狀態を救濟するに少補なきに非らざるも、以て百年の大策を畫するに足らず、特に公債の借換若くは政府所有の證劵を拂下ぐると云ふのみにては、單に公債の所有者を變更するに止り一般の金融調節に効果少かるべし、又漫然外國に放資するに於ては、資金の固定及び回收上の危險あるを知らざる可らず、吾人の生產奬勵策以外、金融調節等の必要ありとするも海外放資のみを以て唯一の調節策と爲すは、餘りに智惠なき事に非らずや、國內に於ける從來使用せられざる方面に向つて資金を融通するの途を開かば、取も直さず金融の調節は成り、一面には生產物增殖の効果を擧ぐることを得て、所謂一擧兩得の方法たる可し、要するに對外放資を目的とする以上の三說は姑息綱維の小

策と斷ずるの外なし。

（新、六、一九）





## ◉減債基金の標準を評す

吾人の豫言せる如く寺内内閣組織の運命は遂に悲慘に終焉を告げたり、大山鳴動して小鼠の一頭も出でざるは滑稽事たり、龍頭蛇尾に終りしは寧ろ物足らざる感なきを得ず、然り寺内伯の運動は一旦失敗に歸したるに相違なきも伯も左る者也、特に周圍を環繞する官僚閥族の小豪傑小策士決して乏しと云ふ可らず、虎視耽々風雲の再會を期待し、捲土重來の謀畧其帷幄の内に籌策せられありと觀測すべき理由ありて、這般の一蹉躓を以て全く起つ能はざる大痛痍なりとするは少く速斷に過ぐるの嫌ひあり、況んや勁敵政友會の在るありて豈隙の乘ずべきを覗ふに於て哉、現閣乃至與黨たるもの豈委如たるを得べき期ならんや、見よ〳〵與黨に於ては三派合同を策畫するあり、政友會亦内奏問題を以て先づ伏線を張り挑戰の氣勢を示せるに非らずや、來るべき議會戰こそ眞に兩黨の關ヶ原戰にして、其龍攘虎搏の狀今日に想像するさへ肉躍るの感なき能はず。

來期議會に起る重要問題尠なからざるべし、而も決戰的に兩軍に重大視せらるゝは敢然貴族院の肉薄すべしと推測すべき減債基金の標準問題にして這は吾人の本領たる經濟財政策の一圈内に侵入せしものなるを以て、吾人の嚴正中立權を侵犯せられたる觀ありて默視するに忍びず、今茲に本題を掲げ聊

か抗議的論評を試みる所以なり。

本問題表面に現出せる事象は頗る簡にして明也、要は減債金五千萬圓の配分如何と云ふに過ぎず、政府は其五千萬圓の基金を分割して内二千萬圓を以て減債に充てんと主張し、政友會及貴族院の一派は其基金全額を減債に當つ可しと論じ、國民黨は三千萬圓の減債標準は政府と同一意見なるも二千萬圓の鐵道流用額を減税に振り向くべしと説くに過ぎず、勿論政府反對者流には租税收入の基金を鐵道資金たる特別會計に振り換へるを以て不法也と法理的論議を試むる者ありて多少反政府の基金論に相違の點ありと雖も、吾人が經濟的大局觀よりすれば斯る法理論は瑣々たる枝葉の議論に過ぎずして、第三十七議會に於て政府が貴族院との糊塗的妥協の有無と是非を今茲に繰り返すの要なし、吾人は我經濟的見地に由つて、什麼に政界の暗雲を掃除し得べきかを討究すれば足れりとせんの耳。

抑も所謂五千萬圓なる標準を定めたるは立法上將た經濟的に如何なる標準の根據ありしや、吾人の知る所にては曾て第二次桂内閣時代に金融逼塞甚しく實業家の巨頭等鳩首して議を凝らしたる末、是が救治策として七千萬圓の内債償却を政府に迫り、政府は之を減じて五千萬圓たるべしと應答したるもの、之が根源たるが如し、左れば實業家が要求したる七千萬圓に大なる根底ありしに非らず、又政府の定めたる五千萬圓にも深き理由あるにあらず、双方共に漫然窮餘の政策として一時逃れの假定額を拈出したるものなるを更らに之を今日に踏襲するの甚だ由れなきは當然の事に属す。



既に政友會及貴族院一派の主張せる五千萬圓基金は根據ある標準に非らず、而も政府が固執せる三千萬圓説に至つては更に於以上根據の跪弱なるものあり、何となれば政府の標準は單に國債高の一萬分の百十六以上を償還すべしと云ふに過ぎざるも、吾人の見る所にては我國債總額は二十五億萬圓なるも、特別會計に屬する鐵道公債八億萬圓を控除するときは、一般會計に屬すべき公債は十七億二千萬圓也、現に政府が年々租税を以て償還しつゝある國債は一般會計のみに止り一錢の微も特別會計に及ばざるに見るも、三千萬圓の租税償還金は取も直さず一般會計所屬の十七億二千萬圓に對する立案なること毫も疑ひの餘地なきに、十七億二千萬圓の一萬分の百十六を三千萬圓と算出せしは如何にも杜撰孟浪の至りにして、若し十七億二千萬圓より三千萬圓を算出せんとせば一萬分の百七十六餘に標準を置かざるべからずや、嗚呼現内閣が運命を賭して迄固執せんとする最も重要案件たる三千萬圓減債の標的にすら已に斯る杜撰孟浪の嫌ありとせば、我國財政經濟策の確立せざる推して知るべき也。

時勢は日々刻々變轉せり、我輸入超過に苦みたる經濟狀態は、歐洲戰の一時的變調にせよ戰爭開始以來一變して輸出超過に繼ぐに更に超過の好況を持續し、今や七億の正貨を倉凜に藏して猶溢れんとせり、固より正貨の充實より起る經濟問題は種々の方面に論議せらるべきも、之を以て永遠に亘る借金返還の年賦基金の基礎とすべきは早計也、否な考慮すべき問題たり、況や政友會及貴族院一派の政客が根據なき五千萬圓説を實行すべき機運の良會也として來期議會に政府に肉迫せんと試むるは、所謂

難を見て時を望むに類する燥急短慮の計也、彼徒は動もすれば我公債の過大を恐怖する色あるも、彼の富强を以て誇る英國すら七十億萬圓の公債を有し、我國の十七億萬圓に對し正に四倍强の巨額に上り居れり、而も其歳入は二十億萬圓にして我五億の四倍に方るを以て、此が比例より見るも左まで借金の過大を患ふるに足らず、特に英國が公債償還の率を見るに、約歳入の一割二三分に該當せり、故に五千萬圓を償還するものとすれば其歳入に對する二割三四分の率となり、英國の償還率に超過すること一割一二分たり、富の度に及ばざる數等なる我國としては、餘りに借金を苦にし過ぐるの感なきを得ず、近頃英國有名なる經濟學者ハロールド、コックス氏が、或る會合席上に於て同國の財政經濟問題に就て一場の講演を試みたるを聞くに及んで、如何に經濟的抱負の雄大にして、而も財政策の慎密なるかに驚嘆せしむるものありて、我小膽にして粗笨なる政客の頂門に一針を加ふべく、特に左に抄譯して敢て參考の資に供せん。

『戰時公債の成功は英國の財政的彈力の强靭を示す矜り也、然れども今は眞の初歩に過ぎずして、更に戰爭の繼續するものとすれば、第二第三の公債を募集するの要あるや明か也、思に今回の戰爭に於て我等の國債負擔額は無量二百億に達するの覺悟無るべからず、左れば將來の財政は若し四分五厘の利子とすれば一年九億圓の多額に上り而も少くも一分の減債基金を設けざるべからずとすれば此分に て更に二億萬圓を要すべし、加之戰爭の終了と同時に又他に恐るべき巨額の負擔を迎へざるべからざ





るものあり、這は今日に於て誰人も注目せざる、戰死者の遺族扶助料、負傷者戰功者に對する恩給年金賞與金にあり、其金額も二億圓以上たるべし、斯の如くにして戰後の財政狀態を案ずるに、一般政費の外に約十三億萬圓以上の新たなる負擔を加ふることを豫期せざる可らず云々』

之を以て觀るに英國の政府及國民が、其豪壯偉大の決心に立脚し、猶且つ慎重精緻なる經濟策を緯とし、財政策を經とし決して燥急杜撰、小膽粗笨なる政客が計上せる五千萬圓、三千萬圓と云ふが如き砂上に築造せる根據薄弱なる豫算を以て相爭鬩することなき一班を窺知し得べし今や我國の機運は將に勃興せんとす、少くも正貨の七億臺に充實せるは未曾有の現象たり、英露に對する同盟の功果を收むるの機會も此秋にあり、支那、滿蒙、南洋方面に攫取すべき利權を實際に獲得するには更に於以上の資金投入の要あるべし、減債基金の如きは可及的其率を低下し、敢て英國の例に倣ふとにはあらざるも、一分若しくは一分五厘を以て足れりとし、無用の政爭を避け以て上下一致して國家の大策に協力するを要する秋に非らずや。

（新、五、九、八）

## ◉寺内内閣の基金還元振

寺内内閣の中心人物たる後藤、仲小路、田の三氏が曩に貴族院に據りて、隈閣の元債基金不還元に對し、手痛き攻撃を加へたる面目上、如何なる遣繰り算段を爲すも前主張を實行せざる可からざる一種のヂレンマに陷りたりとの風評ありしが、道が腕揄の豪傑連の事とて世間が頭痛する疝氣程にも感ぜずと見え、ヅン〳〵計畫の歩を進め單に六年度丈けの還元に止めずして永久的に該方針を以て進むべき方案を立つるの模樣あり、之が財源標準は七年度より十二年度、即ち海軍補充費最終支出年度迄六年間に、毎年二千萬圓宛合計一億二千萬圓の支出を第一期とすべく、此財源捻出の爲に、一般會計より朝鮮會計の貸付に係る四五兩年度分千四百萬圓、鐵道院四年度分同上二千萬圓、合計三千四百萬圓及び今後算出すべき五年度豫算殘額中、朝鮮會計に對する分五百萬圓、鐵道院に對する分二千萬圓合計二千五百萬圓以上、總合計五千九百萬圓とし之に對し借替公債を發行して國庫の餘裕を作り、尙ほ其不足額は自然增收、事業繰延、政費節減等を行ひ補充する成算既に成れるもの〻如く一向苦にせざる狀態也とは妙也。

（新、五、十一、二）



## ◉列强の自刷と國民の覺悟

歐洲列强が大戰に於て競ふて其自制力を訓練し、發揮し居る一事は吾人の大に注意すべき事象たり。露國は開戰後陸軍に向て一切ウオッカの飲用を禁止せり、彼の三十五億の歳入中十億ルーブルを占むる主要收入を犧牲として迄の此の斷行は眞に偉なりとすべき也。

蓋し露國民のウオッカに於けるや、其害毒支那人の鴉片に於ける夫れの如し、彼等が健康は之が爲に侵蝕せられ、彼等が財囊は之が爲に枯渴せり、假に露國が戰爭の爲に何物をも贏ち得ざりしとするも、各國民が治し難しとする惡疾を恢復し得べしとせば、其永久に與へ得べき人生の幸福と利益は、區々たる領土と償金との比に非らじ。

獨逸も亦此戰爭に於ける自制力の効果を攫得せる事實は寧ろ露國以上たる觀あり。

『必要以上に食す可らず』との詔勅を嚴守せる該國民は、是に依つて自個の健康を增進し、國家經濟に貢献する所甚大也、六千萬國民一致の自制力が驚て如何に顯著なる効果を齎らしたりしぞ、曾て全世界をして觀測せしめたる該國食料の渴盡六ヶ月の後ちなりとしたるもの尙ほ二年間支えて綽々として餘裕あらしむ、加之此自制心より馴致すべき尊むべき良習俗は、其戰爭に費したる百萬の生靈と百

億マークの財貨を償ふて尙餘りある可し。

更に佛國民が唯一歎樂の原料とせしアブサン酒は嚴禁せられたり、彼の戰國の柱石たるジョフフル將軍に依つて聲言せられたる國民嚴肅の態度が、アブサン酒禁止に依り一層の價値を招きたるは勿論、同國民が將來に享有すべき幸福は幾許ぞや、實に計數以上に大なるものあらん。

彼の故キッチナー元帥は英國に於ける戰神と追崇せらるゝ偉人たり『汝の健康全からずんば、汝の義務と責任を遂ぐる能はず、然る時汝は酒と女を愼む可し』とは彼が戰國の部下將卒を訓戒せる言也、此の一訓戒の實現は英國の戰陣を振肅し、服膺を强からしめたりと云ふに非らずや。

省て我日本國民の現狀は如何ん、一青島の占領に氣驕り心矜り、變調の貿易關係より來る輸入超過に隨喜し、來るべき禍機の潛在を覺らず、人心浮華に流れ奢侈に傾き滔々として底止する所なからんとす、憂國の士たるもの豈座視看過すべき我現時の國狀とせん哉、豈各國の自制と覺醒に省る所なくして可なん哉。

（新、五、七、十八）



## ◉我國人が大戰に對する誤想

昨今我國人の一部に世界大戰の戰局を視るに甚しき誤想に出發する傾向あるは憂ふ可し、云ふまでもなく、我國も等しく大戰の戰渦中に投ずる一國として獨墺軍は我敵國たり、單に一青島を攻略したるの故を以て其責め盡きたりとして、獨墺對聯合國の勝敗の如きは、風馬牛關せず焉的の態度を爲すに而已ならず、戰爭の永續を以て我經濟界に利すること甚大なりと爲し、寧ろ戰局を一日も永からんと望むの風あるは何ぞや、蓋し斯る不謹愼なる態度に出づる所以は、一時的變調の有利貿易調子に眩惑せる陋況にして遺憾なく輕佻浮薄なる商人根性を曝露し肇國來の仁義と武勇を以て國民性と世界に誇りたる所謂武士道的名譽を滅却する非愛國行爲の甚しきものと云はざるを得ず、況や戰局の如何は依て以て我國の將來に容易ならざる難問題の橫はるべきことは、眞面目に國事を憂ふるもの〻理會すべき國際關係の實相たるに於て哉、試に思へ萬一にも獨墺側の勝利又は相引の程度に戰局を終ることゝせんか、渠は其の餘威を藉りて我國を其馬蹄に蹂躪せざれば已まざらんとするなる可し、即ち青島及び南洋諸島支那利權奪還の擧は先づ最先に行はれ、次で各種の方面に威壓、脅迫、衝突、紛糾到らざるなきを覺悟せざる可からず、更に戰局の永かるべき程、敵國に有利にして聯合國に不利なる事情あ

り、如何となれば敵國は獨逸を主盟として埃土等の加擔するありと雖も、其利害關係の近似する聯合各國の比にあらず、而も戰局を終始する獨力を以てすべき覺悟と準備の決意ある獨逸は其矢折れ彈盡、所謂斃而後已牢乎たる決心愈々益々固らん形勢を示すに反し、聯合國は其利害背反の事情頻發し遂に一致の行動に出づる能はず、破綻百出衝肯相次に至るべきは見易き理路にして、既に露國の單獨講和の萠芽あり、少くも休戰狀態に陷らんとする兆候あり、又支那參戰の議が端なく大動亂を誘起せんとする危機の閃きあり等、今後幾年の持續戰中如何なる內訌的紛爭を聯合國に惹起せんも圖り難き狀勢あるに非らずや。

現下歐洲戰局の狀勢を見るに西部戰場に於ける英佛聯合軍の總攻擊は豫想の如くならず、却て佛軍は大損害を蒙り殆ど一敗地に塗れたる慘境にありと傳へられ、假し捲土重來再度の總攻擊近にありとするも、此一擧にして獨逸が全く起つ能はざる狀態に陷るべしと想像する能はず、結局疲憊と窮狀は相方互角也、況んや獨逸が壘を固ふし死守的持久戰の態度を取ることもあらん乎、到底聯合軍の現勢のみを以てしては最後の勝利を近き將來に期する不可能事たり、又東部戰場は猶ほ一層懸念に堪へざる狀況にあり、或は恐る露軍革命後の狀勢頗る戰況に憂ふべきものありて、獨逸の乘ずる所不測の禍患を招徠する莫きやを保し難く、假に斯る憂慮すべき事實なしとするも、露國が攻勢に出で西部聯合軍に策應するが如きは絕對に不可能と斷言するも可なりと信ずべき形勢にありて到底望を此方面に屬



する能はず、一面には獨逸の潛航艇作戰の機略眞に侮り難く英國の海軍力も手を拱して彼が暴威に委し、米國の參戰幾許の貢獻ありやも疑ひなき能はずとせば、大戰の前途尙遼遠なりと測斷すると同時に其勝敗の數又容易に逆睹し難きを思はざるを得ず。

我仁義と勇武の國民性として、將に參戰の名分を完ふすべき重責として、此塲合歐洲戰局を冷眼視すべきに非らざるは勿論、進んで速かに獨埃軍を屈伏するに最善と最大の努力を聯合軍に藉すの策に出でざる可からず、彼の一部淺見者流が一時的變態の利益に眩醉して却て戰局の永からんを云ふ、非社會的非國民的論議の如きは皷を鳴らして排擊して可也、固より最善最大の努力を聯盟國に藉すの策一にして足らずと雖も、邦軍一師團位の精銳を戰塲に送るも可ならん、一師團の兵數甚だ多きに非らざるも、其士氣を聯合軍に皷舞し、軍容を振作して以て敵膽を寒からしむるの功果に至つては豫想以外に甚大なるものあらん、又近來傳聞する日英米共通の造船計畫の如きは最も時機に適したものにして、躊躇なく其步を進むるの擧に出づるを要する良策ならん、吾人は衷心より我國人に告げん、大戰の成敗は我國の大義名文を全ふする上に於ても、將來の利害關係より打算するも、敵國を全滅し且つ戰局をして一日も速かに終了せしむるに努力奮勵せよと。

頃日政府が發表したる海軍參戰の事實の如きは吾人が期待の一部を遂行するに止め、未だ之を以て滿足すべきに非らざるも政府にして此意義あるは甚だ可し、吾人は現內閣を無能と呼ぶ聲を轉じて先

づ國民の無氣力を責めざるを得ざるを悲む、特に一部黨人輩が陋穢なる心事を以てして斯る重大問題迄黨爭の具に供するを惡んで已まざる也。

（新、六、七、五）





## ◎寒心すべき傾向

近來物價の暴騰、生活狀態の激動に基因し、企業家と勞働者、雇主と被傭人との間に頻々として發生する葛藤と紛爭の原由は、主として其待遇問題即ち勞銀値上の容否に關するもの多如し、此傾向は我國古來美風の一たる家族的主從關係を根本より破壞する一種の良俗善習のクーデターと見るべき、國家風敎に關はる重大現象たると同時に、國民生活の激變匡救に擊る主要の社會問題として識者の討究に値ひす。

想に時局發生以來我經濟界には未曾有の順調を來し、特に各種企業の勃興に伴ふ利潤は大小資本主の懷中を肥し簇々として所謂成金を釀出せるに反し、一方には國民の多數は物價の暴騰底止する所なきに收入之に伴はず、日に月に生活難を招來し恰も彼等が成金の肥滿せる懷を見る狀態は、充溢せる倉禀の前に立つ飢餓者の如く、手を拱して之を羨望するも採つて餓腹を充たす能はず、遂に羨望は嵩じて妬心となり、疾惡となり、憤懣となり、反抗となる又情勢の已むを得ざる也。

有らゆる罪惡の眞因の底には生活問題潛在せり、良心の麻痺＝激憤＝暴行＝窃盜＝殺人＝の因つて起る所を探究するに於て、悚然として驚くべき發見は何時も此の生活問題特に偏重せる、侮辱せる、

抂屈せる生活問題に觸れさるはなけん、偶々多數生活問題に苦む鬱積せる不平は企業者の直近の關繫ある勞働者徒弟の輩を先驅として、其待遇を進善せんと迫り勞銀を增加せよと訴ふる斥候戰に過ぎず豈一升三十錢の米飯を喰ふ生活難者、飢餓者、不滿者、憤激者が獨り勞働階級に限局すと云はんや、決堤一穴澎湃と押し寄せ來る濁流を見て砂袋を繕ふは已に遲し、盜を見て繩を綯ふより迂也、爲政家識者たるもの〻深鑑沈着すべき憂患事とせん哉。

爲政の要訣は庶民を恭んするにあり、識者の責務は善事を奬むるにあり——優勝劣敗は天の理數也人爲の左右すべきものに非らずとして袖手傍觀するに於ては、爲政家識者は既に社會に於ける無用の長物たり、彼等をして膏血を絞りたる租稅を喰ましめ、尊敬を拂ふの理由絶對に喪失せん而已。

天の未だ雨らざるに其牖戸を綢繆せよ、近時大小成金の輩が豪奢其絶頂に達し、內には常識を以て斷し難き狂態を演じて恬として怪ます——或る者は田舍の一旗亭に小憩し百金の茶代を投じし亭婦を驚倒せしめ、或る者は一夕の招宴に客數の黃金杯に綠酒を盛りて來客をアット叫はし獨り悅に入りたる愚行を敢てし憚からず——一面には此の九十度以上の炎天の下汗みどろとなつて營々役々の勤勞も以て妻子の口腹を充すに足らず、餓孚途に橫はらんとする悲慘の境地ありとせは、其逸苦樂勞の境界餘りに懸絶の甚しきに驚かざるを得んや、成金の徒口を開かは則ち曰く『俺の働で儲けた金を、已が自由に費ふに他に憚る所があらうか、口惜しければ眞似て見ろ！』と曷ぞ不遜の言ぞ暴慢の語ぞや、



嗟乎、成金にして然り、爲政者識者にして然りとすれば斯の蒼生を奈何せん、我國の前途に想到して戰慄の感なくんばあらず。

然らば必然到來すべき禍患を防ぎ、狂瀾を既倒に廻へすの策如何ん、曰く第一——勞銀、賃金、給料、月給等を此塲合少額者より適順に昇騰の道を講ずることを急務とす、一部論者の如く物價騰貴は一時的の變體なり、賃銀等は永遠の性質を帶ふとの懸念あらは名義は如何なるものを選むも可なり、結局對症的療法を此變局に處するを以て足れりとせんのみ、第二速に物價調節を實行するにあり、物價特に日用必需品を最先に調節するを急務とす、調節の法に種々あるべきも必需品中米穀の輸出禁止を斷行し、談運賃を低下し運輸を敏速にするを始とし、一般通貨の膨脹を緊縮する方策としては外國債を買取し、資本を外國又は殖民地に放下する等の途に出づるを要す、又消極的には彼の思はく買、買煽りの如き奸商の惡手段を嚴重に取締り詐欺的人爲の騰貴を防過するにあり、第三戰時利得稅及奢侈稅の如きを苛重に賦課して、偏重的富の分布に資し、傍ら成金奢侈の幾分を緩和する一方には血稅の輕減に力め、又社會制裁を嚴にし成金等の暴奢を戒め、彼等をして覺醒して狂奢の態を改め、努めて其一半の資を割て慈善事業に投せしむべき也。

素より如上の救濟策は應急對症の姑息法に過ぎざるも、斯くして奐奢せる人心を緩和し、墮落せる成金の獸情を抑止するは、焦眉の急を極ふに於て功果鮮少に非らずと思惟す。（新、六、八、四）

# ◎國富と物價騰貴

我國の貿易出超額は將に一躍三億圓に達せんとす、積年の入超に苦しめられたる貿易狀態も今一歩にして之を償ふて餘りあらん、正貨の流入七億圓政府却て其調節按排に焦心す、素より米、英、佛、獨の大國に於ける富力に及ばざるは勿論、更に和蘭、丁抹、端西、瑞典等の小國に對して遜色あり特に歐洲大戰の影響より俄かに富力の增加せるは、交戰國の物資缺乏に基由する物價騰貴の僥倖的一時の事に屬し、我國永久的堅礎の上に形成せられたる富力と認むる能はず、或は恐る今日吸收せる富は戰後反對に之を流出の悲境に傾くなきやを、而も國民の奢侈心增長せると同時に、物價頻に暴騰して底止する所なく、此波濤は滔々として戰後に洶湧掀飜して、我財界を侵害するに至らんことを患て止ます。

歐米諸國に於て屢々遭遇し經驗する戰時財界の膨脹に對する處機の方法殆ど備はれりと雖も、我國に於ける變體の富の增加、而も夫の富の分配たるや徒らに少數なる資本家等に占得せられ、大多數の國民各階級に霑被せられざるに拘らず、物價暴騰斯の如く將に生活窘迫の大慘事を來さんとする狀勢なり、余輩の記臆する所に依れば、各國の社會問題を惹起せしは我國現時の如き變態の富に狂喜したる後、國民の覺醒したる瞬間にありしもの〻如し、貧弱國に社會問題の起りし例乏しきは、富の分配比





較的均衡を保ち、懸隔の度甚大ならざるに因る、我國が由來社會問題の激甚ならざりしは、畢竟國民間の貧富懸隔歐米諸國の如く顯著ならざりしもの其一因たるは掩ふ可らざるの事實たり、然るに今や變調なる富力增加に遭逢して之が分配適當に行はれず、特に一擧鉅億の富を攫得せる成金者中には人道を顧みず、德義を沒却して殆ど白晝の公盜的行爲に出でたるものあり、而も一方には半椀の食にさへ窮するものあらんとす、今後富の增加甚しきに伴ふ貧富の懸絕愈々嵩るに至らば、社會問題澎湃として襲來するや必至の理勢ならん。

國富の增加より歡迎する所たらずんば非らず、然れども不自然と非條理より來れる富が嬾て如何なる程度迄國民の滿足を持續すべきやを思はざるべからず、富の增加が貧富の懸隔を招き救ふ可からざる社會問題を惹起したることは、歐米諸國が數々遭逢せる苦き歷史の證明する所たり、富と貧、唯か之が採否の決に迷ふ者ぞ、然れども複雜なる富者の家庭裏面に忌むべき秘密伏在し秋風肅殺の感常に多きに反し、單純なる生活に馴れたる負者の一家が、晩餐の一膳に互に杯酒を交はし肴を頒ち和氣藹々の娛みあるが如く、一國の貧富又比觀なきに非らず、變體なる我國現時の富に狂喜する愚者は與に談するに足らず、苟も憂世愛國の志ある識者先覺者たるもの、甚深の老慮なくして可ならん哉。

# ◉戰後の貿易觀

日清日露兩戰役後、日本の物價は著しく騰貴し、最近歐洲戰爭勃發前に於ては、實に世界物價の平均額に比し、一割二分方の高位にあり、是れ先に戰費に原因する增稅等の爲め、國民の負擔增大せる結果也、而も今次の戰役は前二回と大に其趣を異にし、增稅公債等國民の負擔なく却て軍需品の注文、歐洲戰輸入杜絶より來る邦貨販路の擴張等の爲め、從來輸入超過に苦み居りし日本は、俄然形勢一變今や巨額の輸出超過を來して正貨は一大增殖を示し、眞に國際的に國力の大發展を爲すに至れり、是戰後の我貿易が最も有利の地位にある第一の理由なり、又歐洲各交戰國は何れも巨額の軍費を費し、其總額既に一千億圓以上に達せりと傳へらる、戰爭の終局迄には尙多大の軍費を要するや必せり、是等交戰國が戰後經營に要する資金も容易の額にはあらざるべく、而も是等は皆國民の負擔たるものなり、從て各交戰國々民の負擔は、戰前に比し幾倍を加ふるや知るべからずして其負擔は勢ひ製造工業品に轉嫁せらるゝを以て、物價騰貴は避く可らざる結果也、高價なる商品を以て低廉なる商品との競爭は經濟的眞理の敗者たるは云ふまでもなけん、是戰後我貿易が最も有利なりとする第二の理由なり凡そ商業工業航海業の何たるを問はず、第一の要素は人間也、歐洲各交戰國は此大戰後に於て一國の





中堅たる廿歲以上五十歲以下の男子を多數死傷せしめ、之を戰前の狀態に復するには幾多の歲月を要すべく、是れ我國が貿易上最も有利なる地位にある第三の理由なり、或る杞憂論者は戰後獨逸の投賣り、米國の活躍を患ふるが如きも獨逸が物價大缺乏の事實に省み投賣等の起るべき理由なく、又米國とは原料の交換利益の互與益々旺盛を極むる必然の結果として親密の度を增すとも、利害相違反するが如きこと萬是れ無かるべしと信ず、乃ち日本の製造業者、貿易業者、航海業者等が各戰亂中に得たる利益と經驗とを充分に利用し、且つ其地步を飽迄保持し、益々發展の準備を怠らざれば、假令平和克復後と雖も競爭に敗衂せる樣の事は斷じて無からん、之を是れ思はずして一度講和風の吹き來るや經濟界の一角に波瀾洶湧、株式暴落の醜態を演じたるは、畢竟我實業界が偏に投機熱に浮され、其根底の脆弱を曝露したるものにして、海外諸國に對し恥ずべき限り也、我實業家たる者迭に相戒め、確固不拔の大決心と信念を以て戰後經濟戰に處するに於ては萬々失敗する事なきを確信す云々。とは田遞相の余輩に漏らせし時事觀也、吾人は大體に於て遞相の意見に贊同を表す、要は鞏固なる確念を此未曾有の時局に持し、所謂大日本の基礎を築成すべきは、眞に千載一遇の機會たり得べきを知らしめんが爲めの苦言たる也。

（新、六、一、九）

# ◉公　債　政　策

特別議會に提出せる追加豫算及實行豫算に計上せる本年度に於て募集す可き公債並に借入金は無量一億六千萬圓と稱す、曩に現政府が鐵道事業資金を公債支辨に改正せると同時に、減債基金を五千萬圓に復舊するを以て財政の根本方針と爲すもの〻如く、既に實行豫算に依つて第一の目的を達し、更に進んで第二の目的を遂行せんとす、吾人は絶對に公債政策を不可とするものにあらざるも、今や我國の經濟狀態は未曾有の盛況を呈し、正貨膨脹金融緩漫殆ど其極に達し、此好機會に乘じ民間の對外放資を盛んならしめば、一面に正貨利用の善良なる方法たり得るのみならず、之に依て通貨の膨脹、物價騰貴の趨勢を制し、輸出爲替の資金を增加するの効果を擧け得べし、然るに巨額の公債を募集して民間の資金を吸收するは自ら對外放資を減少するの惡影響を招來するの憂念なしとせず、加之現內閣が減債基金を五千萬圓に復舊せる趣旨は成るべく公債の總額を輕減して國庫の負擔を減少するにありながら一方に益々公債を財源とする計畫を立て結局反つて國庫の負擔を加重するは政策の矛盾と云はざるを得ず、勿論時局の結果として經費の膨脹を來すは固より已むを得ざる趨勢なりと雖も、吾人は猝に斯る矛盾と危險の政策に依らざるも他に適當の財源なきに非らずと思惟す、例は英佛等に於て實





行せゝ戰時利得稅の如きは此際最も適切穩當の財源たり、抑も戰時利得稅は課稅標準の容易なると、金額の莫大なる點に於て最も斯る變通的財政按排に効果あるのみならず、被課稅者側に於ても富豪階級又は成金の類に屬するを以て苦痛を感ずる程度少なく一擧兩得の利益存する也、吾人は現內閣が事茲に出ずして姑息の公債政策を主としたる財政計畫を贊する能はず。

（新、六、七、五）

# ◉大隈侯の講和觀

獨逸の講和提案は少しく突發の觀ありて世人面喰の體あり、特に米國の仲裁振り些と變挺たるに至つて更に面喰の度を增さるゝを得ぬやう也、而も問題は双方既に取疲れて、此上相撲を繼續するの餘力なく、米國の行司的軍配に依り、水入引分と云ふ段取りに相成るや否やにあり、然して余の考にては角力の餘力亦々有りと推斷するものにして、今假りに講和成立するものとすれば、今次の戰爭は全然無意義に終るべし、有史以來の此大戰爭は本來平和主義と軍國主義との衝突、專擅と自由との爭にして、獨逸が尙ほ多少の戰鬪力を餘す今日早まつて講和を敢てするが如きは、軍國主義の存在に裏書するものと做すべく危險是れより大なるはなし、乃ち聯合國は獨逸が具體的に講和條件を表明せざる限り、容易に其提議に應せざるべく、斯くて講和が何時如何なる條件にて成立するかは興味ある問題にして、今日何人も其豫測を至難とするも、聯合國は東西兩部の局面、巴爾幹交戰地の有利なる地部を得ざる以上、敢然として戰爭の繼續すべく、アルサス、ローレンの還附、獨軍占領地の返還賠償、伊國のツエリスト恢復、白國の版圖復舊、東洋、南洋殖民地の歸屬を決定するに至らざれば、講和は斷じて成立すべからず余は戰爭の繼續を以て人道の爲め、轉た痛嘆に堪へざるも、永久平和獲得の爲是れ亦已むを得ずと信ずとは、大言侯の例に依つて例の壯語とのみ斷ずべからず、侯も又時局を視るの一隻眼を有するものと云ふ可し、唯惜むらくは侯の口より出でたりとして、此言を聞くに迄んで、聊か眞摯を缺くが如き感あるを奈何せん。

（新、六、一、九）

## ◉政友會の選擧法改正意見

吾人は或る程度内に於ては、兎に角政友會を以て比較的我憲政下の理想に近き政黨なりと信望を吝まざりき、少くとも民衆基礎の上に立つべく、組立てられたる以上は、選擧權擴張に對しては、其成否は別として一大抱負の實現に努力すべしと信じたる也、曷ぞ計らん、去月十六日政務調査總會に於ける同會の決議なるものを見るに、改正の骨子とも云ふべき、納稅資格五圓以下に低下するの一條を削除して全く該案をして骨拔きたらしむるに至れり、吾人が從來僅に繫き得たる民衆基礎てふ信望の絲は既に斷絶せざらんとするも豈得べけんや、加之區々たる官吏の選擧運動を禁止すと云ふが如き小問題を捉へて力說强論するとは何事ぞや、推測するに斯る莫迦氣たる問題に力瘤を入れるに至りたる原因は、前の總選擧に於ける大敗衂の因由を大隈内閣の干涉と誤想したる結果ならんも、豫て言論の自由責任内閣の實現等を標榜する手前に對しても能く甚麼(たんな)音を出されたものなり、且つは大多數黨が一選擧の爲め俄然少數黨に變じたる理由を他に覓め得ざる其近視的淺見にも呆れざるを得ず。

特に最も驚異の感に堪へざるは、選擧界目下の一大通患とする所の、金權、縁故、門閥、權勢等の爲に神聖なる權利を蹂躙せられ易き、小選擧區制を復活せんと試むる一事也、論ずる迄もなく理想的選



擧なるものは、主義、政策等思想上の同感者を可及的廣く多く求め、民衆自由の意志を迎へ、而も多衆民意の綜合の下に、其主義、主張を實行するに便宜なる方法を採るにありて、苟も民意を尊重し、民論を代表すべき、立憲的大政黨が今日小選擧區制の復舊を口にすべきに非らず、今や政變の機朝夕を量られず、同會が逆境を脫し得べき轉回の良會あるべしと期待する矢先に此事ある、吾人は同會の爲め惜まざるを得ず、政友會敢て其人に乏しとせんや、猛省一番を要す。

（新、一五、一〇、一五）

# ◉首相の訓示

事少く古びたる觀あるも、吾人は現內閣を以て現下我國情に於て最も期待多き經綸高き適切恰當の內閣也と信ずるの深きだけ夫れだけ、虛心坦懷を以て之に臨み靑眼鏡を去つて常に正視を怠らざる度は聊か黨人輩と選を異にせり、然も去月現閣が政綱の表示、少くも議會解散後の政見發表とも見るべき寺內首相の地方官に對する訓示は例に依り娓々數千言、大は歐洲戰局に關する要項より、外交、財政、經濟、國防、敎育の施設經綸に至り小は官紀、出版、言論、勤儉貯蓄に言及し、微に入り細に涉り諄々說き去り論じ來る所、卒然として之に臨めば頗る首相の胸肚に抱藏せる大經綸の發露たるが如き觀あるも、仔細に之を吟味するに於て聊か吾人の期待をして減損せしむるを遺憾とせざるを得ず、首相は訓示の末段に於て『此訓示は本大臣が自ら言責に顧みて實行せんと欲する所なれども、其實行すると否とは地方官の協同努力に待たざるべからず、各位は躬行實踐自ら軌範を示して地方人民を指導誘掖し其實績を擧げんことを希望す云々』と此希望に依れば吾人國民の知識程度は地方官の指導誘掖に待たざれば何事もなし得ざる低級のものと認むるが如くなれども、今日の地方人民と地方官との關係は然かく輕重あるべきに非らずして、斯る思想を以て國民に對する首相は既に時代錯誤に陷れる老耄





者たらずんば、所謂官僚式に囚はれたる頑迷の徒と擇む所なけん、又言論出版界が近時動もすれば驕激に亘り淫靡に流るゝを慨し、其取締を嚴にすべしと云ふも、是又低級なる思想と淺薄なる觀察より出づる斷案にして、寺伯が危險思想と認むる唯一の近例は支那、露國の革命を指稱するものならんも我國に於て如何なる驕激思想家と雖も、我國體を無視して民主政體を樹立せんと希ふ狂者もあらざるべく、況や之を言論の上に表白する愚物の存すべしとも思はれず、偶々稍々民主云々を口にし筆にすることあるは唯だ君民同化の我國體に迷ふ所謂頑豪なる閥族官僚の輩が政治を壟斷せんとするに反抗する態度に過ぎず、且つ淫靡輕薄なる出版物の現出することあるは事實なるも這は一部國民の淫靡輕薄なる嗜好に投ぜんとする、商估者流の爲にして、何れの邦國何れの時代にも免れざる現象たり、是等は警察取締の一瑣事たるに過ぎざるに寺伯が左も饒々敷國家の一大事たるが如く、殊更地方官會議に於て訓示したる小量短見に失望と驚異とを禁ずる能はず。

（新、六、七、五）

## ◉外交調査會と加藤男

犬養國民黨總理曰く『元來我黨は黨の爲に黨を樹てたのでない、國家國民の爲に黨を立て、多年惡戰苦鬪し今後も惡戰苦鬪するのである、此惡戰苦鬪は自分の爲で無い、國の爲である』又曰く『我黨は超然不可也と云ふ內閣制度の持論を拋棄したのでは無い、此一條の爭論をして國家の急場に於て姑らく延期したのであると』然り政治家の襟度は斯くあらねばならぬ筈也、今や政界四圍の狀勢は黨爭に耽るべき場合に非らず、少くも國防外交上の方面に於て擧國一致の焦眉の急務たる誰人も認むる所也

獨怪む憲政會總理加藤男が『我國が尙幸にして擧國一致を以て事に當る迄に事情切迫し居らず』として外交調査會委員たるを拒むの一理由とせることを、勿論男は調査會の組織其もの〻形式にも反對せる一理由を表明せるも、是皆堅白異同の强辯にして犬養氏の云ふ黨の爲に黨を樹て、黨の事情と一身の利害に打算し參會を拒絕せるものとしか思はれざるを奈何せん、元來加藤男は英國流の外交家を以て自信するの厚き殆ど英國民たるの觀ありて、日本國家の危急存亡の如き常に眼中に置かざるの風あり、故に男の眼底に映ずる日本現下の狀勢は、擧國一致を以て事に當るまでに事情切迫し居らざるやも量り難しと雖も、苟も憂國慨世の國民は斯る非國民的、沒常識の政治言動を容さざる也、益々國民





をして彼を離れ隨て累を憲政會に及ぼしつ〻あるは遺憾の極也、彼徒玆に於て既に政治常識だに喪失して死物狂の態となり、內閣不信任を議會に絕叫するも誰か之に寸分の同情を寄與するものぞ、唯だ其暴擧と狂態に呆る〻あるのみ、彼黨の末路も亦愍むべきかな。

（新、六、七、五）

# ◉歐洲大戰後の産業觀

抑も財界の沈退奏靡する所以は、之を縱に觀察すれば生産過剩、供給過多、物價下落、資本勞力の不利用せらるゝ現象也、更に之を横に觀察せば消費力缺乏、貯蓄過多に基因するものゝ如し、吾人は以上の觀察を基礎とし戰後財界の盛否を測定するバロメートルと爲さんとす。

現下戰後財界の盛衰と隆替を論ずるものに樂觀、悲觀の二説あるものゝ如し、我經濟學界のオーソリチーたる田尻北雷博士は、戰後の財界を以て恐慌なりと斷ずる悲觀派の急先鋒たり、然雖其恐慌を論斷するや、大戰後の恐慌が今回に限りある特別の事情あるが爲に然りと爲すか、又は恐慌は必然的に來るべき大戰の結果にして、一般的因果關係の下に免れざる原則也とするか、吾人不幸にして博士に於ても將た博士と同論者に於ても未だ論斷の理路を明瞭にする能はざるを遺憾とせざるを得ず、元來戰爭の結果なるものは一般の理論のみを以て決し難きものありて戰爭終始の財界事情に見て推斷を下すの外なき也、要は戰爭の爲に生産物過度の膨脹原因にて貨物供給過剩を招來したるや、或は戰爭消費の原因消滅すれば交戰國は直に貨物の供給過多に陷り需給關係の均衡を失すべき事情ありや否やを知つて始めて斷案を下すにある耳。





一部の悲觀論者は歐洲の戰費を計上し一昨年（八月より十二月迄）百億萬圓、昨年三百五十億萬圓、更に本年中繼續するものと假定して、無量六百五十億萬圓也と算出し、軍需品は勿論諸物價の暴騰底止する所なき狀勢なるは此大消費力の結果なれば、戰爭終結と同時に原因消滅して全産業界は忽ち生産過剩を來し隨て財界の恐慌は免れざる也と、思に此種の論者は明に戰時中生産力に過度の膨脹ありとの錯誤に陷りたる也、勿論々者の云ふ如く交戰國に於ける軍費の巨額に上ることは眞に想像以上たらん、少も一千億萬圓は本年内に消費せられ、而も其大部分は兵器彈藥被服等の軍需品に消費し、是等の生産及び供給を完ふする爲め新に各方面の設備を增加したるや明白なる事實也と雖も、論者の杞憂する如く直に之を以て一般生産力に過度の膨脹を來したりと見るは大なる謬見にして、推斷の錯誤に陷りたるも又之に因せり、愼重精緻の調査報告に依れば『生産設備擴張と認むるものは銃砲彈藥等の純戰時品の一小部分に止り、大部分を占むる其他の軍需品製造は殆ど平常の場合と大差なく、假に多少の差異ありとするも、其多くは一般の製造工場を移して一時的軍需品製造に從事せしむるに過ぎず云々』と亦某經濟學者は獨逸の産業狀態を論じ『獨逸の産業八割は或は部分的に、或は全部的に改造して戰時的のものとし、今や全然軍事關係以外に殘存する工場は同國總工場の三分の一に過ぎず』と以て什麽に歐洲交戰國が普通工場をして戰時工場に化したるかを窺知して餘りあるに非らずや、依是觀之戰後の生産過剩を招くべき設備の擴張なきを知るに足るのみならず、更に生産力膨脹不能なるべき明確なる

事實の存するものあり、何ぞや曰く勞働者の缺乏即是れ也、思に交戰國が開戰以來戰場に送りたる兵數は二千萬人に達せしならん、恐く現に戰場に馳驅する兵數は一千萬人に上すべし、軍事專門家の所說に依れば戰爭終結迄には壯丁の總數を盡して戰場に送るに至らんと、素より常に全壯丁が戰場にのみ現存するにあらざるべきも、活動力ある一千萬人以上の壯丁が、戰場に馳驅するものとすれば、勞動力を主とする產業界の受けつゝある打擊の甚深なる推知するに足るべし、現に之が爲に工場若くは商店にして一時閉鎖の已むを得ざるに至りしもの續出せるに見るも戰後供給過多を患ふべきほど生產物擴張の事實生せざるを立證す可き也。

更に猶ほ進んで論者の生產過剩を憂ふる根據を覆すべき反證を擧げんに、交戰國民の大負擔の財源是れ也、一千億萬圓戰費の財源は何れに求むべきやを考ふるに先づ第一に指を屈すべきは國民新蓄積の數量如何にあり、吾人の知る所にては平時交戰國の新蓄積年額は多くも百三十億萬圓に過ぎずして其全額を提供するも殆ど戰費の半額を充たすに足らず、故に彼等は極度の節約を其生活費に加へて足らず遂には有らゆる有價證券の如きを外國に賣却し、更に外債に依て僅に戰費を償へ居るの狀態にあり何の遑あつてか、戰時以外の生產擴張の資本を投入する餘力を有せん哉。

嗚呼陳敗せる經濟理論を經とし、變轉推移常なき經濟歷史を緯とし、立論の根據とする錯誤より生ずる戰後財界の恐慌說は、單に一部學者等の閑事業と看過するは可ならんも、今や人心恟々として左



視右盼黃朱に迷ふ秋に方り、少くも恐慌論に耳を藉するもの生ずるに至らんか、遂に百年の大策を挫折するの端を啓かんことを恐れ敢て悲觀論を駁する所以也、若し夫れ戰後の經濟的經綸に至つては、吾人又大に抱負なきに非らず漸を以て論述する所ある可し。

（新、五、九、八）

# ◉戰後の勞働問題



近頃英國勞働者及言論界に於ける傾向がキルド、ソシアリズムを主張するは注目すべき價値あり、猶更に注目すべきはキルド、ソシアリズムを主張する論者に二樣の徑路を有すること是れ也、バーナードショーの如きは、自ら常に唱導する、漸進共產主義の實行に資せんが爲に、特にキルド、ソシアリズムの綱要を藉るの必要ありとし、言論界の權威倫敦タイムス紙も畧ぼ之と同論調を採るに至れり曰く、今や教育其他の問題は、其凡てに於て產業改革に關する問題の一部也、所詮は根本の改革は廿世紀の理想に向つて進步せざるべからず、廿世紀の理想とは漸進共產主義にありて、其理想實行にはキルド、ソシリアズムを要すと、其二の徑路を辿る所謂純キルド、ソシアリズムとも云ふべきは、多數の勞働者夫れ自身の主張也、即ち勞働者は絕叫して曰く、英國汽船會社が最近四割五分の利益配當を爲せる如きは、是れ既に尋常の營業効果に非らずして、一種の盜奪行爲也、彼等は元來黃金の卵を奪ひ去らるゝも之を產出すべき母鳥を有せり、國家が必要に應じて其黃金の卵を徵發するも、彼等に於て豈苦痛とせんや、ウエルスの炭價暴騰して收益莫大なるに、勞銀を引上るや十が一にも足らず、勞働者は徒に唯だ政府の後援ある資本家に威嚇せられ、鞭笞を受けて、只管彼等の爲に暴利の器具に



供せらるゝに過ぎず、吾徒は開戰以來多少ポケットの重きを加へたるは事實也、然れども吾等の獲る所、到底資本家の獲る所と雲泥千里の差も啻ならず、少くも兩者の比率を均衡せしむるに至らずんば假令多少の賃銀引上げを爲すも滿足すべきに非らず、結局具體的に云へば吾等慾望の滿足は買ひ難く啻に戰時と云はず、戰後更に於以上の要求を大なしむるものあり云々と。

英國勞働者は勿論其全部を擧げて、キルトソシアリズムに非らず、將たバーナートショーや、倫敦タイムスの主唱必ずしも同國の輿論と云ふ能はざるも、著しく英國及歐米各國の戰時乃至戰後の產業問題が勞働者に傾注せらるゝは掩ふ可らざる事實たり、少くも歐米各國が產業問題は獨り資本の準備運轉の如何に止まらずして、更らに勞働者對資本家の問題たり、資本と勞働との調和問題たらずんばあらず、現に英國に於ては最近バーミンガムに勞働組合會議を開き、資本家對勞働者間に頗る圓滑なる妥協的協議を遂げ、同盟罷業乃至工場閉鎖を未然に防止すべく、兩者各々互讓的意志を表示して、戰後各國の產業競爭に就ては、特に祖國の爲に盡瘁すべきを盟約せりと傳へられ、亦佛國に於ても國際勞働組合會議開催の計畫ありとするに見るも、什麼各國が戰後の產業問題特に勞働問題に腐心せる乎の一斑を窺知し得べきに非らず哉。

從來我國に於ては別に必要なき問題として閉却せられたるも、近時勞働者の意志漸く繁張するの傾きあり、特に刻々來る生活の壓迫は彼等社會を興奮して已まざらんとするものあり、天の雨降らざるに

其戸を網經するは、智者の爲すべきことたり、豈經世濟民を以て卓絶せる我國の識者、先覺者たる者之を見逃して可ならんや、猛省一番區々たる政爭に狂態を演じ、國家百年の大計を謬る勿らんことを望んで已まず。

（新、五、一〇、十五）





## ◉再び戰後の勞働問題を論ず

近頃我國の學者及實際家に於て種々の方面より戰後の社會政策に就て研究せらるゝに至りたるは甚だ好し、而も社會政策上最も注意の甚深を要する者は勞働問題にあることは余輩の頻りに唱說せし所たりし也、蓋し我國の趨勢より見て漸く歐米の夫れの如く勞働階級より忌むべき問題生ずべき傾向歴然たるものあらんとすれば也。

歐米各國に於ける社會政策の現狀を視るに二條の經路を爲して進行しつゝあり、一條は獨逸系とも云ふべき『社會階級をして消極的に其反感を緩和せんとする政策』にして、余輩は假に斯る政策を名づけて感情性政策と云はんとす、思ふに彼等は雇主對被雇人の因習的關係を重んじ之を主從の階級に置き、而も嚴格なる秩序の內に相互的溫味を以て結合せんと試むるにありて、勞働を以て神聖なりと自覺せる歐米の風潮より見て、斯る政策が効果を奏し得べきやは疑問也、其一は濠洲系と稱し得べく『社會の根基は勞働者に依て策成せらる、故に社會國家の中心を理會するものは勞働者也、須く政權を秉つて各階級に臨まざるべからず』と主張せり、故に彼等は先づ社會的立法の利器を以てトレード、ユニオンの勢力を占め上下兩院に勞働議員を送らんと苦心せる也、然れども之が結果たるや決して良好

なりとする能はず、去日社會政策學者に於て帝大教授松岡博士は演說して曰く、トレード、ユニオンの爲め蒙る弊害は、勤勉貯蓄の美風破壞せられ組合以外の勞働者に對する壓迫となり遂に利己的に流れ徒に同盟罷業の惡機關たるに陷らんとする趨向あり云々、と能く彼等弊竇の眞相を洞觀して餘す所なし。

固より以上の二事象を見て直に歐米の社會政策の二弊流と爲すは早計也、獨逸系の感情性政策にも短所あると同時に長所の存する事あるを知らざるべからず、特に我國情に適合せる美點の存在を認むる節ありて能く之を按排調和するときは良好の政策を產出すの一端と爲らん、又トレード、ユニオンと云ふと雖も其長所より論ずれば資本家の橫暴を抑制し、且つ互助相援の美風を馴致すべき良策と爲る莫きに非らず、古今各國社會政策無きに非らず、而も社會政策の根本を道德に置かざるものは成功せず、如何となれば道德の基本は自己を完全にするにあれば也、自己を擴大して而して家族社會に及ぶ、ロイドジョーヂの所謂經濟は利を主眼とし道德は善を目的とす、善と利とは一致せざるべからずと云ふは、能く此間の消息を謂ひ現はしたものと云ふべし、余輩は此意義に於て我戰後勞働問題に對する討究と解釋の一脈路と爲す。

（新、五、十一、三）



# ◉三度戰後の經濟策を論ず

我經濟界の順調なる今日の如きは稀觀の現象たり、政府が此順調に適應せしめんと鐵道債券四千萬圓を發行せるは頗る機處の策たり、宜也我經濟界が未曾有の好況を以て之を迎ふるに至れることを、思ふに現時我國財界に於ける資力豐饒にして而も金融緩慢の實狀が此好投資策を歡迎したるに外ならざる可し。

云ふ迄も無く歐洲の戰亂は全世界の經濟狀態に變調を起さしめたり、一方に某國が悲慘の運命に困頓たるに反し、一方には望外の利益に潤澤しつゝあり、幸に我國は是れありしが爲め受くる利益は之を損失せる或る物を償ふて餘りあり、試に思へ由來我國の經濟狀態は比年輸入超過に苦み、利子支拂に惱み、資本缺乏に病みたるに、開戰以來狀勢頓に一變して昨年末の計數を見るに輸出超過七億圓を算し、更に軍需品中兵器彈藥の特別輸出代金、船賃、保險料と計入するに於ては約十億圓の巨額に上るべし、特に今年に入りては於以上の好況を呈し、政府當局者の言明する所に依れば本年中の輸出超過は五億圓を下らず、之に特別輸出金を合して少くも正貨受取勘定八億に上るべき計算なりと、嗚呼由來國際經濟の苦惱より脫出する能はず、前途寒心すべき我國經濟狀態は急變して洋々春海を望むの

好會を得たるは、眞に禍福の機圖る可らざるを感せざるを得ざるに非らずや。

夫然り十八億圓の經濟的膨脹の計數は眞に未曾有の盛事たるに相違なしと雖も、眼を轉じて世界の大勢に見るに近時經濟的膨脹率の增大したること驚くべきものあり、彼の北米合衆國が僅々數年間に輸出超過百億圓に達し、又英、佛、獨の諸國が各鉅額の軍費を支出して綽々として尙餘裕あるを示すに比せば我國の十八億圓の受取勘定の如きは殆ど言ふに足らず且つ大戰の實驗的經濟問題百出し、特に自給自足の經濟原理を實現すべき生產機關の完備、又は國旗に伴ふ經濟を遺憾なからしむる上に國防の充實を圖るべき急務の眼前に橫はるものありて、我經濟界の一大奮躍を要するものあり、豈十八億の變調的計算に隨喜滿足すべき秋ならんや。

思に從來我國が對外利子支拂額は六千五百萬圓と稱したるに、戰後の經濟順調に乘じて外國債務を減少すること二億二千四百萬圓、外國債券を創設すること三億九千九百萬圓に上り、其他は正貨として三億二千四百萬圓の對外利子を半減して、我經濟狀態を良好に導くべしと雖も、吾人の經濟的慾求は決して斯る消極的經濟策を以て滿足すべきに非らず、戰後的經濟大戰に處して敢て後れざらんとせば更に進んで積極的大策を建て之に向つて邁往の勇氣なかる可らずとする者也。

（新、六、五、四）



## ◎英雄の出盧を望むや切也

英雄崇拜は既に陳腐の思想也、今の時に於て專權的一個の人格を崇拜して、相率ゐて之に憧憬するが如きは固より吾人の忍ぶ能はざる所なりと雖も而も鈍栗の脊比的に平凡の徒が、愚圖々々平凡の事に從ふ齊一平調の我國現狀の生活にも又倦き果てざるを得じ。

吾人を以て自ら事を好むの徒と誤解するを止めよ、吾人と雖も民衆主義は無角にして平滑、無韻にして淡調たるべきを知らざるに非らざるも而も平凡の衆愚を結集し、其勢力？を掴んで之と共鳴して以て新生命を皷吹する程の人物なきを憾とする耳。

吾徒の日本の自稱經世家なるものが、若干の抱負と經綸あるやを甚だ疑ふ、例せば戰後經營と標榜する各種調査會の如きは、果して幾人か帝國の使命を提げ、赫々たる功績を擧げ得べしとするや、側聞する所に依れば、高等官會議上に出ですとは情けなき限りならずや。

敎育、政治、文學、藝術界に於ける日本の現狀に見ば、思半に過ぎるものあらん、平凡……無氣力平調……羸矜……隋弱……有らゆる俗惡と惡德の結晶たる觀あるは日本現下の事像として掩ふ可らず今や千載維れ一時の絕好題目を有する我上下の狀態此の如しとは何事ぞや、獨逸の現時の橫暴、非人

道的なる行動は吾徒の敢て組せざる所なるは勿論なるべきも、而も世界最大强國たるべき一大國是と一大理想を持し、汎獨逸主義を皷吹して已まざる、其勇氣と元氣の旺盛にてありしかば、道が鮮典倨傲を以て名ある獨帝が、擧國軍備擴張の聲昂まりしを聞しに及んで、聊か逡巡の氣味あるを見たる國民は『魯鈍なる謹愼者』と痛罵したる、愛國的熱烈燃ゆるが如き叫びには、吾徒の私に驚嘆して措かざる所なり。

然り平調なるは覇氣なき也、覇氣なきは勇氣なき也、勇氣なきは自信なき也、自信なきは畢竟爲すなきに歸す、嗚呼我國の識者將た先覺者たる者、敢て帝國の使命を是れ察せず、國民の歸趣を悟らず進むべきに逡巡し、與ふるものを取らずして、拱手して徒に他人の成を待つや、時會は逸せん、機處は失せんのみ、豈千載の痛恨事たらずとせん哉。

今や勃興すべき國家の氣運は蔚然として我國の上下に磅礴たり、此千載一時の機會と絶好の題目を有する帝國の現下を透察し、斯の民衆の思想感情に接觸し、以て其鬱勃たる氣運を捉へ、之を利導し運用し得べき一代の俊傑此秋に出でざるもの乎嗟呼。吾徒は此意義に於て英雄の出慮を望むや切也。



## ◎米國の軍備擴張眞意義

近來米國が露骨に汎米主義を皷吹し、頻りに軍備擴張を企畫し、將た既に着手しつゝある其眞意那邊に存するやは、各國の等しく興味ある且つ難解の問題として注目する所たり、解答者の誰人も少なくも其十の八は米國軍備の標目は日本也とし、黃禍恐日に主因するものと爲す者の如し、又少數ながら灰殼風に解釋する者には、軍器製作に依り奇利を占めんと圖る、工業家の陰謀的煽動に出づるものとするあり、然れども吾人の見を以てすれば、何れも是れ一部の眞理を語る聲なるべきも、未だ以て標的を去るや遠く命中の矢には非じと思ふ。

歐洲大戰に依り米國が軍需品引受高は既に十億弗に上りたる形跡あり而も之が爲に米國が少なからざる利益を獲取しつゝある事實は、ベスレヘム鋼鐵會社が、戰前一株四十弗內外の相場なりしに、今や一躍して六百弗即ち十倍半に暴騰せるに見るも畧ぼ其一班を推知するに足らん、米國資本家の遽に海外企業熱昂騰し、苟も餘利あるを見は、其溢るゝ如き資金を投じて更に於以上の獲益漁利に腐心するは洵に所以なしとせざる也、彼の五千萬弗の大資本を抱擁するインターナショナル、コーポレーションの創建が宇宙に最も優勝なる地に其剛建にして潤澤なる資本を放下すべき遠大なる志望を有する

に想到せば、米國の國旗は寧ろ是より資本家に從ふに至らんと觀測するを當れりとせん、吾人は斯る見地よりして、近時米國の軍備擴張熱の原因は資本家の海外投資の企業保護にありとせんとす。

偏俠の政治家等が近來の米國を評して汎米主義に傾きたりとし、モンロー主義の破壞なりとして、該國民の愛國心理變化を說明するものありと雖も甚だ當らず、元來米國には鄕士的愛國心なるものゝ存在を認むべき理由なし、奈何となれば同國は英、伊、波、瑞、獨、佛人等の殖民地たるに過ぎずして、此等各國民の共同營利の市場たれば也、蓋し移住民の人種的差別を捨て、聊かなりとも新に米國民としての趣味に一致し、同化し統一的新愛國心生せりとせば、幷は別問題たるべきも、定理より觀れば米國々情に眞の愛國心なしと斷ずるは過言に非らず、隨て軍備擴張の眞意義も他國の夫れを以て測定せんと欲せば千里の差ある錯誤を夾さん、徒に一部の野心家、壞疑者、管見者等の說に動かされ我國に於て對米標的の軍備に焦心するは莫迦の骨頂たるを知らざる可からず。

（新、五、八、十四）



## ◉政戰後の感

陣風一過、多くは十旬少くも五旬に涉り、縣下郡市を通じ十四名の各候補者諸氏が鏑を削り、鉾を磨しての逐鹿戰に馳驅して得たる戰績は去る廿二日を以て決定せり、小鹽、小泉、戸井、赤尾、松元、中川の六氏をして郡部より、若尾、島田の兩氏を市部より選出して其月桂冠を諸氏の頭上に戴かせしめたるを以て戰局は一段落を告げたる也。

事實を告白すれば、吾人は寺內內閣以上に既成政黨乃至政派なるものに慊焉として於以上に超然主義を確守するよりして、總選擧の意義を憲政の常觀より推義して民意を問ふものとせば、這回の選擧には吾人は風馬牛關せず焉にして何等の興趣も感想も起り得ざりし也、而も吾人が寺內內閣が如何なる意義と主張を以て議會を解散したりや、又各候補者が之に對して如何なる政治的抱負を以て起ちたるやを吟味するに熱頭するを餘りに莫迦々々しく覺へし一人なりしを以て、其誰人の當否も別に痛痒を感せざるは勿論、憲政、政友、國民、中立其何れの所屬候補者の當落に依りて、所屬黨派の隆否、興廢に關すべきやは更に越人が吳人の肥瘠を思はざるよりも冷眼に看過したり。

唯夫れ冷靜と不關知の這般選擧戰の結果に就て吾人の申分あるべき理由なし、候補者諸氏が當選の

得意と落選の失意が正當順適の道理と運命に因結したるやも問ふの要なしと雖も、多大の勞苦と戰費を犧牲にしてまで、熱走狂奔して輸贏を決したる勝戰者諸氏を觀すると同時に敗戰者諸氏を弔するに何れも甲乙なき同情の意を表示せざるを得ず。

若夫れ吾人をして角力見物程の興味を强て此戰果の上に與ふることを許さば、其勝負觀を遠慮なく開披するに躊躇せざるべきも、個々の實力技倆等を對比して仔細に涉る批判を下すを避くべき境地と將た好まざる理由あるを以て、只此處には總評的に其大觀を陳ぶることゝせんに、市部に於ける若尾氏が雪辱戰として奮鬪努力の功果も左ることなれど、元來市の地盤關係と勢力範圍の常態より想見するに憲政派が二名の候補者を起して之を壟斷せんとすることが既に已に專横的に失當の作戰にして、ヤハリ是は趨勢を透見し能はざる憲政派不明の致したる失敗たり、郡部に於ても終始憲政派は敵黨に其籌略を輸したる形跡あり、始め小壇氏が無限の物資と勢威を以て起つや、同氏は既に眼中敵なかりし也、其餘勢の逝る所山宮、川井の兩氏を粉齏して猶ほ綽々餘裕ある票數を割いて同志に頒つ位の事は素人の吾人等の眼にも早くも映じたる事象なりし也、故に憲政派の此對抗策戰としては、兩氏の內一名を退讓せしめ勢力を合一して之に當り尙ほ危險なりとせば小泉、戸井兩氏等の如き鞏固なる地盤を占據し居る安全線に立つ側の餘力を割讓するの外良策のあらざりしに、惰性的自慢に囚はれたる憲政派が飽迄敵を輕視して兩氏をして枕を並べて討死せしめたることが全戰に影響せる大敗の主因たり



聞說く流石縣下憲政派の智囊を以て目せらるゝ戸井氏は早くも此形勢を看取して献策したるも相容るゝ所とならざりしと惜むべきの極みならずとせん哉。

要するに縣下這般の爭覇戰は終始伯仲の勢力を持し、其結果を見るも郡部有効投票數一萬八千三百六十六票の內憲政會は八千三百四票を得、政友派は准政友と合して九千七百五十一票を得て其差僅々一千四百四十七票に過ぎずして、次點者の最低得票たる川井氏の一千七百二十一票だに及ばざりしに徵するも、實勢力の懸隔が然く小壇、赤尾、松元、中川の四氏に對する小泉、戸井二氏を擧げたる倍數の勝敗果を見しは寧ろ不自然の奇現象と斷せざる可からず、今にして政友派が其勝因を實勢の發顯なりと誇稱し、憲政派が其敗果を政府の干涉に歸由すと愚痴るは、何れも妄想に非らずんば僻言たり、吾人が高處に立つて嚴正不偏の觀察を以てすれば勝敗の歸結は實勢の發顯にも非らざれば干涉の壓迫にも非らずして、双者作戰の巧否如何を以て眞因とすべき也。

假に政友會をして矜るべき理由ありとするも、又憲政會をして愚痴るに足る事情ありとするも、勝て兜の緒を緊ひるを智者の行とすべく、敗者を惑むを仁者の爲とすべく、與に將來に大を策するの途とすべし、敗るゝも愚痴らず笑て他を言ふ的の態度こそ奥床しく世の同情を惹く所以たるを知らば、政友會たると憲政會たるとを問はず唯夫れ冷頭一番今後の實力扶殖に向つて省鑑する所あつて可也。

（新、六、五、四）

# ◉アイアンローを想ふ

昔時碩學リカートは當時の資本家と勞働者の權衡を得ず、資本家の横暴と勞働者の無自覺より、常に勞銀をして勞働者生活の最低限度に止められたる、冷酷鐵の如き狀態を慨し勞銀鐵則を唱說して時代の覺醒を試みたり、其後英のミル獨のコルクス等の偉傑輩出しリカートの正系を紹述して遂に資本家の横暴を制し勞働者の卑屈を自覺せしめ、以て歐米經濟狀態と生活機能に一新紀元を開くに至れり顧るに現下の日本は猶ほ百年前リカートの憤慨せるアイアンローに依つて支配せられつゝあるは痛嘆に堪へず、特に勞働者中にても彼の官公署に雇はるゝ所謂常傭と稱する勞働者は、普通以上の勤勉勞力、責任を負荷せられながら之に報ひらるゝ相當の勞銀を給せられず、歲と共に益々生計の苦痛を嵩むも、尙且つ一人のミル、マルクスを見ざるは何んぞや、斯る形勢の持續は終に恐るべき結果を招來するを豫期せざる可からず、乃ち資本家及企業家に對する反抗、生產率の減少、粗製濫造等有らゆる經濟的並に社會的損失と弊毒とを釀出せざれば已まざらんとす、少く不急の例言ながら之を現下鐵道方面の事態に看よ、渠れ下級現業員が薄給自足する能はず、身心疲憊の餘り遂に注意力消耗し若くは自暴的惰勤となり、或は轉轍の機を失し或は信號を過り爲に不測の禍害を頻發し一箇年平均數千人の





死傷者を發せりと聞く、豈恐るべき事實ならずや、更に事故以外運輸機關に缺乏を來し隨て輸送澁滯の因を爲し甚しきは重要線路の或る場所は從業者に不足を生じ軌條に赤錆を生せしめ、徒に大資本を卸しながら開通する能はざる狀態にあるに非らずや、蓋し此狀を見て之を問責將た矯革せんとする有資格の資本家企業者現下我國に若干ありや。

（新、六、七、五）

## ◉米國の對支問題

米國政府が我國の支那に對する特種關係寧ろ優越權を無視して、私に單獨を以て內政干涉の嫌ある忠告を加へたる一事は慥に米國の失態たり、後ち忝然我國を始め列强諸國に同意を求めたるも直に拒諾の運命を招きたるは當然の歸趣也、吾人は米國が近來其モンロー主義の誇を放棄して帝國主義に傾きつゝありと云ふ評語を全然肯定するものに非らざるも、軍備の擴張、國防の完備、外交政策の各方面に閃く同國政府の國策が著く變調したるは掩ふ可らざる事象也、由來正義人道を以て立國の大本として世界景仰の義人國と尊稱せられたる該國が一變して驕矜橫暴國の評語を浴せられるは惜むべきかな、遺莫！、我國には三千年來鍛へ上げたる忠魂義魄の凛乎として國民の上下に磅礴するものあり、苟も國際道義を無視し善隣情誼を輕侮して權利々益を侵害損減することあらんか猛然起つて之を膺懲粉齏せざれば已まざるべし、聞說、米國は早くも其非を覺り翻然として提議撤回の擧に出でたりと、左もあらん、ワシントン、モンロー地下に莞爾として瞑せん、庶幾は我神州と提携して永く東洋否世界平和の主護國たる名譽を荷へ。

（新、六、七、五）



## ◎大隈侯の晩節疑はし

吾人の豫想に違はずして、大隈侯は眞の形式を以て加藤子を推薦し骸骨を乞ひ、元老又豫定の通り寺伯を奏薦し、大命降下、內閣組織と急轉直下的に政變は來れり、隈侯が旣に政治に倦き桂冠の志ありしは隱れなかりし事實にして、唯時機の問題たりしことは曾て吾人の比評壇に細論せし所なりし也蓋し吾人は侯に翹望せる一事として侯の所謂多年操守せる立憲的本領を失せざる進退に出づべきを以てせり、此れ吾人が侯に一片の同情を寄與する微忱にして、四十有餘年の苦衷を諒とし、其晩節を完からしめんが爲に外ならず、圖らざりき、侯が進退去就の曖昧にして機處を得ざりしこと彼が如く、遂に多年の政敵官僚の徒に政權を委するの愚擧に出でたり、何が故に侯たるもの誠に老軀大任に勝へず、政治に倦みたりとせば、第三十七議會に就て華々しき決戰を彼閥族の徒と試み、堂々其所信の遂否に依り進退せざりし乎、妄に貴族院一派の歡心を迎へ妥協の醜態まで演じて、其椅子に執着せるは何故ぞや、以爲進退を決する迄爭ふ機會に非らずと、然らば現下の狀勢を以て理想的時期の到來と爲したるが、吾人の見を以てすれば今日程侯が進退を決するに最惡の時期はなし、試に思へ閥族の徒が寺伯を擁して、陰謀將た陽策に奔走し、侯が骸骨を乞ふを待ち焦れつゝあるの秋ならずや、亦侯が因

つて以て立憲的政治を遂げん爲めに至大の便宜と重要の關係を有すべき、合同政黨の樹立せる今日、之を振り棄て〻顧みざる恰も道路の人の如きは何ぞや。

侯の進退に機處を得ざるが爲め、合同後の前途に一つの暗雲を低迷せしめたるは事實にして、侯は斯くして政友を賣り政敵に乘ずるの機會を與へしめたりとの誹を受くるも如何にして辯解すべきや、今や第三十七議會の開期は近きたり、其舞臺に起つて正々の陣を張り、堂々の議を闘はしたる後、徐ろに其進退を決するも遲しとせざるのみならず、侯が政治的生命は永遠不朽たり得べかりし也、嗚呼同主義者にして自己の理想政策繼承者たる加藤子を推薦したるは可し、而も元老の一聲に逢ひ屁子垂る〻不甲斐なさ、當年の大言壯語の跡今や何處にか覓め得べき、其の茲に到達すべき結果を視るの明なしとせば老愚殆ど談するに足らざる也、惜哉侯が晩節は零なり空く豎子をして名を成さしめたり。

（新、五、一〇、一五）



## ◎三角頭元帥の引張凧

海外近事中日露協約の締結の事情經過を記載せしが、之に付き政界近頃の珍談あり、日露協約締結の祝賀の禮を兼ね、將來の親善を彌增す爲め我皇室よりは有栖川宮殿下を御派遣あらせらる〻御內議あり、之が副使として寺內伯を選任するやの噂あるや、茲に端なく政界の三角頭元帥大持ての幕を開くに至れり、現內閣に取り目の上の瘤とも云ふべきは寺內伯にして、實は元老以上に厄介視すると云ふは、所謂貴族院の官僚一派の輩が動もすれば自己の野心を遂げんが爲め伯を舁ぎ上げんとするあり て、一方には反政府黨が此氣勢を利用し現閣破壞の具に供せんとするあり、何れにせよ伯こそは現閣の舅姑的厄介物たるより、常に腫物に觸るの待遇を爲し來りたるが、今回の日露協約を機とし伯に花を持たせ賣恩的政略の桎梏を伯に箝めんと、扨てこそ遣露副使の大命を推薦したる譯合なるを覺知したる、官僚及反政府黨の面々は一大事と躍起となり有らゆる手段を盡し之が沮止に奔走し伯をして內閣の捕虜たるを脫せしめ、アハよくは內閣乘取の頭領に仰がんとの勃々たる野心と歡心の競り合よりトンダ有野に入りしは獨り三角頭新元帥とは莫迦々々し。

（新、五、七、十八）

# ◎南進中止の無策

我進取敢爲の事業家が將に書策し經營しつゝある、新占領南洋諸島の諸事業漸く其緒に着かんとするに方り、突如として我海軍省は無謀にも、來る十一月以後南洋航海を中止する旨を公布せり、嗚呼何たる無策ぞや。

夫れ南洋の地たる各種の生産物に富み殊に我國とは交通上至便の地にありて古來貿易否寧ろ殖民の政策に着眼する識者少なからざりしも、種々障碍の生ずる所と爲つて果す能はざりしに、偶々歐洲大戰の影響として料らずも、其一部諸島を我手中に占領せるは眞に天與の賜もの偶然の僥倖にして實に逸す可らざる良會に接したるものと云ふ可し。

茲に於て鬱勃たる多年の宿望を此良機に果さんと試むるは當然にして、官民擧つて之を贊助し聲援すべき筈なるに、海軍省は一ヶ年僅々五六十萬圓の南洋貿易會社との航路補助契約の繼續を拒絶し遂に交通の斷絶より起る南進中止の發令となりたるは惜むべきに非らざる哉。

吾人の調査する所にては目下行はれある南洋航路は、横須賀よりトラック島へ到る直航幹線には四千百五十噸の多聞丸を充て、又ボナペ、クサイ、ヤルートには千四百噸の以智丸を以てし、又ヤップ





パラオ、アンガウルには二千百噸の南海丸を以てせり。

此三線の中央幹線航路の任に當る多聞丸は四十日に一回宛往復して、海軍防備隊の用品は素より、各事業家の貨物を運搬すべき重任を帶びて南洋開發に關する死命を制す唯一の大動脈たり、南海丸は進んでセレベス航路に方り前途好望なる外南洋貿易に從事し、獨逸の失ひし利權獲得に便する所ありて、占領諸島以外南進の前驅を爲したる爲め、近時此方面の開發に着眼する者漸く多きを加へ、現に大谷光瑞伯が或る大事業を計畫しつゝありと傳へらるゝも此地也。

是等の航路は大正四年より南洋貿易會社對海軍省に於ける契約を以て實行せられつゝあり、而して毎年改更の契約條件に隨ひ、本年十一月以後の協定を爲すに方り會社は船賃、傭船料、燃料等の物價暴騰の結果補給金の增加を希望したるに海軍省は豫算なき理由の下に之を拒絶し遂に協約不調となり遂に南洋航路全部の廢絶を來すの已むを得ざるに至れり。

當局が千載一遇の好機を逸するを省みず僅かに一ヶ年五六十萬圓の支出を拒み新に勃興せんとする南進の機運を阻止するの無策にして與に國家百年の大計を談するに足らざるのみに止まらず、此迄資金を投じ勞動を厭はず、健氣にも此國家的事業に從事したる幾多我事業家の蒙る直接間接の損害甚大なるに一片の同情を寄與せざるを得ず。

吾人は切に當局の反省を促すと同時に一般我國民の覺醒を請ひ、速に南洋事業阻止の悲境を救ひ、

我新物與の機運を促進して以て國家百年の長計を策するの途を講ずべきを勸奬して已まざる也、當局が漫然豫算なしとして拒絶の理由とするも、斯計りの金額を捻出する能はざるは無策に非らずんば無誠意也、我國の現狀は金なきに苦まずして寧ろ其使途如何に苦むに非らずや。

物價暴騰其極に達したるの主因も通貨の膨脹に在り、通貨の膨脹は正價增劇に基因す、現下我國の正貨の充實は未曾有の現象たり之か處分の適否は國家の財政經濟に大なる影響を招かん、吾人は數次當局及國民に向つて正貨處分の案を具して警告する所ありたるは夙に讀者の諒とせしものあらん、此秋此際僅々百萬に足らざる金額を出し吝むに豫算不足に藉口するも誰が之を首肯するものぞ、況や南進の大策を阻止し、因て以て南進の長計を頓挫せしめ、延て有爲の事業家に阻害を蒙らしむるに於て哉。

世人の時局を論ずるもの口を開けば則ち曰く『戰後の經營と』勿論戰後の經營輕視すべきに非ずと雖も、機運の把持する戰前の經營更により以上に重大視することも忘る可からず、獨逸が四面敵を受けながら在らゆる窮乏と困苦を忍び莫大なる造船計畫を立て着々之を實行しつゝあるは何故ぞや、是れ云ふ迄も無く戰局終るの後、世界の貿易戰に馳驅すべき準備也、別言すれば戰後の經營にして戰前の實行也、米國も又非常甚大の戰前實行を各方面に展開し、英、佛亦劍花硝雲の間着々其施設を怠らざるは、叨に戰後の經營を說く我國の盲目經綸家の企及すべからざる所たり、吾人は戰前の經營策の一



として南洋開發事業の進行を望で已まず。

（新、六、九、八）

# ◎横濱生絲定期市場を擴大せよ

客月下旬より低落して千三百圓臺を告げたる生絲の市價は依然として氣勢揚らざるものゝ如し、思ふに米國の生絲輸入禁止令發布の說其因を爲すにあらん、然れども現下米國の富力は全世界を壓し、隨て生活程度の昂上は驚くに堪ゆるものあり、絹布の同國人に於ける最早贅澤品を離れて生活必需の品彙中に列するに到れり、而も其原料を自國に採るべき政策は全然失敗の歷史を有せるに非らず哉、更に從來原料生產地たる伊太利、佛蘭西よりの供給は戰爭の爲め生產減少せるのみならず、船腹不足運賃、保險料昂騰の爲め供給全く不可能の狀態を呈し、獨り日本に向つて必須の需要を仰ぐに方り、何を苦んでか其供給壅塞の愚策を講せん哉。

最近米國より吾人の接受せる情報中輸入禁止の事なきを語るのみならず、益々需要增劇の兆ありと附言せり、假に百步を讓り輸入禁止の實行を見るも深く憂ふ可きに非らずして、必然的に特許の伴ふは見易き條理なれば也。

斯く根據なき風說に因し、將た假に其實行あるとするも何等憂ふるに足らざる事象に對し、我生產物の最高位を占むる生絲の市價を低落せしむるとは何事ぞや、吾人の經驗する所に依れば我過去に於





ける絲況の昂騰せるは米西戰爭及び日露戰役の後なりき、別言すれば需要地及び供給地の戰勝せし翌年也、歷史は繰返すものとすれば、今後戰爭の順調に連れ、大に市況の好調を呈するや明白なる事理に屬す。

物價の高低を支配する主因は需給關係に出發せざる可からざるは今更ら說明する迄も無し、唯夫れ米國禁輸の無限なる風說に動搖する我商界の無識にして過敏なる驚くの外なしと雖も、單に無識過敏の罪とのみ斷するは未だ以て眞相を穿ちたるものに非らず、吾人は生絲界の不合理の動搖を招くの原因を以て、橫濱定期市場の規模狹小に基因するを敎えんとす。

橫濱定期市場の規模甚だ狹少なる丈け夫れだけ生絲の世界的商品たる取引機關たるに適せずして、常に小量の取引より生する動搖を免れざる也、彼等は百斤建を標準とするも事實は十斤建を以て爭ふに過ぎず、而も利鞘の廣からん事を欲して取引所本來の責務たる物價調節の大義を忘るゝに至る、亦過れるの甚しと云はざるを得ず、故に思はく相場により一夜成金も生ずるなり、或は風聲鶴唳だに喫驚狼狽の陋態も演ずるなり、豈世界的商品たる生絲の價格が斯く一二徒輩の一顰一笑の間に左右せらる理あらん哉、是れ皆取引市場規模の狹小にして絕大の權威なきに基因す。

吾人は昨今に起りし我生絲市場の不況が不自然にして而も不條理の原因なるに見て、將た市場の不安定にして常に一二奸商等の術中に動搖せらる狀況を想ひ我國益を損じ民利を害する甚大なるを慨す

ると同時に、『是が救濟の途を圖るに生絲取引の中心機關たる、我横濱市場の規模擴大を實現するを以て最も劃切の方策たるを信ぜずんば非らず。

（新六、一〇、六）





# ◉地理は歴史の主なる動力也

【一】

世界的大戰終局の曉各列强が其屈したる羽翼を伸張し、創痍を醫す可き方面と方法一樣ならざる可し、而も極東政策を主題として起る太平洋の波瀾が甚麽汪洋として我前途に狶黷するかに想到すると同時に、位置を太平洋の中心に占むる我國は、其歴史を將來に飾る可き矜りと期待を有するを欣懐事とせざるを得ず、大那翁曰く『地理は歴史の主なる動力也』と眞に至言たるを失はず。

夫れ太平洋問題は遠くコロンブスが千四百九十二年亞米利加發見に開始せらる、然もコロンブスの四回の渡航も新大陸の一部たるを知らずして支那印度の一地域たりとの謬見を脱するに至らざりき、其後千五百十三年に至りイスパニヤ人バルホアはコロンビア北岸より山を越ゑ始めて太平洋を發見し次でポルトガル人マジエランはイスパニヤ王の命を奉じ、マジエラン海峽を經て太平洋に出でフヒリツピン群島に達し印度洋よりアフリカの南端を迂廻しイスパニヤに歸航し世界一週の始祖たる名譽の月桂冠を戴き、更に千五百七十八年英人ドレークの第二回世界一週ありたるも、當時彼等の太平洋觀は極めて淺膚たるを免れざりし也、然るに千六百二十年英人エドマント、ガンターの測量對數表應用

の發見となり、千七百年ハーリーの世界に於ける磁針方向の差異を明確にせし海圖の製作となり、千七百三十年ジョン、ハリソンのクロノメートル發明に依る經度測定等より航海術の大進歩を來し、イスパニヤ人メンターネ、デ、タイロス及オランダ人タスマンの探險にて南太平洋を明にし、更に降つて千七百六十八年より七十九年に亘る英人ゼームスタツクの三回の大遠征に依りサンドウイツチ（ハワイ）諸島の發見となれり、又露人スパンゲンブルクは千七百三十六年南千島、蝦夷、及日本本土の海岸を探險し、千七百七十七年露人ポンプーゼは日本北海を測量し、千七百八十二年佛人ラ、ペルーズは米國西海岸、支那、日本、カムチヤツカを經て、宗谷海峽に進入し日本海を探究せり、斯くて十八世紀の初葉に及んでは最早太平洋は探險期を去つて列强の政策圈内に入り、嘯て濃宏なる空氣は其中心に向つて驀進せずんば已まざる形勢とはなりぬ、彼の米國が千八百十九年の條約に依りイスパニヤをして北緯四十二度以北の太平洋沿岸地に對する權利を放棄せしめ、千八百二十四年には露國をして北緯五十四度四十分を限り南に膨脹せざることを誓はしめ、千八百四十八年のダアダルペイダルゴの條約に依り墨國をしてテキサス以西加洲に至る間の領土を割讓せしめ、以て太平洋東岸中部全般を占取するに至れり、又露國はカムチヤツカ、アレウト列島、アラスカを抱擁し、更に樺太、千島に魔手を展ばし、千八百四十七年にはムラビヨフを東部シベリヤ總督に任じ、其怪腕を振はしめて、英國の勢力漸く太平洋中部に發展するに對抗して、黑龍江及沿岸を併呑するに至れり、英國はカナダ方面



より太平洋に進出し、オーストラリヤ、ニュージランド群島を占領し、更に千八百四十一年には支那より香港を奪取し有力なる策源地と爲すに至れり。

茲に於て勃然として起る問題は列强の日本に對する開港の要求也、是れ彼等が交通の中心たる要衝たる我地理の當然提供すべき產物たれば也、果然露國はラクスマン、レザノフ、フヴオストフ等數々來つて之を迫り、米國又ビツトル提督を派遣して幕府に交涉する所ありたり、特に米國は露の黑龍江沿岸經營、英の香港占領に依り、太平洋發展に於て其背後に落ちたるを悔ひ、斷然日本の開港を實現せんと決意し、遂に千八百五十三年ペルリ提督をして强要せしめ、翌年和親條約を結び、更にハリスを派遣し通商條約を締結するに至れり、當時我國には鎖國開港の兩議より內紛を起したるも、是れ一時の現象にして到底時勢と地理の產む理數に逆行すべきに非らず、急轉直瀉的に維新の大革命は釀成せられたり

【二】

勿論革命は血也、攘夷鎖港の頑迷論は幕府の開港主義を打つの手を代へて、遠勤又は尊王なる好題目を捉へ、薩長土肥を盟主として翕合せる討幕軍と爲つて、伏見、上野、奥羽、函館の四大戰に同胞の碧血を濺はされたり、更に外患の大なりしものは下關、鹿兒島の砲擊、露國の對島占領等なりしも吾人の想像するだに戰慄すべき一事は、佛のナポレオン三世が其滿々たる野心を東洋に展ぶべく幕府

を助力し討幕軍に抗すべき献策なりき、幸に德川慶喜の愛國心と英國の抗議の爲に此事成らざりしと雖も、若しナポレオンの野心に乘せらるゝことあらんか、維新の革命成果は甚だ危ふかりし也。

維新後歐洲戰局の變化と、各國の東洋政策の反目嫉視に依り外患を免れ、專ら內政の刷新進步に傾注することを得て改革事業漸く其緖に就き、更に財政の整理軍備の充實着々其步を進め、千八百九十四五年の日淸戰役に於て我實力の侮る可らざるを知ると同時に、支那の弱點の豫想以上に甚だしきを看取し、各國競ふて弱肉の割取を試み、露の旅順、獨の膠洲灣、佛の廣洲灣、英の威海衛の租借乃ち事實上の占領が實現せらるゝに至れり、然も英國は其植民政策の便宜より日本と結び、日本は又英國の資力に倚賴し、千九百四年五年の戰役に露國を破りて同國の太平洋發展に一大痛擊を加へ、遂に其勢力を驅逐して滿洲を租借し、朝鮮を併合するに至つて、我國が地理的歷史の動力は太平洋上一大勢威の一頁を描出するに至れり。

【三】

日露戰役後我國の太平洋に於ける一大勢力を一般の認むる所と爲りたると共に、更に猜忌憎嫉の目を以て睜らるゝ所となれり、即日淸戰役の實力表現當時は猶ほ組し易く且つ利用するに足る可しと爲したるもの、一變して侮り難く且つ惧るべきものと爲すに至れり、而も世界の大戰に由つて我國の太平洋地位を益々確實强固たらしむ可き理由あり、嚮に露國は日本の國力を誤算し極東政策の大失敗を招



きたるに鑑み、爾來日本と握手して其爭覇を避くるの傾向あり、勿論現下同國の狀態に於て手足を外に伸ばすの餘裕なかる可きも、若し幸に强固なる政府の現出することありとするも、露國今後の主力經營は黑海及地中海方面に在りて、太平洋方面の活動薄らくべき事由ありて存す、吾人の見る所に依れば同國が今後に苦む所は財政の窘迫なり、而も其一大財源たる穀物は南露より產出するを以て、之を輸送するに便益なる海運に依るに於て黑海地中海の經營に主力を傾注せざる可らざると同時に英獨の關係頻出し近東政策に忙殺せられ敢て太平洋に餘力を藉さゝる可き也、英國は夫に反しオーストラリアを南太平洋に有し、該諸島の英人は驚くべき速度を以て增加し、且つ支那に於ける商業及投資の關係重大なれば太平洋政策の弛緩すべきに非らずと雖も、英は根本的に獨露と其政策を異にする所あるを以て、益々日本との友情を濃密ならしめざる可らざる事由あり、米國は千八百四十八年のカリホルニヤの金鑛大發見あり、アラスカ及びアレウト列島の購買等、內部的開發政策に忽忙として未だ太平洋西岸に指を染むるの遑なかりしが、十九世紀末に至りて國力內に充實するや俄に海外發展の大策を樹立し、布哇を併合し、比島、グアムを領有し、特に支那に於ける超然投資主義を一變して列强との均等を圖り、更に門戶開放、機會均等を唱導するに至れり、思に米國は太平洋西岸に根據地を有せざるを以て、列强の根據地中心政策を打破し其豐富なる資力を利用せんと試みるものにして、日露戰後日本の勢力東洋に異常に發展するや、米國は其機會均等主義を妨害せらるゝものと猜忌し、日本に

好感を有せず、更に日本移民に對し一種の人種的嫌惡を以て排斥する等、双互の感情大に疎隔を來したるは吾人の甚だ遺憾とする所なりと雖も、我國は地理的に太平洋の覇權を握るべき自然の地位を占むるものなれば、之に抵抗反對するもの〻不利なるべきは睹易き道理なれば、米國と雖も永く其誤想より覺めざる筈なく、近き將來に親善の機會到來すべきを信じて疑はざると同時に、我國策を云爲するもの妄に他國の利害感情を無視することを戒めざる可らず、蓋し固陋にも北守南進を以て我國是と論ずる如き陳腐の議は最早耳を傾く一顧の價値なし、吾人の地理より持得する天與の權利は神聖にして不羈也、吾人は我國の地理より推して其太平洋の何れの方面にも進展するを妨げず、誤解する勿れ發展と侵略の別意義なることを、吾國が天與の使命を全ふする爲め、世界の平和に資するが爲め、正義人道の爲め某地を占領し、將た占領を確實ならしむる手段は所謂發展にして侵略に非らず、而も發展は土地の領得のみに非らず經濟的拓發を圖ることも其一也、即ち支那に於ては最近に石井、ランシング條約に依りて、我國に特殊の利益を認められたるを以て、工、農、鑛業を問はず充分に其手腕を振ふに足れり、又カムチヤツカ、オホーツク方面に於ける特別漁業權は小村、ウヰツチ條約の成功なりしが、最近露國假政府より破棄を要求せる形跡ありて國民の等しく注意すべき經濟的大問題たりと云ふが如し、我國が太平洋中心の地理より生ずる前途多望の動力を權威あらしむるは一に繫つて我國民の奮勵の手にありて存す、豈勉めずして可ならん哉。



## ◉横濱市長の任期滿限近けり

横濱市長安藤謙介氏の四年間任期は餘す所七ヶ月となり近く後繼問題起らんとし、更に明年早々市會議員の總選擧は實施せられんとす、是れ我市民が大に奮起すべき秋ならずとせん哉。由來我横濱市政は黨爭の累を蒙り、其發達と進歩を妨げられし苦き歴史を有せり、遠くは地主派と商人派の軋轢あり、近くは刷新と政友との抗爭するありて、陰に陽に市政に影響し、自治に擊累せしこと甚深なりし也、今や實に病既に膏肓に入れりと雖も、窮すれば通ずるは人事の定現なり、吾人は絶叫して市民に一言を加へんとす。

市政施行以來市長を代ふること六人なりと雖も、何れも半は黨爭の具に供せられ、半は其弊に堪へずして自ら其椅子を放棄し、能く其終りを完ふしたるものある無し、而も現市長安藤氏に至つて其レコードを破り、敢て政友系より推されて同派に偏倚せず、當然敵視せらるべき刷新派に反抗せられずして將た四年の任期を滿了せられんとす、是れ殆ど奇蹟也異數也、吾人がレコード破りと云ふ豈妄言とせん哉。

思に安藤氏は中央政治と地方自治、黨派と市長の畛域、權能、責務等を深く理會せる一人也、彼が

政友派に緣因淺からざるに之に狎近せず、敢て亦憲政派を敵視せず、毅然として黨爭の間に超越し正に自己のベストを市政の上に傾盡して他を顧みざる態度は吾人の頗る多とする所也、彼曰く余が市民を視ること一視同仁也、豈余が市長としての眼中黨人あらん哉と、其意志の强堅理想の高遠なるに非らずんば能く此言あらんや。

聽く、近來政友派は安藤市長の態度に慊焉たるものあり、任期滿了を待つて敬遠する方針なりと、吾人道聽途說として敢て之を信ずるものに非らずと雖も、市に三虎の譬あり、政友派たるもの今にして自省他戒の道を講じ斯る風評の依つて來る原由を絕對に防止する所なくして可ならんや、我市政の振張せず治績の發揚せざりしや久し矣、安藤市長に至つて始めて黨爭の累を脫し、黨人の桎梏を逸し市政の傾向を善良に導き、更に一步を進めば善政良治を具體化すべしと思惟するに際し、之が推擧の責任者たる政友派が由れなく之を忌避するが如きことあらん乎、黨利を先にし公益を後にする市民の賊なりと議せらるゝも何の辭を以て之に報ふ可きや。

吾人は地方自治體に政黨關係を結び着け、甚しきは其機關を黨爭の具に供する弊毒を恐れて已まさるもの也、幸に安藤氏の如き絕好の良市長を迎え、之が弊患掃滅すべき機運を捉へ得たるを歡ぶと同時に、一般の市民に向ひ切に省思反慮を望んで已まざる也。

更に市會議員選擧に付ても大に希望する所なくんばあらず、其個々の人物を選評するには別に論議の餘地あるべし、唯だ茲には候補者は政黨を地盤として立つものを避くべしと告ぐれば足る、是れ黨爭の毒牙を自治機關に侵入せしむる源泉を斷つ、市政刷新の第一關門たればなり。

# ◉財界の前途樂觀す可らず

投機の潰裂と金融の緩和に因り我財界の前途靜平に皈したりと樂觀するは早計也、余輩は兌換劵の膨脹と金禁出の事由去るに非んば未だ猝に財界の前途に安心する能はず、看よ兌換劵の膨脹は本年一月以降膨脹に繼くに膨脹を以てし、十月の反動後銀行の資本金潤澤を招き、隨て日本銀行の預入二三千萬圓の增加を來したるに拘はらず、事實は兌換劵の縮減を見ざるに非らずや、結局此膨脹せる兌換劵は貿易上入超に方り正貨を國外に流出せしむるに待つて縮少するの外途なき也、而も入超の期は戰爭終息し金禁出の解除せらるゝの曉に待たさるを得ざる可し。

蓋し經濟學上の原則に依れば財界の不振に際しては銀行の資金增加し兌換劵の收縮するを常とす、然り銀行は準備資金の外に遊資を抱擁するの實力なきものなれば斯る場合に於ては金利を下げ貸出を促すは當然にして、其結果世間に資金流動し物價騰貴と投機熱の勃發は免れざる也、斯の如く一旦膨脹したる兌換劵が收縮せらるべき經濟原則に伴はざる變體は其原因政府の公債政策に基き且つ戰時經濟の齎らす所にも由る可きなれども、他に特別の事情なき限り膨脹せる兌換劵の收縮せざる以上は物價金融の上に劇變を上下し、緩和と下落緊縮と騰貴動搖常なきを免れざる也。





金禁出の影響如何は政府の消極政策に依り打擊を減少すべしと雖も、不幸にして反對の積極的政策に出づることあらんか、兌換劵の增發公債の增加となりて現はれ續て物價の騰貴、投機の煽揚となり更に來るべきは金融の緊張、金利の向上となり、最後に今日甜めつゝある投機の潰亂と云ふ苦き經驗を再びするに至らんのみ豈、現下反動的金融の緩和を見て前途の靜平を招致する先驅良兆と樂觀して可ならん哉。

# 公開狀の部

## ◉與若尾幾造君書

若尾君足下、近頃同業時事新報は全國五十萬以上の資產家を網羅其紙上に選表せり、彼が熟練と熱心と信用とを以てせる選定の正確なりしは固より疑はざる所なるも、倩々選表の人物に就て點檢する時は、其富豪の大半は單に資財を比較的多く蓄積せしと云ふに止め、灰吹的守錢奴に非らずんば、木偶的金庫番に過ぎず、特に其蓄積の因由と徑路を知るに至ては、嘔吐三斛臭穢の氣鼻を掩ふも尙耐へざるものありて存す、其社會國家の爲に何等貢献する所なきは勿論、却て時に士風を阻害し、敎化に惡影響を及ぼすに至る、之を歐米富者の能く儲け能く遣へ、能く利し能く散じ、其直接たると間接たるとを問はず、公益國利の重器として尊重せらるゝに比し雲泥萬里の差も啻ならざる也、而も余は足下が時事紙選表の一人者たるを祝すると同時に我國多數富豪の輩に倣はず余が意中のリッチメンたるを更に欽ぶ。

若尾君足下、足下が、實業界傑出せる才能者たるは世既に定評あり、現に足下が重役として任せらるゝ銀行會社の數二十餘種の多きに上り至る所其の手腕の凡ならざるを示すに見るも、其實業的能率の尋常に非らざるを推認するに餘りあり、思に足下を目して偏狹執拗の小器と視るものは足下に快か

らざる徒が色眼鏡を透しての僻見たり、曷ぞ知らん、彼徒が見て偏狹とするは其操守の堅固なるを意味し、執拗と評するは其意志の强靭を表象するに非らざる莫きを得んや、足下往年横濱取引所理事の任に在るや、鐵案を提げ根本的救治の大策を建て、蜚語紛々俗論囂々たる中に立ち、毅然として群小の反抗を壓し、衆愚の謬見を斥け、敢然として其所信を貫徹するに至れり、聞く所に依れば當時足下は取引所危殆の境地を救治すべく、殆ど之が爲めに身心を傾あるを得たる、頽瀾廻倒の功勳偉績は沒すべからざる、我財界歷史に特筆すべき一頁の矜飾たらずとせんや。

衆議院議員　若尾幾造君

若尾君足下、足下が公生涯は過去に於て頗る紆餘曲折たるものありし如く、將來に於ては起伏顯晦の妙趣あるものとして余の囑望する所なりと雖も、足下が當年の自由黨正系を踏んで渝らざること十年一日の如く、其操守の堅固意氣の高邁、恰も足下の容貌の夫れの如く古武士の風あるは余の深く欽羨して措かざる所也、澆季の世とは云へ、政客の意氣全く銷沈し、朝に甲黨と握手し、夕に乙派に流盻を送り、主義を捐て政友を賣り、反つて利己に立脚し、自己に出發するを以て、豹變の君子無碍の智者として怪しまざる現代、而も秋風轉た落寞の觀ある縣下政友會唯一の驍將として、其惡戰苦鬪の勇氣と堅忍不拔の精神を知る者、誰か感憤興起の情動かざるを得んや。

若尾君足下、聞く足下客年衆議院議院候補者として、島田、平沼兩氏を對手とし、奮戰したるも遂に敗衂に終りたるは余の窃に遺憾とする所なりき、蓋し足下の實力と經驗とを以てして、島田氏は兎に角、若將平沼氏に銜る凱袖一振の觀あるべしと豫期したりし也、例を換て云へば大關と小角力到底相撲にならずと觀測せし也、料らざりき此事あらんとは、勝敗は兵家の常とは云ひながら斯る番狂は又以て異數の事に屬し、余は當時一種の好奇心に驅られ之が原因に就て審究する所ありたるも、其の言明を憚るものあり茲に發表を控ふるも只一言兵驕るものは破るの格言を足下に呈し置くに止めん。

若尾君足下、足下瓦斯局長として其の巨腕を振ふに方り、端なく敵黨の乘ずる所となり、一時世論の傾向足下に險惡なりしものありしも、高潔無比なる足下の心事は余の確認する所、豈調査委員等の決定に待つて而して後知りしと云はんや、側に聞く水道、瓦斯兩局長は市長自ら其任に當るべきを以

てするを足下の持論なりしと、而も責任觀念の深き足下が、一旦選れて局長の椅子に凭るや先づ自己を空ふしてベストを斯職務に傾盡して吝まざりし也、宜なり今や足下の努力と忠職の賚ものとして、同局の經費は確に年額二萬圓を減じつゝありて消極的にも夫れだけ市民の負擔を減少したるを、市民が漸く足下の眞價を認識するの機運を兆したるは當然たり得る也。

若尾君足下、聞く足下は甲州の出身者也と、山河秀麗の氣凝つて偉人を出す、遠くは機山を出し、近くは大貳を產して之を證左とせり、足下果して其衣鉢を承繼するの任に堪ゆるや、嗚呼今や歐洲の大戰隣邦の動亂に方り、財界並に政界に足下の如き巨腕を期待して措かざるものあり、足下たる者豈大に自重勇奮せずして可ならんや。

若尾君足下、余は敢て政黨政派に關係を持たざるもの、又足下とは更に一面の識なく、勿論恩怨の存すべき筈なし、而も敢て此の區々の言を爲すは、邦家の現勢に見て耿々一片の衷情忍び難きものあるに依ることを諒とせよ。妄言多罪頓首々々。

（五、七、一八）



## ◉與小野光景君書

從五位貴族院議員小野光景君足下、世間偏眼僻見の徒多し、君を以て貴族的固陋の一矜爺、我利的自尊の沒曉漢と評する者あり其當らざる妄言たるは勿論、非禮極まる言辭とすべからずや、余輩曾て雜誌『青年及青年團』紙上に『横濱紳士觀』と題し、名流紳士の月旦を試ること十數名、將に筆足下に及ぶに迄んで、考證旁搜一頁を重ぬる毎に疑問百出遂に稿を脫するに遑あらずして今日に至れり、何ぞや曰く道聽塗說の容易に信じ難きこと、余輩の調査の結果と其事實の差違雲泥萬里も啻ならざりしが故なり。

今茲に余輩が新報を發刊するに方り、其の未定稿を整理補綴して之を公表し、敢て所見の當否を世人に問ひ、併せて足下夫れ自身の批判を乞はんとす、余輩が今斯る企圖を試むるものは積極的意味に於ては社會人心維持の基礎、國家風敎上の師表なる上流階級の士女に對する、日常生活の擧止より、閱歷、人格、趣味、特徵等の梗概を世に紹介し以て社會敎育の活きたる敎材を提供せんとするにあり、又消極的意義に於ては士氣の頽廢家庭の紊亂を規戒諷諫せんとの意に出づ、余輩豈妄に人を月旦批評して快を取る閑日月を有せん哉。

聞く、足下の先考兵助氏は帶刀御免の町名主を勤めたる名士也と、足下が普通商人と毛色を異にし何處やら武張つた堅た苦しき容子の存するは是が遺傳的性習に由り、世間凡俗の徒より尊大の朴强漢と認めらる、點も之に因する也、蓋余輩は凡俗の徒が足下を貶して、尊大の頑迷漢と云ふ意味を、最も善意に解する一人にして、尊大即ち自信力强大なる超凡の高士たるを表徵して餘りありと觀測するものなり、唯夫れ翩々として萍蹤常なき少才子の輩に倣はず、强堅冒し難き意志を以て終始する足下の生涯は當世得易からざる士人たるを失はざる也。

小野君足下、世間足下を以て卑吝の守錢奴と貶評するものあり、思に足下か當世成金者流と其選を異にし深く藏し堅く收め、苟も濫費浪出を謹むを見て、皮想の妄評を下すに過ぎざるべし、足下蚤くも我國商業智識の幼稚なるを慨き、巨萬の私財を投じて横濱商業學校創立の美舉あり、由來十數星霜數百千の子弟を養成し、而も校風靡然士魂商才を重しとして今日Y校の名藉甚たるを致したるに徵するも、豈一片售名の徒の企畫と同日にして論ずべけんや、曷そ尋常成金輩等の企及すべき業ならんや。

小野君足下　余輩は特に足下に推服措かざるものありて存す、何ぞや、曰く、足下が流石名流家門の出として、家庭閨門の肅愼せらるゝものと見え、曾て醜聲の外間に流布するを聞かざるにあり、足下が抱擁する鉅萬の富力は、幾多の妻子僕婢に侍れ數百の店員を傭使するも、整齊せる家秩をして未だ一絲の紊れを惹起したることあるを聞かず、是れ足下が操守自ら堅ふし範を示すに非らずんば何ぞ



此の如きを得ん哉。

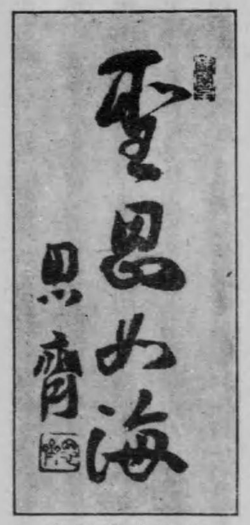
小野君足下、足下が我實業界一方の覇者たり、而も常に武士的氣魄を以て商事に終始する偉跡に至つては、彼の南湖翁と共に、我錦港双美の誇りたり、往年足下が挺身して外商の專横と跳梁に憤激し一時の毀譽を眼中に措かず、數々禍害の身邊に襲來するをも怖れず、奮鬪多年遂に我生絲貿易の商權を恢興するの氣運を與へたるが如きは、我國貿易史に於て、其幾頁に持筆大書すべき偉勳たらずとせんや、唯足下が常に理と誠を以て苦鬪したるに對し、翁は情と熱を以て惡戰したる差あるも其功績たるや一たる也。

小野君足下　足下が公生涯は比較的、華々しからざる觀あるも、是れ却つて足下の貴祿の重を表象して餘りあるなり、彼の翩々として輕きこと羽毛の如き群小政治屋等が、蛙鳴蟬噪輕舉妄動する間に立ち毅然として重厚自ら居り滿を持して放たさる邊に、棟梁の材は認めらるゝ也、而も手一度弓弦を放れんか、弩箭一飛命中適確鐵石皆穿つの概あるを思はずんばあらず、蓋し足下が貴族院議員として、横濱築港費繼續補助の斷絶せんとする危期迫るに方り、能く內外上下の疏通を圖り、穩健の議正順の論を以て遂に廟議を決し議會を動したる手腕は何人も敬服する所なりと雖も、這は足下の大を以てしては寧ろ小問題たり茶飯事たる觀なきに非す、嗚呼現在否近き將來に政財兩界に、足下の如き有德重厚の巨人を要望すべき時機は到來せん、庶幾は加餐自重せよ、頓首々々。　（新六、八、十）

## 附　同君訪問記

本牧行電車終點より東に十丁程の田圃路、有名なる本牧は大谷戸の突端、海に面し丘を負ふ形勝の地を相して、新に地を拓き谿を埋め、昨今盛に其輪廓と背景の完成を急ぎつゝある別業の本館は既に月前に工竣り、此閑寂幽淨の境に終日關擊する公私の勞劬を醫すべく、將た徐に巨大なる商略を策すべく、萬幅の經綸を畫くべく、隨時歩を運ばるゝ人こそ、錦港生糸界のオーソリチーにして、而もジエントルメンタイプとの稱ある、小野光景君であつた、實は本紙前號の「公開狀」に於て聊か君のフウスヒーを試みたが、怎も氣が咎めて已まぬ、と云ふのは自白すると未だ一面識だになきは勿論、別にシステマチックの調査に依りたるにあらず、云はゞ道聽途說を基礎とし、探訪の斷片的報道を加味して起稿したに過ぎなかつたに拘らず、該記事が一度紙上に公にせらるゝと、各方面より贊否の聲揚り、中には最も眞摯の態度を以て具體的に露骨に、君に閲歷、性行は勿論、平素の起居動靜迄細かに注意して呉れた人もあつて、記者も晏如として居る譯に參らなくなつたのである、遮莫甚だ唐突で不躾千萬とは思つたが百聞は一見に若かずと決心し、去日油蜩がヂー〳〵と鳴く燬け着くやうな最日中別墅襲擊と出掛け君の午睡の夢を驚すに至つたのである。

本牧名勝の大谷戸の往き止まり、右手の小高き丘上小松原を點綴する羊腸たる山道を約三丁も登ると、松間未だ木の香新らしき平屋建瀟灑たる一構こそ其本館の夫れである、……本館の呼鈴を押すと取次の下婢が氣輕に而も叮嚀に來意を問ひ名刺を携へて、いそ〳〵奥に通ずる、サー此方へと左手の小座敷に招ずる、麻布の座布團、紫壇の莨盆、氷入炭酸水と云ふ風に頗る無雜作に、勿體振らず、順序が凡て平民的に取り運ばれ行くには記者は少からず面喰つたのである、事實を告白すると記者は胸中に描きた、ブロクラムに依ると、先づ記者がタノーム!!!と呼ぶと、どーれ!!と應じ出で來る小倉袴の三太夫君が氣取つた咳拂を一つ行てから記者の風體を見上げ見下したる上、先づ安心と云ふ塩梅にて御名刺と



小野光景君書

緞子の厚座布團が上座に据えらるべく、萬事貴族的に出來て居るべき筈であつたのだから、斯ふ反對の豫想に來られては吃驚するも滿更無理とも云へまい、通された小座敷も至極瀟如として、微塵のヴアニチーの無い、崇高なる性格嗜好迄がアツソセーションせらるゝ、見廻すと道が床には雲烟縹渺たる氣品凡ならざる水墨山水の古畫が一軸懸つて違棚には帙入の和本が整然と飾られてあるの外一物の目に留るやうな裝飾が無い、唯だ東南の廻り椽を通じて松間より蒼渺たる青海原が隱現して不斷の松

籟に大琴を奏で、自然と腋下に涼風の起る感あるのみである……主人公には白地の浴衣に羽二重の兵兒帶と云ふ扮裝にて親ら桑の籠大鉢を掲げて現はれ。『イヤ是は失禮しました、甚麼にもお熱いですな、善ふこそ遠路お尋ねくださいました、さあお平に、お蔭で此通り頑健で……』と云ふ調子で何處までも安に邊幅を飾つて、自ら驕矜る當世成金紳士のサークルを脱して居る所が奥床しい、見受る所七十二の高齢とは怎ふしても思へぬ、血色の良い艶々として嬌爾な、心潤く體胖かと云ふ壇梅の六十歳前後の老紳士であつた。『イヤ新聞經營と云ふ事は非常なる困難の内に又興味のあるものゝやうですな、……私も故福澤先生の紹介で高橋義雄君や、田口卯吉君の推薦で宇川盛三郎君等の標榜せる純經濟主義の貿易新聞を創建せる經營に、多少の援助を與へたことがありましたよ、左樣今の貿易新報は其の前身で種々變遷を經て今日に至たのです、……新聞と云へは私共の最も信頼して居りました、故福澤先生の創設に係る時事新報も、近來大分調子が變つて來たやうです、故先生は豪い人でして、何んでも重要な事は自分で筆を採り、編輯にも嚴密な監督を加はへ、決して人任せにするやうな事はなかつたのです、夫れですから終始一貫的に自己の理想通り、該新報の記述と方針が一致して來たのです、……彼の新報が先生歿後漸く政治的色彩を帶びて來たのは未だしも可なりとしましても、漫に大隈内閣の施設とさい見れば難癖をつけ、單に攻擊のみを加ふるを能事とする風あるは甚怎云ふものでせうな、特に近來全國五十萬圓以上の資産家を調査して之を紙上に發表して居りますが、頗る杜撰



極まるものです、聞けば或る與信所とかゞ調査したさうですが、其の間に種々の魂膽でもありはしますまいかね？』と稍々語尾を低ふして暫し沈吟した後　『現に當市に於ても某氏の如きは發表せられたる不適確な調査に非常に迷惑を感じて居ると云ふことです、元來斯る計畫は他の小新聞の行ふべき事で、苟も時事紙ともあるべきものが爲す事ではなからうかと思はれたのです、此事を地下の先生が知つたら何んと云はれるでしやう……私は故先生とは特別の懇親者であつた丈け、夫れ丈け痛切に同紙の現狀に見て、世間新聞の動もすれば免れざる通弊に陷らざるを望み、且つ並で先生の遺志を失はしめざるやうとの感が深いのです』と。語を時事新報の近狀に藉り新聞の通弊を論しられたのには、少々記者の耳も痛かつた。『横濱發展策ですか、實に大問題ですな、聞く所に依れば清水港に於ける三延鐵道との連絡は荐りに計畫の歩を進めて居るさうです、是れは申す迄も無く甲信越方面の貨物直通と云ふ目的が主眼であつて、之に對する將來の應戰策如何ん、京濱間の運河問題、神戸東京に對應すべき畫策、商工並立の市是具體の決定より、戰後の經濟問題等數へ來れば、我横濱市に於て討究施設すべき、重大の問題は多々あるのです、今此處で座談的に私の抱負を陳ぶるの遑はありませんが、要は從來の黨派的若しくは感情的軋轢を一掃して市民上下の協同一致の態度を以て外に向ふことが何より先決問題でしやう……』と由來地主派商人派の形成した原因歴史經路等を詳陳したるも、遑が老巧圓熟にして、而も眞乎愛市の念禁ぜざる君は、昨今漸く市民覺醒の域に進みつゝ、蝸牛角的爭鬪の昨

非を自覺せんとする機運に向ひつゝあるに方り、今更過去の惡歴史を繰返し、記憶を新にするが如きは甚だ好む所にあらずとし、此點の新聞記述を戒論せられたる、其遠慮の心事を忖度したる記者は、轉た君のサブライムなるパーソナリチーに敬意を拂はざるを得ぬのであつた。私の政黨所屬ですか？貴族院では幸倶樂部に屬して居るのです、元來同倶樂部は毛色の異なる雜多の分子より成りたつて居るので、其政治意見も區々に亘りますが、別に黨議とか云つて自由意志を羈束するやうなことはありません、結局問題に依り意見を交換し、研究討議する態度が同倶樂部の特質です、例之ば大隈内閣に對しても絶對的に贊同しません代りに、隈閣なるが爲め攻擊すべしとする態度を取りません、然し倶樂部員の七八分は隈閣には好感を有する者ですから、自然現閣援護派の形を成して居るやうなものですな……大分内奏問題が八釜敷やうですが、怎も私には了解に苦みます、まさか甚麽事實が大隈侯に依つて爲されたとは思はれません、……是は左ほど頭を痛める重大事件でも無さそうです。十億に近い正金の處分に困るのは愚の極です、廿六億の借金を早く片付ける工夫が第一のやうです、五千萬圓の基金は豫定の計畫です、唯だ財政經濟の狀況に適應せしめん爲め、二千萬圓を鐵道資金に流用するとか、軍備費を補足するとかの議論が出るのです、何も苦んで今日の場合豫定基金を割くの必要があるでしやう、何んでも算盤を採つて計算を立てなくてはなりませんな!!!と、暗に戰後に起るべき企業勃興の警戒を諷し、借金政策の不可を戒むべき口吻を洩らし、政府對貴族院衝突融和の前途容易なりと樂觀せるもの〻如し。『私の閲歴ですか！、別に取り立て〻お噺しする程の材料と興味を有しませんが、唯だ一事青年者流に對する敎訓否な參考ともなるべき事は、私が武士として世に立つべき境涯を棄て商人となつた動機ですな……元私は信州小野村に生れましたが、幼少の時姻戚なる内藤藩の小林家に養子に行きました、父は御承知の帶刀御免と云ふ格の横濱名主を勤て居りまして、何處らへ向いても槍一筋の家柄を繼紹せんければなりません境地にあつたのです、而も當時戊辰前の風雲頗る急にして、所謂兵馬倥偬の際でしたから、廿一歳の血氣盛り信州の奥に蟄居して燻ぶつて居ることを許さず、養家は勿論實父にも無斷で出京して只管風雲に乘ずべき機會を覗つて居りました、然るに天下の大勢は外國との交通を遮ぎる譯に參らざるのみならず、通商貿易の利益大にして將來立國の基礎は富力の如何にあるべきを觀取し、斷然武を棄て商に就く決心を起し、横濱在勤の實父に決意を明しましたところ、昔堅氣の父は以ての外憤ふりまして、即座に實家を勘當し又養家を離縁して累を及ばさゞる樣にすべしと嚴然宣告を受けました、私は素より期する所であつたが、騎虎の勢も加はつて此宣告を諾し自身養家に談じ雜縁を取り、再び出濱して外國貿易に從事しやうとしましたが、奈何せん無經驗無一物の悲しさ誰も相手にしてくれる者なく、一時非常のヂレンマに陷つたのです、最も當時階級制度の嚴重なる時でしたから、父の勤役を遠慮して私を敬遠した形跡もありました、……然るに幸にも商界の奇傑と稱されました取引所の雄鎭中村惣兵衞と云ふ人に從隨することゝなり、爾來同人

の薫陶提撕に依り貿易に關する實際智識を習得し、遂に今日あるを得ました、……私の恩師であり主家であるべき中村氏は實際偉い人物であつたのですが、豪放不羈の性格が累を爲し遂に終を全ふせなかつたのは殘念に堪へません！と懷舊の情に勝へざる容子で、感慨無量と云ふ風に數々目をしばたゞいた。『私の商業方針ですが……怎も自分のことを云ふのはと、』謙遜一番の後『外國貿易の根本義は自他を利すると云ふことで、其基礎が絶對信用に立てんければなりませんのです、が日本商人はどうも此觀念に乏しく動もすれば自利他排に流れ、信を內外に墜す傾きがあつて困ります、私は終始一貫重信主義に立脚し生絲貿易に從事して居りますが一時の不利損失の如きは信用を犧牲にする迄燥心急慮しませんでやつて來たのです、私が橫濱商業學校を創立しました深旨も畢竟單に商業智識を物質上にのみ進むるに止まらず、精神方面にも向上せしめんとする意に過ぎません幸にY校の名が私の理想に背かず發達し行くを見て欣懷に堪へぬのです、橫濱港が將來商工、何れを以て市是と爲すべきやは別問題ですが、自然の良港を控へ天然の好位置を占むる當港は眞に貿易の中心地たるを失はぬのです。

而も輸出貿易の最要部を占むるものは生絲で我國產の隨一に位して居ります、私は此の國產隨一生絲貿易を以て國家に資せんと、十年一日の如く終始して居るのです、然るに世には橫暴にも自己の富力を賴み……と言大に蔑境に進まんとせしが、俄に口を噤みマー是れ位の所にて止めましやう』と謹嚴にして廣量なるべき君は、幾ら情激し意切なる際にも、常に其言及に注意して、苟も他人の非を摘



抉し批評に亘るが如き場合の生せんか、忽ち語を轉じ言を噤みて之を避くるの德量を有せり、記者も之を追窮する程の殘忍性を有せぬから遂に此の一節は結論を見るに至らなかつたのである。『私が今日迄何等國家社會の公益に貢獻したる事績の見るべきものなきに、從五位勳四等の恩典に浴するは恐懼に堪へません、ナニ……公益事務の關係を嘶せと云ふのですか夫は君等の隨意調査に任せ私より言はぬが花でしやう』何處迄も謙抑の態度を持して多〻語らざる所に、小野君の眞價値が認めらるゝのであつた。記者も君が戶長時代より商法組合長、正金銀行頭取、市會議長、商業會議所會頭、貴族院議員等の各方面に亘る重要公務に當り、其表面に現れたる事績以外、隱れたる功績少なからざるを知らざるにあらざるも、何れも他日精探の上記述する機會の在るべきを思ひ、同邸を辭して歸途に就きしは蜩蟬が、カナ〳〵と鳴く、日陰に涼氣が颯と身に快き頃であつた。　（新、六、九、一〇、）

# ◉與原富太郎君書

原君足下、余寡聞淺識を顧みず、僭越ながら、横濱市三元老を本紙別欄に選表せり其標準は固より富力、知見、勢望、人格を包含せしこと論なきも、最も重きを置きたるは其長壽の點にあり、是れ『天は有德者に福祿長壽を與ふ』てふ東西一致の哲理的格言を重んじたるが爲に外ならず、足下既に余の定むる所の標準の四資格を完備して餘りありと雖も、惜哉、未だ長壽の域に達せず、此一要件の缺如が足下をして元老のクラスより排除したる所以なり、勿論足下が潑溂たる精力と横溢せる英氣を以て、敢て苟も小成に安んぜざる平生の主義よりすれば、老の一字を冠せらるゝが如きは、其の甚だ好まざりし一事ならんも、選表より脱除せる余が私心の存する所此處に在ることを諒とせられよ。

原君足下、世人足下を評して機畧縱横の人也とせり、蓋足下を以て世間普通の小才子肌にして富力に伴ふ偉才たらずと貶ずるの暗語なるが如し、是れ足下を誤れるの僻見たり、余往時中學時代に唐の馮用之の機論を師に聽けるを記憶せり、曰く『機は微なり、之を至微に發す、之を用ふること至廣、大人之を行へば則ち道に合ひ、細人之を窮めば則ち亂に階す、道に合ふは世を濟ふ所以、亂に階するは身を滅す所以、世を率は機の利者也、身を滅す機の害なる者なり、利を知つて而して害を知らずんば、其の害を去ると雖も害必ず之を悅ぶ、害を知つて而して利を知らずんば、其利に付と雖も利必ず之に違ふ、利を知つて而して害を知り、去ることを知つて而して就くことを知るは其れ唯至人乎』中畧『機者智より生ずる者也、智者は其性に隨ふ者也、爲て而して有せず、功成て居らず天下をして熙々然として春臺に登て而して大牢を享るが若くにして帝力を知らざらしむ、故に國の福たり、細人曲士は其の小なる者近き者を得て、嗜慾繫く世を永ずとは我聞く所に非ず、夫茫々たる六經ほ萬機の圖、昭々たる前史は萬機の鑑たり、仲尼云ふ機を知るは其れ神乎、旨ある哉旨ある哉』と、想ふに足下の所謂縱横機畧の士たるや、馮用之の大人の機、仲尼の知機神に相當し、斷じて細人曲士の小機に非らざるを知る、將た然かくあらまほしく希ふ

原富太郎君

になん。

原君足下、足下が實業界一方の權威者として、我財界甚大の貢献者たるは今更評するの迂愚たるを知る、唯足下が其綽々たる餘力を以てして、文藝、美術、教育、宗教の方面迄、大な勞る費を吝まずして其資料を蒐集し、研鑽攻窮せらるゝ高尚なる心事に推服せざるを得ず、蓋し足下を貶評する者の言を聽くに、輕浮なる一種の趣味より出發せる嗜好を充たさんとし、陋卑なる打算的利慾心に飽かんとするに過ぎずして、眞個美術文藝を愛好し、教育宗教を普及して、以て社會を裨補せんとする崇高なる心意あるに非らずと、貶評者は更に具體的例證として、其三溪園の開放を以て徒に數奇を凝らして傲奢を他に矜るの場に供するものとし、恣に名畫工を獨占して畫料を昂め其奇利を博せんとするにありとし、又印度の詩星ダゴールを招請優待して同國人の歡心を買ひ、自家商業上の利便に資せるものなりと爲す、嗚呼曷ぞ觀察の不徹底にして妄評の甚だしき哉、余は敢て此種の妄語に耳を藉す者に非らざるも、世間數々足下が崇高皓潔なる眞意を誤解し反つて惡聲を放つ者あるを聽くを遺憾とせざるを得ず、足下其因つて生ずる所を知れり哉、側かに聞く足下近頃深く門戸を閉ぢ、世の所謂有志者政客の輩を敬遠し、特に無冠の帝王を以て自任し、社會の耳目木鐸たる新聞記者に甚だしきものありと、是れ足下が往々誤を世に傳へらるゝ眞因に非らずして何ぞや、古今東西を問はず大人君子の最も悞るゝ所のものは誣妄の流言蜚語に在り、最も苦む所のものは構讒の常に乘ずべき間隙に在り、故に



門戸を開放し、胸襟を明解し以て誣妄構讒の乘ずべき機會なきに力む、俚言、疑心暗鬼を生ずるの語深く味ふ可きに非らずや、敢て足下の賢明に告げ猛省一番を望む所以也、原君足下、足下が該博の識、深慧なる智、豁達なる意、仁慈の心、無量の富を以てして、尙ほ且つ構讒誣妄の乘ずべき機會あるは眞に一大恨事たらざるなきを得んや、人生の眞諦微妙深遠にして容易に談ずべからざるも、所詮は其得たる智識と富力を適當に按排して、自己を利し、社會を益するにあらん、唯足下にして始めて人生を論じ妙諦を議するの友たり得んのみ、故に此言あり足下果して余が卑見を容るゝや否や、妄言多罪。

（新六、二、八）

# ◉與茂木惣兵衛君書

茂木君足下、余は職務上少くとも一ヶ月十數回上京するを常とす、車中屢々眉目秀麗風骨尋常ならざる一個の青年を見たりき、圖らざりき或る偶然の機會に於て該青年が足下なるを知るに至れり、爾來足下と同車すること數回、余が足下に注ぐ心理機能の敏且つ深きを增こと一倍すると同時に、足下が尋常一樣大家の若旦那に非らざるを感知するの光榮を得たり。

茂木君足下、余の經驗する淺薄なる知識範圍に於て、所謂大家の若旦那なるものに大人物を出せし例乏しく、其多くは不肖の子低腦的鈍物のみなるを遺憾とせり、昔日よみ殘したる俳人が『唐樣で賣店と書く三代目』は餘りに皮肉過ぎるも亦一面の眞理を語れりとせざるを得んや。

茂木君足下、聞く足下二十一歳の青年期に於て早くも先代の大故に逢ひ、名古屋第八高の制服を脱し、茂木家の若主人公として、父祖の家業を繼承し以て巨萬の富を料理すべき重責を双肩に荷ふに至れり、豈普通一般の坊チャン輩の纖腕細肩の負擔に堪ゆべき重荷ならんや、當時貴家に同情あるものすら冷汗し杞憂して其前途を氣遣はしめたるも宜べならずとせん歟。

茂木君足下、想ふに横濱實業界の狀態は往昔戰國に於ける雄將謀士が割據して其覇を爭ふが如く、





原善の武州より、茂木惣の上州より、小野の信州より、若尾の甲州より、大谷の伊勢より、木村の總州より崛起して横濱に猛襲し、以て天下の商權を掌握し財權を獲取せんと敦圍きたり、其意氣の壯、作戰の妙に至つては彼の孔明と仲達、機山と不識庵の對戰にも勝れるものあるを思はしめたり、恰も足下は彼の千軍萬馬の間を馳驅したる老武者の間を彩色したる、平山の武者所、態谷次郎對無官之大夫敦盛にも比すべく、眞に萬綠叢中紅一點たる觀ありて轉々血湧き肉躍るを覺えざらしめたり。

茂木惣兵衛君

茂木君足下、世間足下に對する豫想の大半は杞憂に屬せり、蓋し天才は必ずしも後天の陶冶を須ゐずとの人性哲理の原則は足下に於て立證せらるゝに至れるの感なき能はず、顧るに足下が前代の箕裘を襲ひしは廿一歳の若年者にして云はゞ一個黄吻の世間見ず坊チャンたり、而も數年の短年處を經る今日の手腕振りに至つては、余をして思はず天晴れ斯の麒麟兒を叫ばざるを得ざらしめたり、由來錦港の老將は既に功成り名遂げたる

に甘んじ頗る守成退嬰の憾なしとせず、足下の前代の如きは特に然るの觀ありしに、足下一度世に出づるや、老將が兵を遣り、謀士が帷幕に籌畧を斷ずるが如き、進退駈引掌を指すが如く往々として肯綮に當らざるはなし、始め足下新進氣鋭舊套を打破して陣形を新にするの策を立つ、疾風迅雷殆ど耳を掩ふに遑あらず、茂木家に於ける一大弊竇たりし保平、愈兵術の二派閥墻の溝渠を徹し、以て茂木合名會社の堅礎を築成し、同時に平澤越郎を日本銀行名古屋支店より拔擢して茂木銀行支配人と爲し安齊羊造を退隱せしめて自ら之を直轄し、更に會社を四分して生絲、輸出、銀行、呉服部とし各部、配するに帝大高商出の新智識を以てし、里昂、紐育、南米、印度、濠洲、支那の各要地に支店又は出張所を創置して益々積極進取の商畧を採り、更に一歩を進め、日本火藥製造會社、羽二重倉庫會社、亞鉛精錬所等を創建し、新に鑛業部を設け横須賀製鐵所を買收するに至つては誰か足下の膽畧偉才に驚嘆せざるものあらん哉。

茂木君足下、蛇は寸にして已に人を呑むの概を有すと、器局の大、才略の豊、足下の如きは當世稀觀の人に屬せり、側に聞く足下新進氣鋭時に暴虎憑河の勇を演出することありと雖も、而かも人言を容るゝの寛量を兼備し、特に老熟洗練の長與程三を參謀に重任して帷幕に參畫せしめ萬遺算なきを期すと云ふに至つては、眞に足下を將帥の大器なりと推稱するも豊溢美の言とせん哉、唯夫れ足下は商界の麒麟兒たるに於て疑議なしとするも、前途尚ほ遼遠たるべき大海の彼岸に向つて漕ぎ行く、高才



逸足の船路に浪荒らき日もあらん、風强き時もあらん、豊春海洋々順風に帆を孕ませ欸乃舷を扣く安全の航海のみを豫期して可ならんや、庶幾は前途に向つて一段の修養と警戒と努力を望むや切也矣。

（新、六、七、五）

# ◉與平沼亮三君書

平沼君足下……想記す……往年足下が錦港與黨推薦の概を荷ひ、其颯爽たる英姿を逐鹿戰場に現はすや、市民は簞食壺漿して此の新進氣鋭の若武者を迎へたり、而も敵將若尾氏は百錬老巧の雄將として既に千軍萬馬の間を幾回か馳驅したる經歷を有せり、新鋭の名將と、老錬の雄鎭との對戰、僕等局外の觀戰者は彼の不識庵對機山の川中島戰記を讀む氣分以上の興味を以て觀望せしなり、戰況は刻々として足下に利ありと報ずる毎に、僕等此の戰局に何等利害關係なきものも、一種不可思議の心理狀態を以て快哉を叫ばしめたり、僕は少なく共當時コリッチーブセショロヂーの渦中に投入したりし也、故に或る者は僕を以て足下の提燈持の一人と評したるも由れ無きにあらずや。

平沼君足下、足下が初陣の若將にてありながら、勁敵若尾氏を敗り得たる眞因を知れりや、言ふ勿れ大隈侯の聲緩ありしが爲と？雲の如く謀將猛士の後援ありしに依ると？島田飛將との聯擊力に因すと乃父の扶殖培養せる遺種を拾ひたる利ありと？僕の見を以てすれば是等は一局部の勝因たるに過ぎずして未だ以て大局の主因と爲すに足らず、然ば主因とは何ぞや!?曰く、他なし足下夫れ自身のセルフコンフインデンスより出發せるアクチーブの賜もの之れ也、思に足下が年少氣鋭進取敢爲の心理に





於て當初馬を陣頭に立つるや、既に眼中勁敵なく、一若尾の輩何をか爲さん的の自信ありしならん、此自信ありて始て活躍自在の心境に至り、縱横無碍の活動を見たる也、足下が數々演壇に現れたる時の態度演說に徵するも其揚悠迫らざる内にも潑溂たるバイタリチーの閃ありて、氣常に滿場を壓する概ありき、然り確に足下の勝利は此自信、生氣、活動が眞因たりと斷信せり。

平沼君足下、世人足下を評して無邪氣の坊チャンと云ふ、嗚呼眞に足下は無邪氣の坊チャンなる哉、僕は足下の無邪氣の坊チャンなる評にレスペクトせざるを得ず、否な足下の眞價は又其處にありとして欣慕の情は遂に因循、退嬰、無氣力の弊竇を釀成し進取、敢爲、元氣、潑溂等の快文字を減少せるの秋に方り、特に政界の惰氣滿々として徒に老獪の輩が漁利の場と化せんとするの時に際し、珍しくも無邪の坊チャンたる足下の我錦港に出現せるは、眞に空谷の跫音にして其人意を强ふする我等なるを知らざる也、

平沼亮三君

語を寄す、足下無邪氣の坊チャンなる評を甘受するや否哉。

平沼君足下、足下名流の出、夙に慶大を卒へたる俊才にして、親しく歐米文物の實狀をも見聞せり、其地位識量に於ても他の碌々たる陣笠に比すべきにあらず、況んや年齒未だ不惑にだに達せざる洋々涯りなき廣く且つ遠き前途を有せり、豈自重して家名を殞さず、世望に孤負するなきを期せずして可ならんや、眼を放つて世界の大勢を看よ、歐洲の戰亂勃發後將に三年に垂んとして更に終局の期測り難し、隣邦支那の形勢混沌として前途容易に逆睹す可らず、北米合衆國のモンロードクトリンは變じてミリタリズムと化し、尨大なる運備擴張の標的何國にありや、戰時の變態は輸出超過となり、六億餘圓の正金を保有するの盛況にあるも、果して之を平時の順調に按排すべき大策ありや、徒に膨大せる國費が其大半を軍備に消耗して、培本的生產方面の政策に閑却せらるゝの虞なきや、其他教育政策より人權擁護問題等の國家的大問題の眼前に横はるにあらずや、將又近くは足下の選出せられたる横濱市是の解決より、交通、衞生、教育に對する經營施設すべき重要案件尠少ならず、足下が市民の重望否國家の重器として、信を內外に荷ふの責任重且つ大なるものあり、足下たるもの之に對する大經綸なくして可ならん、冀くは足下が大抱負の實現を望むや切也、妄言多罪。

（新、五、七、五）



## ◉與渡邊玉子夫人書

入つては大家の主婦として、良人福三郎君が其富贍なる資力と縱横の手腕とを以てして、各種の事業に鞅掌せる內助に努め、且つ子弟教養の大任より婢僕の監督に至る迄、一切の家事を引受活動するさへ、業に既に尋常婦人の企及すべきにあらざるに、精力絕倫にして義務心の旺盛なる夫人は、更に外に向つて公共の爲め東奔西走の勞を採つて倦色なしとは感ずべきの極み也。

思に當世婦女の自覺と社會の風潮は、彼等婦女界の面目を新にするものありて、亦昔日の男子玩弄の一器具たる陋習を蟬脫すべき機運に向ひたりと雖も、過渡期に免れざる弊毒の之に伴ふことも知らざるべからず、輓近歐米に於けるフラウエンエマンシペーションの如きは、確に彼等の自覺せる理會に出發せる活動にして其利害及成否の如何の問題は別として、稍々吾人を首肯せしむべき節なきにあらざるも、我國婦人解放問題の先驅を以て任ずるブリユー、ストッキング社一派の言動は、全然理會なき虛榮心の發露と見るの外なく、寧ろ塞心すべき趨向と云はざるを得ず、蓋し玉子夫人が自發的外部に向つての活動は全く其選を異にするものありて、夫人が內に於て良妻賢母主義者として貞淑温順の素質は、其餘力を外に展して同情愛憐の誠となりて發露したる也、豈彼のブリユー、ストッキング

的者流と同一視すべきものならん哉。

夫人齢已に耳順に近しと雖も容色の艶々敷さ尚不惑前後としか見えず、端儼の内に温味ありて一種人をしてチエームすべき素質を備ふ、聞く夫人は群馬縣松井町大河原太右衛門氏の次女にして、安政五年を以て生れ、十六歳にして渡邊家に嫁してより、曾て家庭に一風波を揚げしことなく、貞節温順四十有星霜の家庭は常に春風和暢を以て終始せるは、勿論渡邊君の徳餘に出ずるべきも、又夫人が圓熟せる婦徳の然らしめたるものと云ふもし、特に自邸内に鏗飾佃麩製造所を設け、四十餘日間五千圓餘の自費を投じて數千斤を製して之を軍隊に寄贈し非常の賞讃を蒙り、又日本赤十字社篤志看護婦會神奈川縣支部長、愛國婦人會神奈川縣支部幹事長等の要職にありて、軍國の事に盡瘁せられたる功により戰役後勳六等に叙せられ、寶冠章を賜るに至れり、現時横濱孤兒院長、横濱婦人慈善會病院の幹事其他幾多の教育慈善事業に夫人の名の

渡邊玉子夫人

澄美に非らず、德果して孤ならず、長男和太郎氏始め四男七女の子福者としての渡邊家は家運益々隆昌世間羨仰の的となり居るも宜べならずや。

夫人は先に日露戰役に方り、卒先して奬兵義會婦人部を組織し、出征軍人の送迎遺族の慰藉等後援事業に努力



現はれざるはなく、我横濱婦人公共事業界の大立物として世間より仰視せらるゝに至れり、嗚呼索寞たる横濱婦人の活躍界、而も實質に富み實際に貢献すべき事業を主として婦人界に此人あるは眞に吾意を得たり、擾々たる婦人問題又以て夫人に依つて好範とすべきに非らずや、吾人此意義に於て玉子夫人に敬意を拂ふ、穴賢。

（五、十二、八、）

# ◉與代議士鈴木錠藏君書

【上】

社友大木樂山に代り

衆議員議員鈴木錠藏君足下、想起す往年横濱海員接濟會支部一隅の事務室に爐り兀々として會務に鞅掌するや、時に秋雨瀟々の下濕り勝に迭に身の運命を談じ行末を語らひしことを、或は陽春三月洋々たる前途の光明を逐ひ横溢せる活氣を載せて置酒高會談論風發の概ありしことを、僕敢て先見の明を矜るに非らざるも、當時既に君を以て唯の鼠に非らずと看取したる眼力の非凡なりしを今日君の境地を想到して私に自ら欣懷の情に勝へずとする所也、嗚呼野毛山頂巍然として市内を睥睨する如き海員追悼碑は君が永遠に記念すべき當市に貽せし偉蹟を語ると同時に、僕が日夕の深き思出てたらずとせざるを得ん哉。

鈴木君足下と相見ざること茲に十六年僕の双髭半ば霜を交へたりと雖も、意氣尚當年の僕たるを失はず、僕鷲鈍依然として梧下の阿蒙たりと雖も一個のライターとして自ら世の本鐸に容るして其天職に甘じ居れり、請ふ幸に意を安んせよ、君今春突如として其生地茨城縣より推され逐鹿戰場の人となれるや、僕驚喜直に馳せて敢て犬馬の勞を効し、昔時の交誼に報ゆる所あらんとせしも、俗事の支



ふ所となり、遂に之を果す能はざるを遺憾とせり、退て思に君の修養、識才、性格の凡てに於て政客たるの要素を具備し、而も擾々たる、陣笠黨ならざる鍬形兜組の將器を備ふるものなるべきことは、君の平生を知る僕の確信する所にして、當落の問題の如きは別に憂ふ可きに非らずとせり、果然月桂冠は君の頭上に冠せられ議政壇上に君が颯爽たる英姿を見るに至る僕の素懷滿足是に若くものあらん哉。

鈴木君足下、

億に鍬形政治家に鍬形大將の有資格者たる一人を以てせり、豈立證的一言なくして可ならんや、君曾て韓國政府の法制顧問たることあり、偶々二十九年二月の政變に逢ひ、總理大臣金宏集、農商務大臣鄭承夏先づ賊及に殪れ續て内務大臣兪吉濬又兇徒の襲擊する所となるや、君危險を冒し奮然身を挺して景福門前の賊

鈴木錠藏君

群に突入し、縱横馳突倏ち數賊を斃して一道を開き、兪氏を拉して日本公使館に避難せしめたる美談あり、又海員掖濟會に在るや無智文盲なる多數の荒くれ男を手足の如く動し渠輩より慈父の如く尊信せられ今尙仰景措かざる程の德望を有せり、又君は實業家として橫濱生命保險會社、東京硫酸株式會社、東京皮革株式會社等の經營に何れも其樞機を採りて優良の成績を擧げつゝあり、其學殖に至つては高商出の逸物として經濟財政を論議するに最も得意たり、斯くて君は四條件の全部を具備し優に陣笠の匹儔を超脫すべき政客として僕の推奬に誤謬なきを認承するに足る可き也。

鈴木君足下、固より君は中央檜舞臺の役者たるは今回が始めなる可し、敢て怯れたるには非らざる可きも、其勝手の相違は最も至極にして、君が舞臺面何等の活躍的表現なきは當然なりし也、君を知る最も明ありと自認する僕として豈不足を云ふ可きぞ、三年鳴す蜚す否な遲くも此の冬期議會に於て君が滿腔の大經綸が滔々たる得意の雄辯と爲つて滿堂を唸らせるや必せり、敢て刮目して待つ、茲に久濶を叙し好漢の健康を祝す。

（新六、九、八、）

【下】

鈴木君足下　僕既に足下を以て月並的政客の匹儔に非らずして、糟に鍬形毛鞘の大將格たる素質充分なるを證言する所ありたりと雖も、更に人言に聞き我叙述に裏書せんかな、當市實業界の花形にして現製網株式會社支配人石塚彦輔君は足下を評して當世稀覯の剛健なる意志と灑落たる情操に富む新



進の實業家として稱揚せり、又足下の政友奥村代議士も口を極めて其人と爲りを嘆美し人格を敬賛して將來爲すあるの士也とせり、單に舊誼ありとのみを以てして、豈妄に溢美過褒の言を試みるものならん哉。

鈴木君足下、僕不敏自ら揣らざりしも、往年我國に民權自由の橫溢せし當時より政治に於ける一貫せる主張を有することは足下の熟知する所ならん、而も僕近來の政黨に對し一種の厭氣を生じ自然之に遠ざかりつゝあるを遺憾とせり、其厭氣の崩したる因由を尋ぬるに主として感情に出發したるもの多きを以て、之を代表するに頗る大人氣なきを感ぜざるに非らずと雖も、今此處に一二の不滿なる點を擧げ敢て足下の敎を乞はんとす、足下既に堂々たる一個の代議士たり、將た語弊あるべきも黨人の片割れたり、他山の石として其璞を磨くの一資料とならば望外の幸也。

鈴木君足下、足下は如何に見るや近頃政黨の色彩が著く官僚化せしことを、又見すや頗る階級的臭味を帶び來りしことを、元來政黨なるものは云ふ迄も無く、政治的主義及政見の一致せる者の集團に過ぎずして其隻結分子に尊卑上下の存すべき筈なく、隨て階級的に規律を受くべき何等の不自由之れなきを原則とすべき也、彼の官公吏が官制なる不可侵の權威に服從する如き上下の規律存せざるなり、否な始めより黨中に上下なる階級を意味すべき熟語ある筈なき也、然るに事實は大に然らざるものありて、官制にも比すべき嚴然たる黨則若くに黨紀を楯に黨員の一進一退も苟をせしめす、其不自由さ

窮屈さ加減僕等放埒に慣れたるもの〻到底堪ゆる所に非らざる也、特に僕の最も厭らし〻感ずる一事は幹部と稱する輩が傲然たる態度を以て上官風を吹がし指揮者振る面惡さにあり、僕が黨籍を脱し悠々自適の境に身を措く所以之が爲めなり、固より僕と雖も立憲政治の下政黨の存在を無用視する程頑迷の徒には非らじ、特に足下の黨籍を有する政友會には舊知の同志者最も多く、他黨に比し緣因甚だ深か〻るべき關係ありて同黨の盛衰隆替と見ること豈吳越の肥瘠觀と同一視すべきものならんや、僕は寧ろ足下の力量に信賴し同黨をして大に刷新改善の機を得せしめらるべきを期待して已まざる也。

鈴木君足下、終に莅み足下の實業家たり政客たる資格に對し奮起一番大々的手腕の發揮を乞ふものあり、何ぞや曰く我國財政經濟の大策樹立の努力即ち是れ也、思ふに今の秋に方り國運の隆替に關する問題一二に止まらざる可しと雖も、因つて以て國運の繫りて經世家の双肩にある重大案件は、戰時膨脹せる經濟界を燮理按排すること〻、戰後財政策を計圖樹立する程重大なるは莫し、世間近視の徒妄に戰時貿易の順調に醉ひ、唯夫れ羔の濃味を忘れず膾の鮮旨を願るの遑なきは自ら其味神經の鈍磨を悟らざる愚態にして國家の重を以て任ずる士人の一大憂患とする所たらずんば非らず、足下聞ずや我國が七億の正貨を抱擁して成金を矜らんとするに對し、米國は一擧二百億の富を攫取して尙ほ滿足せず、金、鐵輸出禁を斷行し更に生絲輸入禁も敢てせんとして憚らず、有らゆる智惠を絞り畫策經營到らざるはなく、有らゆる工夫を凝らし術數謀略極めざるはなきに非らずや、世間小策士小才人少なしとせざるも、此國家死生の問題の繫る重大案件を托するに足るもの黨人中幾人かある、足下たるもの豈吾徒の信託に孤負して可ならん哉、聊か景仰の情を披陳して望む所更に饒きを加ふ。

（新、六、一〇、六）

# ◉與井手二郎君書

井手君足下、想起す本年初春の候尚ほ殘りの雪消えやらず、肌寒き上野發の夜行滊車中同勢七騎の勇將猛士が、足下を中心として東北逐鹿戰陣に振旅の光景を、僕當時客將の格にて遊説部隊に參加して其行の末班を汚すの光榮を得たり、一行が揚々として昂けし冲天の意氣は既に此時三軍を呑むの概ありき?!、決戰の期殘す所僅に旬日最早其進退駈引に悠々謀議を凝らすの餘日存せず、直に敵の牙城に迫り白兵戰を開くの外なかりし也、一軍の意氣其絶頂に達せるも宜べならずや、翌黎明滊車は此の精鋭を載せて郡山の本營に着せしめたり、匆々旅裝を解くに遑なく足下が颯爽たる雄姿は演壇に現はれ、懸河滔々の快辯幾萬言『地盤論』てふ好題目を提げ……政黨の地盤なるものは、往時封建制度の遺物なり、恰も各領土に割居する領主が絶對權威を振ひ領土領民に臨みたる如く到底今日我立憲治下の進歩したる思想と容るべからず云々……の獅子吼は眞に天下の絶觀にてありき、續て信夫に健闘し、田村に突擊したる武者振りの立派さは、假し敗戰に了りたりと雖も遺憾なかりし也。

井手君足下、足下が辯論に雄たるは勿論、其文藻に長する兩刀使的多能の士たることは當世黨人中に多く得易からざるなり、惜哉時利あらず昆谷壇上に送る能はずして空しく髀肉の嘆を發せしむるに





至れり、而も足下の出馬に依り戰陣の空氣を新にし、逐鹿界に一の新記錄を作りたるに想到するに迄んて聊か自ら慰むるに足れりとせり、僕不敏なりと雖も當時の大勢を觀取するに一隻眼を有し居れり、思ふに足下が尺寸の地盤を有せざる、而も勁敵河野磐洲の根據地に單騎孤劍突進の作戰の裏に潛める偉大のサムシングあるべきを知ると同時に憲政、政友兩黨が各定數の候補者を擧ぐるに方り、磐洲翁の勢力を三分して他の二候補者に援助する方略が甚麼に政友派に打擊たるべきかを思はしめたり、果然憲政派は狼狽して陣形大に亂るゝに至れり、道の磐州翁も自己の防戰に急にして他を顧るの遑なく遂に二名の候補者を見殺にするの已むを得ざるに至つて、足下が犬死ならざる名譽ある戰死者たるを稱揚せざるを得ず、結局豫定の計畫たりしやも知れざりし也。

井手二郎君

井手君足下、足下名譽の敗戰後は自ら身を實業方面に委ね、汲々として軍費の蓄積を計圖する所あ